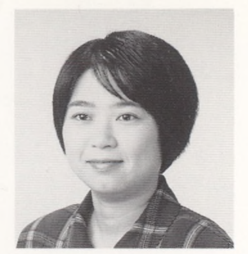

LUNAR 2
ETERNAL BLUE
レミーナただいま修業中!
重馬 敬 原案
細江ひろみ 著
角川スニーカー文庫



●細江(ほそえ)ひろみ

1963年9月21日生まれ。F.E.A.R.所属。システムエンジニアとして8年間従事した後、物書きとなる。『プリンセスメーカー ゆめみる妖精』(ファミ通ゲーム文庫)など、11冊の著書がある。好きなもの、読者からのはげましの手紙。

カバーイラスト/船戸明里
カバーデザイン/小林博明(KPlus artworks)

LUNAR 2

ルナ

エターナルブルー

レミーナただいま修業中！

重馬 敬＝原案
細江ひろみ＝著



角川文庫 11034



レミーナただいま修業中！





LUNAR 2（ルナ）
エターナルブルー
レミーナただいま修業中！

重馬 敬＝原案
細江ひろみ＝著



角川文庫 11034

目次

口絵・本文イラスト／船戸明里

プロローグ

ルナ。

女神アルテナの創りし、天に青き星を頂き、地に魔法あふるる、四竜の世界。

人は天の青き星から、女神アルテナにいざなわれて、アルテナの創造せしこの世界にやってきた、という伝説がある。

しかし、邪なるものは常に人を脅かした。

よってルナは、女神アルテナの加護を必要とし、人は女神と、人より四竜によって選ばれし英雄……ドラゴンマスターと四英雄によって、守られてきた。

ルナを訪れたとき、酒場で話題に困ったなら、隣あった人に「一番好きな英雄は誰か？」と、たずねてみるといい。

たちまち周囲を巻き込んで、両手でも足らないほどの代々の英雄たちの名前が挙がり、それぞれが熱い口調でお気に入りの英雄物語のエピソードを、披露し始めることだろう。

その、繰り返される正義と悪との物語の中に、度々登場する名前がある。

ヴェーンの魔法ギルド。

そのギルドを司る、オーサ家の女当主。

魔法ギルドの拠点、魔法都市ヴェーンは空を飛び、数々の英雄を輩出し、その活動の拠点となり……。

……そして女神と英雄たちによって築かれた、平和な時代。

……その時代の末。

歴史と伝統の魔法ギルドに、ギルド史上もっとも若い当主が誕生した。

レミーナ・オーサ。

当主を継いだのは、十三歳のとき。

彼女もまた、後に英雄の一人として数えられることになる人物だ。

平和を求めるのが英雄だとして……、

だけど今はまだ、平和な時代なわけで……。

平和は英雄を必要としないわけで……。

彼女のイライラの原因は、おおむねそこにあった。

第一話　レミーナの平日


レミーナ・オーサ
14歳にして魔法の名門オーサ家の
当主でもある女の子。
黙っていれば万人が認める美少女
なのだが…。

第一章　レミーナ　勇者の訪問を受ける

「お母様！」

重厚そうな、大きな扉を一気に開け放ち、部屋の中に向かって叫んだのは、フワッと広がる明るい金髪の美少女。

ここまで、大急ぎで走ってきたらしい。

その金髪は、ふだんよりもさらにフワフワと広がって彼女をとりまき、白い肌の上で頰(ほお)が赤く染まっている。

これでゼイゼイと息を切らしていなくて、目を吊(つ)り上げていなければ、いや、そうしていてさえも、かなりの美少女。

彼女がレミーナ・オーサ。

十四歳に、なったばかりだ。

「あらレミーナ、ちょうどよかったわ。お客様に、ご挨拶(あいさつ)なさいな。

……紹介しますわ、娘のレミーナですの」

レミーナの母ミリアは、驚きもせず、のほほんとレミーナにそう促（うなが）し、そして微笑（ほほえ）みながら客たちにレミーナを紹介する。

だけど、レミーナはしっかとその客たちを睨（にら）みつけたまま、何も言わない。

客たち……。

……剣を携（たずさ）えた戦士風のニヤケた若い男。

……ローブをかぶり杖（つえ）を持った魔法使い風の、髭（ひげ）をはやした初老の男。

……それから白いマントの神官風の、太った金壺眼（かなつぼまなこ）の中年男。

三人は、この突然（とつぜん）の乱入者に目を丸くした。

それでもなんとか気を取りなおし、戦士が握手を求めて、微笑みながらレミーナに手を差し出す。

もっとも、微笑んでいるつもりなのは本人だけで、その笑顔はニヤケているといったほうが、ふさわしい。

「子供は元気が一番です。よろしくレミーナちゃん」

レミーナは、差し出された手をわざとらしく無視して、ミリアに食らいつく。

「お母様！　どこの誰とも知れぬ人たちを、家に入れないでくださいってば！」

戦士は決まり悪そうに、手を引っ込める。

もちろん、こんなふうに無視されたのだから、少し……かなり不機嫌（ふきげん）そうだ。

レミーナはそれも無視した。

だけどミリアは、……無視しているのやら、気がついていないのやらである。

「レミーナ。この方々は世界を滅ぼす魔王を倒すために旅をする勇者のみなさんで、わざわざ遠くから、魔法ギルドをたずねて来てくださったのですよ」

「でもって、資金やらマジックアイテムやらを、融通して欲しいんでしょ！」

レミーナは完全に怒っているけれども、ミリアはレミーナが、ちゃんと話を理解しているということが、嬉しいとでもいうかのように、微笑んだ。

「魔王を倒すには、特別な武器や防具や、いろいろ物入りですものねぇ……。

最近は旅の途中の宿代もバカにならないとか……」

そしてミリアは、少しだけ憂鬱そうな顔をして小さなため息をつき、こうつけ加えた。

「……レミーナ、あなたも最近物価が上がって大変、大変と……」

「お母様！　どこの馬の骨ともわからない勇者の生活より、我が家の家計を心配してください！」

「勇者を助け、世界を救うのは、我が家の使命ですもの。レミーナ、あなたも常々そうしたいと……」

レミーナは、ますます眉を吊り上げて叫んだ。

「もちろん、私だって世界を滅ぼす魔王がいるなら、どんな協力だって惜しみません！」

それからレミーナは、ゆっくり身体の位置を変えると、キッ！　と座っている勇者たちを、立ったまま正面上から睨みつけて、こうつけ加えた。

「……本物ならね！」

それまで唖然として成り行きを見守っていた三人の勇者は、一瞬何を言われたのかわからなかったようだが、ワンテンポ遅れて戦士が立ち上がる。

戦士風の男は、レミーナよりも軽く頭三つ高かった。

だから、今度は逆に男がレミーナを見下ろす形になる。

「我々が、偽者だとぉ！」

レミーナは気おされもせず胸を張り、毅然とその男を見上げて挑戦的な笑顔を浮かべると、勢い良くまくしたて始めた。

「あなたたちのやってることが、独創的だとは思わないことよ！　勇者って名乗れば何か手に入るって思ってるヤカラは、あなたたちが初めてじゃないんですからね！

そんな話いちいち信じてたら、ルナには今五人のドラゴンマスターと、八組の四英雄が赤青黄色に緑と紫、おまけに金銀七色の四竜十五匹と共に、六人の魔王と、三人の新魔法皇帝と、九匹の邪竜と戦っていて、三十の村と十四の町が廃墟になり、四回ルナが滅びたことになってるんだから。

そりゃもちろん最近は天気も悪いし作物も育たない。景気も悪いし、生活必需品だって値上

がりする一方よ。疫病や人攫いとか、いろいろ物騒な噂だってあるわ！

(ここで素早く深呼吸)

だけどね、どーして魔法ギルドが資金や貴重なマジックアイテムを、巨悪の証拠の一つも持ってくることができない、無能な勇者に提供しなくちゃいけないわけ？　大体勇者を名乗るんなら、今起きてることぐらい、自力でなんとかしてみせるべきでしょ？

しかもお金やアイテムは欲しがっても、助太刀は欲しがらないのは、変じゃない！」

レミーナは、顔は戦士に向けたまま、視線だけミリアに移し、先ほどまでの勢いを突然落として、バカ丁重にこうたずねた。

「それともお母様、この方たちはすでに何か勇者の証となるものを、見せてくださいましたのかしら？　でしたら私も、それを見たいものですわ」

そして視線を戦士に戻し、鼻で笑った。

「納得できるものを見せてくれたら、私が一緒に戦ってあげるわよ。そっちが今三人で、私が加わってちょうど四人。伝説通り四英雄といきましょ」

レミーナが本気でそう言っているのではないことは、その表情からわかる。

偽者という前提で、バカにしているのだ。

戦士は、真っ赤な顔をして、言葉を搾り出そうかとでもいうように、口をモゴモゴさせている。

すでに怒り心頭なのは、間違いない。

ここまでレミーナに言わせておいたのは、怒りと驚きのあまり、口が利けなくなっていたからだろう。

ついでに言うなら、魔法使い風の男は憮然と、神官風の男はオタオタと、しかし爆発寸前の戦士を止めようとはしていない。

そして戦士は、ついに反論をあきらめた。

片手でレミーナの襟首を掴み、勇者らしいとは言いがたい、怒りの雄叫びを上げる。

「このガキ！　下手に出ていりゃ、言いたい放題言いやがって！」

そしてもう一方の手を、レミーナを殴らんと振り上げ……。

「ぎゃぁ！」

戦士は、後ろにひっくり返った。

振り上げていた手で、襟首を掴んでいた手を、押さえている。

レミーナの方は、少々よろついたようだけれども、すぐに体勢を立て直し、自分の襟元を整えていた。

「まったく、女の子の襟元を掴むなんて、下賤な勇者もあったものね」

ミリアが、ちょっと困った顔で小首をかしげて、こう言った。

「レミーナ、勇者の方に乱暴はいけなくてよ。可哀想ではなくて？　それにしてもレミーナ、

あなたいつ火の魔法の呪文を唱えたの？　気がつかなかったわ」

　レミーナは、片手でこめかみのところを押さえて、眉間に皺を寄せる。

「部屋に入る前に、九割がた唱えておいたんです。

……お母様。この程度の火の魔法にビビッているようなら、もしこの連中が、自分のことを本物の勇者の卵だと思い込んでるのだとしても、自滅する前に家に帰れと言ってやるほうが、親切というものです。

　それに……」

　レミーナが、ちらりと神官風の男を見ると、彼はビクリと全身を硬直させた。

「それに、そっちの神官みたいな格好の人が本当に神官なら、すぐ癒すでしょうし」

　レミーナに睨まれ、神官風の男は、無言でプルプルと首を横に振る。

　そこに魔法使い風の男が、口を出す。

　彼は戦士と神官風の男を、指しながら、こう言った。

「ほっほっほっほっほ！　いやいやお待ちくださいレミーナお嬢さん。この男の無礼は、お詫び申し上げます。少々血の気の多い男でしてな。なに、そうでなければ、戦士など勤まりはしません。それにワシらは、こヤツが神官だとも、申し上げてはおりませんぞ」

　神官モドキは、尻餅をついている戦士を、助け起こす。

　一方レミーナは、薄く笑いながら、シレッと魔法使い風の老人に、真実を突きつける。

「ついでにあなたも、魔法使いじゃあない」
「ほっほっほ！　ワシも、魔法使いだとは申してはいないはず。そう思ったのであれば、それはお嬢さん、あなたの早とちりというもの」
そして老人は、ニヤリと笑ってつづけた。
「魔法ギルドに、他に人材がいるというなら、別ですが、現在ギルドのメンバーは、お嬢さんと奥様、お二人だけのはず。女性を危険な冒険に誘うわけには、いきませぬなぁ。
であれば、……まあ我々が歴代の英雄たちより見劣りするのは、認めましょう。しかしいずれの英雄も、人々に知られているのは英雄となった後の姿、冒険の始まりは、こんなものであったはずと、ワシは思っておりますぞ。
ワシらは必ず魔法ギルドの遺産を活用し、魔王を倒して名実共に英雄となってみせましょう。さすれば魔法ギルドの名も、再び人々に賞賛されるようになると、そうは思いはしませぬか？」
この男は、一応の下調べをしてきたらしい。
しかしレミーナは、その言葉に対しても、軽く鼻で笑って返した。
「あなたのことは、最初から魔法使いだなんて思ってやしないわよ。田舎芝居で魔法使いを名乗るのがせいぜいね。本物を騙せるとは、思わないで。
それに歴代の四英雄もドラゴンマスターも、その半分が女なのよ。ついでにいうなら、アル

テナ様もね。女だから誘わないだなんて、理由になりゃしない。ついでに魔法ギルドが管理しているマジックアイテムは、本物の勇者にだって無条件ではあげないわ。ちゃんと規定があるんだから」

しかし老人も、それでも負けはしなかった。

「ほう、お嬢さんが、勇者かそうでないかを、決めるとでも言うのですかな？」

「私が決めていいなら、あなたたちは違う。だけど、勇者だなんて言い張るんなら、試練の迷宮に挑戦させてあげても、いいのよ」

そしてさらに、グッと老人に顔を近づけ、まるで秘密を明かすかのように、声を落とし、ゆっくりと、しかし力強く、言い渡した。

「あ・る・の・よ。

伝説にも語られている通り、このヴェーンの地下には、魔法ギルドがそのメンバーの実力を試すために作った、宝箱と、怪物つきの、試練の迷宮がね！」

それからレミーナは、一息深呼吸してから、声を大きくして、つけ加えた。

「挑戦料は百シルバーに、まけてあげるわ！」

そして、男たちを順番に、無言で睨みつける。

魔法使いもどき、やくざな戦士、神官もどき。

れっきとした三人の大人の男たちは、すでに十四歳の美少女の迫力に、圧倒されていた。

睨みつけられて、キョトキョトと互いに視線を飛ばし合う。
やがて戦士が、火傷（やけど）をした手を擦（こす）りながら、仲間たちにこう言った。
「ふ、ふん。たいしたゴウツクバリぶりだ。さっきの魔法だって、オ・オレはちょいとばかり、お・驚いただけなんだ。もうなんともないぜ……。運良く火の魔法に恵まれて生まれただけじゃねーか」
戦士は、言っているうちに自信を取り戻してきたらしい。どんどん声が大きくなり、余裕の笑みも浮かび始めた。
「そうさ、誰だって魔法が一つ使えるさ。それをそれらしく、使って見せただけじゃねーのか？
魔法なんぞあてになるか！　剣の方がよっぽど頼りにならぁ！　剣なら使いきることもねーしな。
おう、いいじゃねーか。その迷宮に挑戦してやろう。だがよ、その迷宮に金目（かねめ）のもんが無かったときは……、正義の勇者としちゃぁ、許しちゃおけねぇから、覚悟しやがれよ！」
と、ニタリと笑う。
こうなると、もうどこが正義の勇者だか、知れたものではないけれども、戦士はまったく気にしちゃいないようだ。
そして神官モドキは更（さら）にオタオタし、そして魔法使いモドキは頭を抱え、小声で吐き捨てる。

「もうちっと、らしくできんのかッ！」
レミーナは口の中でブツブツ言った。
そして、人差し指を立てた。
その上に、小さな赤い火が灯る。
さらにブツブツ言い、親指を立てる。
そこに、小さな青い光が宿る。
男たちの動きが止まる。

……ルナ。
魔法に恵まれた世界。
人は魔法を一つ持って、生まれてくる。
その魔法を使うには、堅苦しい儀式も呪文も練習も、必要ない。
だけど、どんな魔法かは運次第。
火や風だったらラッキーだけど、シャックリや、食べ物を不味くする魔法に恵まれてしまうこともある。
役に立たない魔法が多いし、その日の分はすぐ打ち止めになってしまうから、魔法に頼らない人の方が多いけど、それでも魔法が身近にあることには、違いがない。

だけど……。

その限界を打ち破る者たちがいる。

それが魔法使いだ。

魔法使いは、呪文によって様々（さまざま）な魔法を使う。

だが魔法使いになるには、生まれながらに魔法力に恵まれ、幼（おさな）いころから専門教育を受けなければ無理だと、されている。

そしてオーサ家こそが、魔法使いたちの頂点に立ち、魔法教育を一手に引き受ける、魔法ギルドの当主を代々務める、ルナで最高の魔法名門の家系。

平時においては、ヴェーンにて魔法使いの育成に努め、ひとたびことあれば、女神アルテナを守護する四英雄とドラゴンマスターの活動を支援し、あるいはそこに名を連ねるという、まあ、ルナで一番ものすごい家系なのである。

もちろん伝説に名を残す、数々のマジックアイテムもまた、ここで作られた。

だからこそ、そのおこぼれでもいただこうと、やってくる者が、今でも後を絶たないのである。

とはいえこの時代、すでに何百年も、世界の危機とは無縁のままだ。

いくら平時においては非常時に備える魔法使いとはいえ、春はあまりに長すぎた。

もちろん、ルナは何の危険も不安もないパラダイスというわけではなく、同じ勇者の眷属（けんぞく）で

も、戦士や神官が不用とされることはない。

なのに魔法使いは、憧れの職業でも、実際的な職業でも、なくなってしまったのである。

いわば、潰しもきかなければ収入も見込めないくせに、高度な技術ばかりが必要とされる、専門職というヤツだ。

この時代、魔法使いそのものが、もはや伝説化しつつある。

どうやらそれは、レミーナの目の前にいる勇者たちにとっても、同じだったらしい。

とすれば、この勇者たちは何なんだ？　ということになるのだけれども、レミーナが問題にしているのは、まさにその点だった。

レミーナは、ゆらゆらと輝く火と光をそのままに、さらに何かを唱え中指を立てる。

すると、中指の先に、キラキラと輝く白くぼんやりとしたエリアが現れた。

良く見れば、無数の細かな氷の結晶が、くるくると舞っていることが、わかっただろう。

男たちの顔面が、蒼白になった。

少女が呪文で、複数の魔法を使う、魔法使いであることに、驚いたのだ。

レミーナは言った。

「さぁ、迷宮に行くの行かないの！　行くんだったら、さっさと百シルバー出しなさい！　だけど、最低これくらいはできないと、全財産どころか命まで迷宮に置いてくることになるから、覚悟しとくのよ！」

男たちの顔が、ひきつった。

「あわわわわわ」

最初に、神官モドキが逃げ出した。

そして、逃げた神官モドキと、レミーナを見比べてから、魔法使いモドキが、それを追う。

最後にヤクザな戦士が、……捨てゼリフを残して仲間を追いかけていった。

「ヴェーンのレミーナは、ドケチでゴウツクバリだと、言いふらしてやるからな！」

なんとも情けない捨てゼリフだけれども、レミーナは鼻で笑い、呼び出した魔法を、握りつぶして魔法力を回収しながら、きっぱりと言った。

「上等よ。あんたたちみたいなのが減れば、こっちも大助かりだわ」

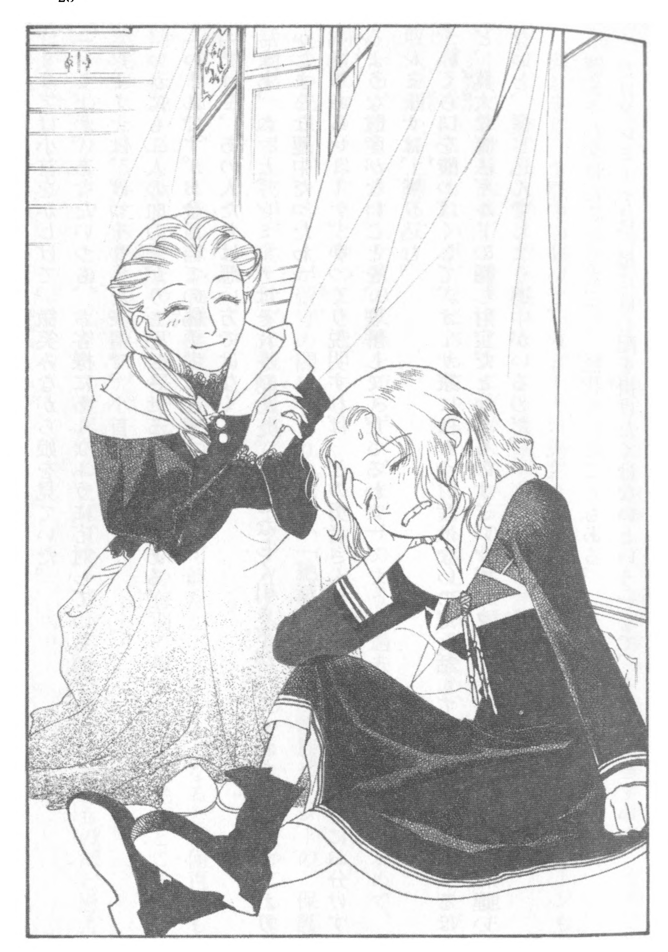
そして、男たちが行ってしまうと、ふうーっと息を吐き、肩の力を抜く。

いくら気が強くても、旧家で名家のオーサ家の一人娘として、おっとりした母に育てられてきたレミーナは、まだ十四歳。

自分よりも大きな大人の男三人の、そのうち一人は一応は武器を持った戦士のはしくれ。そういうやから相手に、打々発矢やりあって、気迫だけで追い払うのも、楽じゃあない。

……そう、三種の魔法を同時に呼び出すこと自体は彼女の才能を示してはいるものの、戦いになれば、それは剣の一振りにかなわない。

レミーナは、一部始終を「あらあら」といいながら見ていた母の向かいに座り込む。



ミリアは小首をかしげて、微笑みながら娘を見ていた。

「レミーナ。あなたいつも、お客様にあんなふうに応対しているの？」

レミーナは、げっそりした表情で、小首をかしげた。

いかにも二人の血の繋がりを感じさせる、しぐさである。

「いーんです。お金目当ての偽勇者なんですから」

「だけど、あの人たちは悪い方ではなくてよ」

「まあ、ね」と、レミーナはそれを認めた。「おとなしく引き下がってくれたんだから、わりかしましな連中だったわ」

「あらあらレミーナ。ゆっくり説明すれば、どの勇者さんも、もう我が家にはすでにお分けするような財産がないことを、理解してくださるわよ」

レミーナは、黙り込む。

いくら口を酸っぱくして、オーサ家にはもう財産はないのだと話しても、否定すればするほど、莫大な魔法ギルドの隠し財宝だとか、ものすごいマジックアイテムを、隠しているに違いないと、信じ込んでしまう連中がいるのだ。

実はそうした連中のせいで、レミーナは幾度か危ない目にもあっている。

誘拐されかけたこともあるし、怪我をしたこともある。

だけどレミーナは、母には心配を掛けたくはないという一心で、それをふせていた。

この魔法ギルドを廃止すると言い出した母を説得して、半ば強引に当主の座を継ぎ、存続させたという事情もある。

栄光の時代には空に漂い、魔法使いのみが足を踏み入れることを許されたというヴェーンも、今はどっかりと大地に根を張った、ごく普通の人々が暮らす町だ。

オーサ家の収入は、このヴェーンに住む人々からの地代に頼っていて、それだけなら大地主と言えないこともないが、なにぶん古い館をいくつも抱えているため、その維持費はたびたび収入を遥かに上回る。

一方、そういうオーサ家の状態を知らず、ゴキブリのように過去の栄光の残り火を求めて、胡乱なヤカラは次々とやってきた。

つい先日も、レミーナが留守の間に上がり込んだ、「絶滅寸前の希少種族ピクシーの、保護活動家」なる人物が、オーサ家に残る貴重なマジックアイテムを、ごっそりと持ち去ってしまっている。

ルナには、ヒト族のほかに様々な種族がいて混血も可能だが、ピクシーとなると、何百年も前に伝説からも消えてしまった、身長十五センチばかりの有羽の種族である。絶滅どころか、実在したかどうかすらあやしいものだ。

……つまりピクシーとは、私たちの世界でいえば、ケサランパサランのごときものだと思えばいい。

あなたが学生だとして、学校から帰ったとたん、家財が一切合財なくなっていて、母親が嬉しそうに、「今日、ケサランパサランの保護をしているという方がいらして、お話を聞いたらなかなか大変そうでしたから、あるだけ寄付しましたわ」と告げられたら、きっとそのときのレミーナの気持ちが、理解できてしまうに違いない。

母にはレミーナも、自分の口が酸っぱくなるほど、母の耳にタコができるほど、繰り返し主張した。

「世の中、いい人ばかりじゃないのよ！」

それは、ミリアも知っている。

だけど、知識としては知っていても、実生活には役立たない。

相手が困っているといえば、手を差し伸べてしまう。

それが、ミリアだった。

ミリアは、微笑みながら娘を見つめる。

レミーナは、黙り込んで母を見つめる。

そしてついに、レミーナは小さくため息をついて、微笑んだ。

「わかりましたわ、お母様。今度からは、もう少しお客様のお話を聞いてから、穏便にお話することに、いたします」

魔法ギルドは、世界を守るという使命を帯びている。

その当主は、弱者に優しく、悪に強く、威厳に満ち、……カリカリしたり、ケチケチしたり、ガツガツしたり、ドタバタ慌(あわ)てたりするものじゃあないと、レミーナは思っているのだ。
思っていても、つい生活に追われて、カリカリしてしまうのがレミーナなのだけれども、だからこそレミーナにとって、ミリアは自分の、そして魔法ギルドの理想の姿。
そんなレミーナの想(おも)いを知ってか知らずにか、ミリアは微笑みつづけている。
「それがいいわ。ところでレミーナ」
レミーナもミリアに、上品に微笑み返す。
「なにかしら、お母様」
「あなた出掛けるとき、行商人(ぎょうしょうにん)のラムスさんを連れて来ると、言ってなかったかしら？」
「いっけなーい！」
今までの上品さも何のその、レミーナは椅子(いす)から飛び上がって、ワタワタと部屋の外へと駆け出していった。

第二章　レミーナ　商人と交渉する

「とはいってもねぇ、レミーナちゃん」

レミーナの向かいに座って、ミリアが入れたお茶をすすっているのは、小太りで老けた童顔の若者である。

商売をするとき若く見られすぎては信用されないというんで、わざとおっさん臭くしている彼の見かけは、生まれながらの童顔とあいまって年齢不詳ではあるけれども、実は十七歳。

名前を、ラムスという。

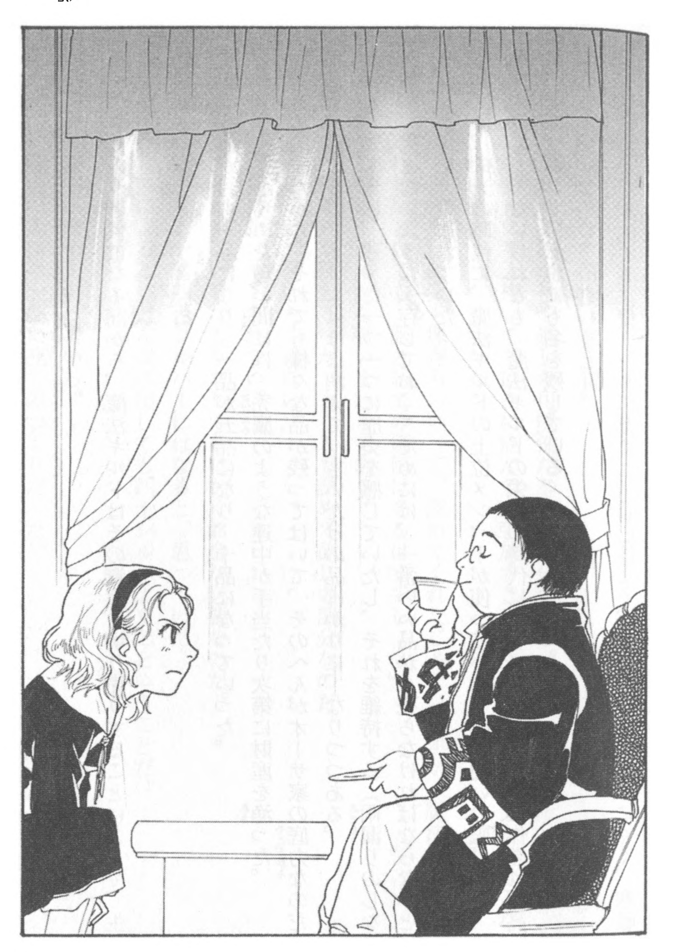
メリビアという大きな町にある老舗の商家の若旦那で、現在行商人として各地を旅しながら商売の修業中といった身だ。

今日はその行商生活最後の日だった。

ラムスは、美味しそうにお茶を一口すすってから、こう言った。

「炎の剣とか氷の盾なら、欲しがる戦士がいっぱいいるよ。誰でも使える火の魔法の杖だって、高く引き取るさ。

だけど、いくらいい品でも、魔法使いの服を欲しがる人は、いないんだよ。……新しい服で



もね」

レミーナは、渋い顔だ。

そう、レミーナの代になる前から、魔法ギルドはその資産を切り売りすることによって、生計を立ててきた。

最初は一年に一品。

次第にそれが月に一品になり、一品が五品になり、十品になっていった。

ミリアが当主を務めた短い間には、禿鷹のような連中が手当たり次第に財産を漁った。

歴史ある旧家だから、それでも様々な品が残ってはいて、そのへんがオーサ家の底力なのだけれども、めぼしいアイテムはほぼ消えて、古いだけの品ばかりに、なりつつある。

だけどレミーナは、残った一つ一つに歴史を感じていたし、それを維持する（雨漏りのしない部屋に、傷まないように保存しておく）ためには、一番いい品から売らなければならないというジレンマに、苛まれていた。

で今回は、栄光の時代に、魔法ギルドの上位メンバーが使っていた、魔法使いの服。

魔法の品でこそないけれども、魔法ギルドの栄光の時代に、金に糸目をつけずに作られた高級品、そのブランドは伝説にも名を残している。

デザインもシックで、布地も最上質。

勇者を目指す活動的な魔法使いたちのために、着心地よく、動きやすく、傷みにくく、寒暖

にも対応できるよう、数々の工夫がなされている。
歴史と伝統を感じさせる逸品だ。
伝説に名を残した英雄が袖を通した可能性だって、充分にある。
レミーナは、考えに考え抜いて、悩みに悩んで、手放すことを決心したのに、ラムスはこれを買わないという。
「だってラムスさんも、品質も保存もいいって、認めてくれたじゃないですか。魔法使いのっていうところはおいといても、服としての価値はあるはずでしょ？」
レミーナとしては、不本意な言いまわしである。
『魔法使いの』っていう部分こそが、もっとも認めて欲しい部分なのだ。
自分からこんなこと、言いたくはない。
だけれども、背に腹は代えられない。
多少現実も、わかっているつもりだし、とにかくお金が必要なのだ。
魔法使いの制服は、一着四百シルバーにはなると、思っていた。
ところがラムスによると、どんなに出しても四十シルバーまでということだ。
これでは話にならない。
既にラムスから、大金を借りている。
服を売った金を、返済の一部に充てるつもりだった。

このままでは、家屋敷を売らなければならなくなる。
目論見が外れて、レミーナは頭がクラクラしてきた。
……となると、家を失わないためには、何があったかしら？　あれ？　それとも、これ？
イヤだわ！　あれもこれもイヤ！　とにかくコレ以上、魔法ギルドならではの財産を、失いたくはないわ！
「レミーナちゃん。怒った顔も可愛いけど、笑ってたほうが可愛いよ」
レミーナの苦悩もどこふく風。
ラムスは中途半端な二枚目が口にしたら、キザったらしくて、背中がむずむずするようなことを、さらりと言ってのけた。
三枚目で、愛想があるから、笑って許せるセリフである。
使っても減らないものなら、出し惜しみせずとことん使うのが、商人としてのラムスのセオリーだ。
リップサービスとスマイルは、その代表格。
だけどレミーナも、そんなお世辞にノせられる方ではない。
自分自身の可愛さを承知しているから、ラムスは事実を指摘したにすぎないと思っているし、
その上自分の真価は魔法力にありと、確信しているからである。
ラムスは納得しないレミーナに、言葉をつづけた。

「レミーナちゃん。需要と供給の問題なんだ。欲しがる人がいなければ、どんなに歴史と伝統あるいい品だって、高い値はつかない。
高価なローファーシルクを、旅の普段着にしたくはないし、晴れ着ならもっと華やかな服を選ぶんだよ。
レミーナちゃんだって、いくらお買い得でも高級神官服は、買わないだろ？」
そしてラムスは、お茶をすすりながら上目遣いにちらりとレミーナを見て、彼女がまだ不満げな顔をしているのを認めると、少しばかりレミーナ向けのお世辞をつけ加えることにした。
「この服の真価を理解できるのは、レミーナちゃんだけだ。わかっていない人々に、安く売っちゃあ、服が可哀想だと思わないかい？　魔法ギルドを復興したら、また魔法使いたちに、着せてあげなくっちゃ」
つまりは、自分は買わないということだ。
レミーナは怒りを収めたようだけれども、今度はいかにも困ったーという表情になる。
「だけど、このままじゃラムスさんから借りているお金、返せそうにないわ。返済の期限は、もう切れているのに」
「そうだねぇ……」
ラムスは、またもお茶をすする。
彼も今、今後オーサ家とつき合いつづけるべきかどうか、その判断の瀬戸際に立たされてい

た。

一昔前まで、ルナ全土に支店があったほどのラムス商会だけれども、彼の父が行商中に行方不明になった後、祖父が商売に失敗し、店もメリビアの本店を残すのみで、破産寸前。

ラムスが行商をこれで最後とするのも、祖父に代わって店を切り盛りするために、メリビアに腰を落ち着けるためである。

オーサ家を助けている場合ではない。

貸してる金を即座に回収して、店の立て直しに全力を尽くすのが、この場合の常識だ。

だけど、オーサ家に貸しているお金を回収するには、土地と家財を差し押さえる以外に、方法はない。

古い屋敷は取り壊し、更地にして人に貸し、タダ同然の地代を世間並に引き上げれば、利益も十分でると、既に試算も済んでいる。

……だけどそれは、したくないよなぁ。

と、ラムスは考える。

相手が借金を踏み倒そうとするようなヤツであれば、ラムスだって遠慮はしない。

だけど、どうにかして返そうとしている相手から、その生活の一切合財を取り上げることは、彼の商人としての美学が、許さなかった。

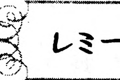
ラムスの商人としてのカンも、おっとりしたミリアはともかく、この気丈なレミーナとは手

を切るなと、告げている。
前向きな者には、借金してでも金を貸せというのが、ラムスの商売の信念なのだ。
そういったタイプの者は、どんなに痛めつけられても立ち上がり、いずれ必ず大成する。
そうなったとき、ラムス商会がレミーナの不倶戴天(ふぐたいてん)の敵となるか、それとも無二の戦友となるかは、今このラムスの判断にかかっているというわけだ。
もっとも、レミーナが成功してお金を返してくれるようになるまで、ラムス商会が保(も)てばの話ではあるけれども。
つらつらとそんなことを考えながら、お茶が描く波紋(はもん)から目を上げると、レミーナがじっとラムスを見つめている。
するとそのときラムスの口から、自分でも思ってもいなかったセリフが、すらすらと出てきたのだ。
「ねぇ、レミーナちゃん。魔法ギルドは新商品を開発すべきだよ」
「え？」
レミーナが、きょとんとした。
ラムスは、いかにも以前から考えていたかのように、思いつくまま話し続ける。
「ある物を売るだけじゃ、売り尽くせばおしまいさ。だけど、魔法ギルドこそが、数々のマジックアイテムを作り出してきた、トップブランドじゃないか。

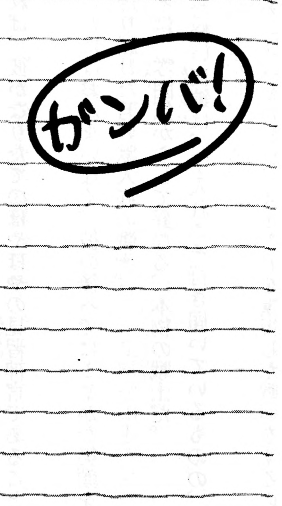
レミーナちゃんも、先人たちに学んで、現代のニーズに合った、新しいマジックアイテムを作って売ったら、どうだろう？」

ラムスが話しおわる前に、レミーナは瞳(ひとみ)を輝かし始めていた。

……それはルナの通貨、シルバーの輝きだった。


レミーナのお小遣い帳


借金は分割払いとする。
ラムス商会へ、季節ごとに、
S30,000ずつ、二十五回。
ただし、借金を全額返済するまでは、
魔法ギルドが作製したマジックアイテムを、
すべてラムス商会に卸すこと。



第三章　レミーナ　神官と遭遇する

長い階段が、まるで青き星まで届けとばかりに、天に向かって立ち上がっている。
ティオは、それを見上げたまま硬直していた。
十三歳。
少女のように可憐な、少年である。
少年というより、「男の子」と呼ぶほうが、しっくりくる。
ティオのちゃちくて新しい神官服を見れば、彼がなりたてのほやほやの見習神官であることは、誰の目にもあきらかだ。
ティオがほうけて階段を見上げていることにはおかまいなく、彼の後ろでにこやかな笑顔を浮かべて立っている男は、彼をここまで送り届けた若い獣人族の戦士。
先日オーサ家にやってきた胡乱な戦士とは、雰囲気からして異なる、本物の戦士だ。
きっちりと引き締まったその身体を包む軽い皮鎧は、手入れこそ行き届いているものの、数々の傷みを残し、彼が百戦錬磨であることを示している。
着ているものが皮鎧なら、剣は扱いやすい軽いものとし、スピードを重視した戦いをするの

が基本なのだが、彼は背丈の半分ほどもありそうな、そして幅も手を広げたほどもありそうな、ゴツイ剣を背負っていた。

男の名を、レオと言う。

レオは、ティオの背中を力いっぱい叩いた。

「少年！　さあ、ここからは一人で行きたまえ！　アルテナ様のために、一生懸命頑張るのだぞ！　では、さらばだ！」

ティオはおもいっきりつんのめる。

そして戦士は、硬直しているティオを残して、きびすを返し帰っていく。

……レオは、とてもせっかちだった。

それに、ここからはティオ一人で、使命を果たさなければならない。

レオから見て、ティオは少々……いやかなり頼りない。

しかしティオも男のはしくれ！　手伝ってやれるのは、ここまでだ！　艱難汝を珠にす！やってできないことはない！　やらずにできることもない！　少年よ大志を抱け！　いつかこの地に輝くばかりの大神殿が、お前の手によって建立される日を、楽しみにしているぞ！……と、レオはティオを一人残して立ち去った。

レオ。

彼は、後にレミーナと共に、英雄として名を残す戦士である。
しかし現在はたった一人で、アルテナ神団の名の下、人々を脅(おびや)かす怪物退治のために、各地を旅している。
今回はその途中、ティオをここまで護衛してきたというわけだ。
後日レオとレミーナが出会うまでには、二年近くが必要とされる。
それ以前に、今回のようなニアミスも幾度かあるが、本書における彼の登場シーンは、これでおしまいである。

ティオが我に返ったときには、すでにレオの姿は見えなくなっていた。
そこでしかたなく、階段を上り始めたのだが、もし今の彼を見る者がいたら、まるで絞首台(こうしゅだい)の階段を上っているような顔をしていることに、気づいたことだろう。
ティオは、ここからずっと遠く離れた地で、生まれ育った。
平凡な少年であったから、もちろん空を漂う都市ヴェーンの伝説は、伝説(おはなし)としてはよく知っていた。
ヴェーンに神殿を建立せよと命じられた時も、伝説と同じ名前の町があるんだなー、とは思った。
それに、主要な航路や街道からも外れた、かなりの田舎(いなか)ということで、アルテナ神団は神団

附属の戦士を一人、……レオを……、旅の護衛につけてくれたぐらいだ。
だから、というわけでもないけれども、小さなそれっぽい石碑の一つでも残っていたら上等なくらいの、村に毛のはえたような町だと、ティオは考えた。
ルナでは、伝説の英雄縁の家系だとか、アルテナ様や英雄の誰それが座った石だとか、水を飲んだ泉は、珍しくない。
だから魔法ギルドやオーサ家の話を聞いたときも、驚きはしなかったが、本気にもしなかった。
だけど今、ティオの目の前に聳え立っているのは、どう考えても不自然な、上部の方が大きな巨大な台地と、その上部まで台地をえぐるように掘りぬいて作られた、一本道の果てしない階段である。
まともな人間が、わざわざこんな台地の上に、町を作るとは思えない。
これ全体がヴェーンの遺跡なら、だとしたら本当に、世界にとんでもない影響力を持った魔法ギルドが、今でもあるかもしれないと、そう思ったのだ。
冷静に考えてみれば、田舎だから遺跡も小さいだろうとか、遺跡が大きいから魔法ギルドも大きいだろうというのは、まったく根拠のない連想にすぎない。
だけどティオは、……いつ果てるとも知れぬ階段を、延々上りつつあるティオは、……つまり、怖い考えになってしまった、というやつだ。

階段には、途中いくつもの踊り場があった。
もちろん、上に向かう者が休むためでもあるけれども、それよりも、足を踏み外した者が、それ以上落ちないためには、どうしても必要なのだ。
踊り場ごとにベンチがあって、階段のどのあたりにいるのかがわかるように、番号まで振ってある。
だけどティオは、踊り場に気づけぬほど、緊張しきっていた。
そしてその緊張は、階段を上るごとに高まって行き、息も絶え絶えになりながら、まるで足を動かす苦行でもしているかのように上りつづけ、そしてついに終点が見えたとき、ティオは階段から解放される嬉しさから、最後の力を振り絞って、駆け上がったのだ。
この苦行から、この自分を押しつぶさんばかりの両側の壁から、解放されると思ったとたん、未来も薔薇色に思えてきた。
……このヴェーンを治める魔法ギルドの、当主のミリアさんという方は、困っている者には必ず手を差し伸べる、とても優しい方だというから、神殿の建立にも協力してくれるに違いない……。
ミリアの人の良さは、ティオの耳にまで、入っていた。
一方、似非勇者たちの努力にもかかわらず、レミーナのドケチブリは、当時はまだ知られていなかった。

ルナには新聞も電話もなく、それに代わる魔法もないため、情報は、私たちには想像もできないほど、ゆっくりとしか広まらない上に、不確実なのである。
……ティオは、陽射(ひざ)しあふれるヴェーンの町に飛び込もうとして……ぶつかった。
そう、今まさに町を出発しようとしていた、レミーナに。
ティオがぶつかる直前、レミーナはこう叫んでいる。
「前を見なさい！」
だけどティオは、全然そんなこと聞いちゃいなくて、レミーナは狭い階段の上で避(さ)けきれなくて、回れ右をして階段の上に逃げきろうとしたのだけれども間に合わなくて、……衝突した。
そして反動で、二人とも尻餅(しりもち)をついた。
レミーナは、階段の一段上に腰掛(こしか)ける形で。
まあ、たいしたことはないというやつだ。
だけどティオは、一段下の段に向けてひっくり返った。
最悪というやつである。
しかも、ティオがひっくり返る前に、何かにつかまろうと振り回した手がつかんだのは、レミーナの荷物だった。
ティオは荷物をひったくってから、見事(みごと)に階段をコロコロと転(ころ)がり落ち、最初の踊り場でその身体は止まった。

しかしそれまでに、手にしていたものは、見事に石作りの階段の上から、ぶちまけられてしまったのである。

＊

ティオがベッドの中で目を覚ましたとき、窓から入る白い光の中で、一人の美しい女性が、彼に向かって微笑んでいた。

「…………」

その女性が、ティオになにか語り掛けたけれども、彼にはそれが優しそうな声だとしか、わからなかった。

……アルテナ様だ……。

ティオは最初そう思い、そしてハッと気づいて飛び起きようとした。

……ボクは、階段から落ちて死んだんだ！　使命にとりかかることもなく！　こんなボクの魂が、アルテナ様の前に召されるわけ、ないじゃないか！　ルナの裏側にある、青き星の恵み届かぬ不毛の地で、永遠にさまよわなくっちゃいけないんだ！

それがアルテナ神団が教える、神にそむいて死んだ者の魂の処遇であり、ティオはそれを素直に信じていた。

すると、そのアルテナ様は起きあがろうとするティオをそっとベッドに押し戻し、優しくテ

ィオの頭をなでる。

……アルテナ様は、どうして使命に失敗したボクに、こんなにも優しくしてくれるんだろう。

「ボウヤ、どこが痛いの？」

こう聞かれてやっと、ティオは自分が生きていて、目の前の女性がアルテナ様ではないことに、気がついた。

ティオは、この任務につく前に、一度だけ本物のアルテナ様を、拝んだことがある。

遠かったし、まわりの人々はみなティオよりも背が高かったし、押し合いへしあいして、みな少しでも前に出ようとしていて、小さなティオはどんどん後ろへと押しやられていったので、ほんの一瞬ちらりと見ただけだったけれども、若くて美しくて神々しくて、近寄りがたい雰囲気をまとっていた。

今目の前で穏やかな微笑みを浮かべ、ティオを覗きこんでいるのは、彼の母親くらいの中年女性で、美しくはあったけれども、アルテナ様のような仰々しさは、かけらもない。

彼女は、何度も繰り返したであろう質問を、再び口にした。

「ボウヤ、どこが痛いの？」

「はははははい！　どこも痛みません！」

ティオは飛び起き、そしてすぐにベッドにつっぷした。

「あう～」

ティオは、情けない声を上げて後ろ頭をまさぐる。
後ろ頭が見事に、腫れあがっていた。
いわゆる、タンコブというやつだ。
それまでなんともなかったのに、一度気づくと、頭が割れそうなほど痛い。
「ボウヤ、急に起き上がっては、いけませんよ。アルテナ様は、あなたの怪我を癒してくださいましたけど、あなたが今後もっと注意深くなれるように、そしてしばらくゆっくり休むようにと、痛みを残してくださっているのですから」
「わかってます！」
ティオは跳ね起きて、そう叫んだ。
彼の性格からすれば、これはかなり珍しい。
少し怒りながら、ワザとらしく自分の神官服を整えてみせる。
つまり、自分は端くれとはいえ神官なのだから、言われるまでもなくそんなことはわかっているというわけだ。
もちろん、ボウヤなどと呼ばれて、少々子供扱いされたことに対する反発や、優しそうに微笑んでいるその女性への、甘えがあったこともある。
つまり、ティオは見かけ通りの、背伸びしたいさかりの、子供だった。
「ボ・ボクは……」



それでも、気の弱いティオが強がれたのもそこまでで、優しげな微笑の前で、何も言えなくなってしまう。
そんな彼の内心を知ってか知らずか、彼女の方が問い掛けた。
「あら、そうね。まだあなたの名前を、聞いてなかったわね。なんというお名前なの？　そして、ヴェーンには、どんな御用でいらっしゃったの？　誰かを訪ねていらしたのなら、その方に連絡いたしますわよ」
背伸びしていたティオの肩の力が、みるまに抜けて行く。
「ボ・ボクは、ティオといいます。アルテナ神団から派遣されてきた、神官です」
それでも「神官です」というところに、ティオは少し力を入れた。
自慢げですらあった。
子供ながらもアルテナ様の覚えめでたき、神官様というわけだ。
ティオはこの真新しい神官服の袖に手を通したときの感動を、忘れてはいない。
だけど次の一言で、ティオは完全に脱力することになる。
「あらまあ、あなた神官さんですの？」
普通……、神官服を見ただけでわかりそうなものだ。
そしてティオは、彼女に促されるまま、自分がアルテナ神団から派遣された神官であることや、そしてこのヴェーンにアルテナ様の神殿を建立する使命を帯びてやってきたことを、とう

とうと語ったのである。
もう、これ以上ないというくらいの熱意を込めて。
それは、自分でも自分に酔っちゃうくらいに、一生に一度できるかどうかというくらいの、素晴らしい演説だった。
そして彼女は、ティオが話している間、ときおり相槌をうちながら、余分な口もはさまず、聞きつづける。
いわゆる、聞き上手というやつだ。
そして話が終わったとき、にこやかなままこう言った。
「まあまあ、遠くからよくいらしてくださいましたわ。わかりました。私が、ミリア・オーサですの」
もう、このときのティオの喜び様ったらなかった。
なにせ早速、彼が会うはずだった人物にめぐり合い、話を聞いてもらえた上に、なかなかよさそうな反応を得たのだから当然だろう。
ティオはさっそく、アルテナ様にこのめぐり合わせを感謝する祈りを捧げる。
まさに人生最高の瞬間であり、本当に人生最高の瞬間だった。
つまり、あとは下り坂……。
「だけど、レミーナは何と言うかしら？」

「レミーナ……、さんですか？」

まだ喜びの余韻にひたりつつも、ティオはなにかひっかかるものを、感じ始める。

「ええ。昨年私は娘のレミーナに、当主の座を譲りましたの。そのお話、あらためてレミーナに、してくださいな。だけど……、ちょっと難しいかもしれませんわね」

「なぜですか？」

だんだん、そのひっかかりは、大きくなってくる。

「それはね……」

そして、現実がつきつけられた。

「あなたが私を、完全に怒らせちゃってるからよ！」

部屋の、開け放たれたドアから入ってきたのは、ティオより少しばかり年上の少女。

まるで彼女自身が輝いているかのように見えるのは、彼女の明るい、少しウェーブがかかった金髪が、彼女のまわりに後光のように、ふわりと広がっているせいだけでは、なさそうだ。

もっとこう内面から爆発するような、生気をあたりにふりまいていた。

それは高位の神官や、力ある魔法使いだけが見ることができる、魔法力のようだった。

……もちろんティオには、そんなものを見る力は、ないけれども。

簡単に言えば、彼女はとても怒っている。

その怒りの感情を、隠すこともなくあたりにふりまいている。

その怒りが、彼女を輝かせていた。
ティオは、少なくともその一瞬だけは、怖くはなかった。
逆に彼女を、美しいとさえ感じた。
まるで今まさに自分を食べようとして口を開いている伝説の怪物、黄金の獅子（しし）を、美しいと感じるがごとく……。
蛇（へび）ににらまれたカエルとも言う。
「紹介いたしますわ。娘のレミーナですの。現在の魔法ギルドの当主ですわ」
ミリアにそう言われるまで、ティオはずっとレミーナを見つめていた。

＊

「もーいい！　もーいいわッ！」
ティオは、ミリアに対する熱弁を再現しようとがんばったが、レミーナによってついに遮（さえぎ）られてしまった。
もっとも、それ以前にどんどん声は小さくなり、話は曖昧（あいまい）になっていたので、話せなくなったのが先か、遮られたのが先か？　という違いでしかない。
大きな、魔法ギルド当主の執務室。
重厚そうな大机。

その後ろには、ぎっしりと本が詰まった、巨大な本棚。
レミーナは、肘掛つきの椅子にふんぞりかえったまま、机の前にティオを立たせて話させたので、彼は神官学校で、級友の悪戯の責任を押しつけられて、校長先生に怒られているときのような気分になった。
レミーナも舞台設定も、校長先生ぐらいの威圧感がある。
それにもともとティオは、気弱なほうなのだ。
相槌に「ふん」とか、「それで」とか、「なーにが」とか、そんなようなことをブツブツ言われたら、熱弁どころか、何も話せなくなってしまう。
そしてレミーナは、トドメとばかりにこう言った。
「まったくあなた、何様のつもり！」
「何・様・って、あの、その、アルテナ神団の、神官で……」
何様と聞いたものの、それはもちろん質問ではなく、ティオの返事は無視される。
「だいたいね、私のことをがめついとか、守銭奴だとか言う人もいるけど、そんな私でもアルテナ様をダシにお金儲けしようだなんて思いつきもしなかったし、たとえ思いついたって、絶対やらないわよ！」
ティオは、びっくりした。
まさか自分の話やアルテナ神団の計画が、そんなふうに取られるとは、思っていなかったか

らだ。
いくら気弱でも、こればかりは反論せずには、いられなかった。
そういうとこではがんばる……がんばろうとする子である。
「お金儲けなんて、とんでもない！　人はみな、アルテナ様に感謝しなければならないのです！」
そしてレミーナは、借りたお金と言われたことは、きっちり返す。
「アルテナ様の像を神殿に置いて、癒しを求める人からお金を取ることと、アルテナ様に感謝することと、どういう関係があるっていうのよ！」
「そんな……。アルテナ様の像を野ざらしにしている、今の方法こそが、間違っているんです。神殿を建立し、アルテナ様の像を安置し、癒された人々が感謝の気持ちとして、神殿を管理するアルテナ神団に多少の布施を支払う。何が間違ってるというのですか？」
「なんで一方的に料金を決めて、あんたが取るのよ！　アルテナ様が取るっていうんならともかく！」
「お布施は、ペンタグリアにおわしますアルテナ様のもとへと、集められるのです」
「じゃあ、なに！　アルテナ様が集めたお布施で、どっかの町にでも出て、お買い物でもするっていうの！　アルテナ様がお買い物するだなんて話、聞いたこともないわ！」
「お金は神殿を建立したり……」

「神殿作るためにお金を取って、お金を取るために神殿作るっていうの！」
「そ……、そういうわけでは……、あ、ほら、えーと、そうだ、貧しい兄妹にアルテナ様がお金を与えたので、兄妹は解呪の薬を買ってお母さんに飲ませることができたっていう話が、ありましたよね？　きっと、そういうことに……」
「そんな話、聞いたことない」
「そんなー。ボクの生まれた町では、どんな子供でも知っている話なんですよ。それに、いい話でしょ？」
「じゃあなぜそのアルテナ様は、そのお母さんの病気を、治してあげなかったのよ」
「それは、その、えーと……、そうできない事情があったとか……」
「それに、そんなかわいそうな兄妹がいたなら、なぜ近所の神官が、助けなかったわけ！」
「ですから、それは……、きっと近くに神官がいなかったとか……」
「だったらなんで近所の人たちが、お金を出しあって、薬を買ってあげなかったのよ」
「つまりそれは、冷たい人が多かったということで……。そうなんです！　世間には、他人のことなんてどうでもいい冷たい人がいっぱいいるから、アルテナ神団がお金を集めて、困ってる人に……」
「ヴェーンは、違うわ」
「は？」

「ヴェーンには神官はいないけど、誰かが必要としていたら、誰かが必ず連れてくる。そのとき、困ってる人からその費用を取ろうなんて、考えないわよ！」

レミーナはそう言ったけれども、実のところヴェーンでは、こういう場合オーサ家が出すことになる。

それはともかく……。

ティオの顔は、レミーナに言われるたびに、こわばっていった。

アルテナ神団は、神官の奇跡の力に料金を設定している。

もっともこれは、アルテナ神団の専売特許というわけでもない。

過去にも例があるし、癒しや解呪の薬といったアイテムなんかは、材料費がかかることもあって、有料なのが普通なのだ。

それに普段から人々は、自主的なお布施や寄進で、神官や神殿を支えている。

さらにルナのどこにでも、誰の祈りにでも応えて、無償で疲れや怪我を癒し、活力や魔法力を与えてくれるアルテナ様の像があるから、神官の特別な力が必要とされることは、あまりない。

神団特有なのは、神官の力だけでなく、そのアルテナ様の像の利用にも、料金を設定したというところだ。

……それについては、神団にもそれなりの言い分があり、ティオは神団の神官学校で教わっ

た通りに、レミーナに説明しようとした。
「あの、ですが、つまり、世の中には優しい人とそうでない人がいて、今のままじゃ優しい人ばかりが損をするから、アルテナ様の力を必要とするたびに、一定額を神団が徴収し、それをアルテナ様の指示のもと、人々のために使うことにより、誰もが平等にですね……」
　実際アルテナ神団は、そうして集めたお金で様々な人材を各地に派遣し、人助けをしている。ティオをここまで護衛してきた戦士のレオも、そのような活動家の一人だ。
　この方法はなかなかの布教効果があり、実際人材を派遣する費用よりも、まあ、派遣する人材が、無給で働く信者であるということもあり、それにより集まる信者と寄進の方が、常に多くなる。
　それはそれとして、レミーナはティオの話に、納得しなかった。
　神団の言い分に嘘や矛盾を見つけたとか、そういうわけではない。
　本能的に、お金を出せと言われたとたん、警戒しただけの話だ。
「平等でしょうが博愛でしょうが、勝手に押し付けられるのは、ゴメンだわ！　ヴェーンの代表として、オーサ家の当主として、私は誰にもアルテナ様を、独占させないわよ！」
……このルナは、アルテナ様の存在なしには、始まらない。
　そのアルテナ様を、神団がきちんと奉るといえば聞こえはいいが、ようはレミーナが言うとおり、独占するということだ。

無償活動で信頼を得て、商売敵である他の神官を失業させ、アルテナ様の像を神殿に囲い込む。

失業した神官や、その素質がある者は、極力神団に取りこんでいく。

商売人は、こういう同業者つぶしの過当サービスを、ダンピングと呼ぶ。

レミーナにすれば、胡乱な勇者も、神団も、世のため人のため、あなたのために、お金を出しなさいという主張を繰り返しているにすぎない。

それでもティオの話をレミーナが聞いたのは、それが母ミリアの望みだったからに他ならず、それともう一つ、レミーナの方もティオに言いたいことがあった。

「ともかくね！　オーサ家には、神殿建立に出せるお金なんて、一シルバーもないの！　むしろ魔法ギルド復興のために、寄付が欲しいくらいだわ！　どう？　そのあなたのアルテナ神団が、本当に本当のアルテナ様のために働いているなら」

「本当に本当のアルテナ様が！」

私たちのために転生し、神団の中心に、いらしてくださってるんです！　とつづけようとしたティオの言葉を、レミーナはつづけさせはしなかった。

「私が話し終わるまで、黙りなさい！」

「……はい……」

「いい？　神団がアルテナ様のために働いているなら、そのアルテナ様を手助けする英雄たち

を多数輩出してきた、この歴史と伝統のヴェーン魔法ギルドの復興のために、寄付の一つでもできるはずよね！」

もちろん、ギルド復興のための寄付集めは、当主の大切な仕事である。

だからといって、この年下の、いかにも組織の下っ端である男の子から、寄付や組織のトップとの会見の約束を、得られるとは考えていない。

単に、「寄付をせびってくるヤツには、寄付をせびり返せば、撃退できる」という手法をラムスに教えてもらって、実践しているだけの話。

……効果はある。

ただし、ティオの返答は、レミーナを逆上させた。

「あー、でもー、アルテナ神団は、すでに新たな魔法ギルドを作るために、魔導師ボーガンを呼び寄せて……」

「なんですってーッ！」

十四歳でも、落ちぶれてても、魔法ギルドの当主レミーナは、各地に散らばるフリーの魔法使い……いや、今やただの魔法名人で、専業魔法使いなどいないのだけれども、そうした名人を、おおむね知っていた。

……魔法ギルドに、勧誘するためである。

その中に、ボーガンという名前はない。

レミーナが知る、魔法に関るボーガンは、ただ一人。
いつも金魚のフンのように、母ミリアにつきまとっていた、ボーガン。
ルナでは珍しい、まったく魔法力がない体質で、どんなに努力しても魔法が使えるアテがないのに、魔法ギルドで魔法使いを名乗りつづけていた、ボーガン。
自分は魔法が使えないくせに、ヴェーンの他の住民たちに、魔法使いとして尊大な態度を取っていた、ボーガン。
いつもサイフだけはシルバーで膨らませて、他のメンバーに、何かを奢ったり、プレゼントしたりして、自分を認めてもらおうとしていた、ボーガン。
レミーナが魔法ギルドの当主となったとき、お金でメンバーを、全て引きぬいて去った、ボーガン。
それが、魔導師。
あのボーガンが、力ある魔法使いというだけでなく、人格的にも認められ、師として尊敬される、魔法使いの尊称付きで呼ばれる？
レミーナは、あまりの怒りに、我に返った。
……同名の別人に違いないわ。
いくら各地のフリーの魔法名人を知っているとはいえ、見落としがあったのかもしれない。
「それって、デブでタコでタラコ唇で、動きが鈍くてネチャネチャした話し方をするボーガン

とは、違うわよね？」

まあ、人の外見をとやかく言うべきではないだろうけれども、確かにティオが見たことのあるボーガンは、……これまた一度だけチラリと見たことがあるだけなのだけれども、それでもレミーナの言うボーガンと、同一人物であると思われた。

「はい」

「なんですってーッ！」

ティオは、黄金の怒りのオーラを背負ったレミーナに、威圧される。

いや、黄金のオーラのごときは、フワリと広がったレミーナの髪だ。

怒髪天を衝くという、言葉通りの光景を、ティオは目の当たりにした。

……一応説明しておくと、別にルナの人々が、髪を動かせるというわけではない。産毛ぐらいは怖かったり寒かったりすると逆立つし、獣人族であればそれが目立つ者もいる程度。

ティオは、このままヴェーンから、……ヴェーンの階段の一番上から、レミーナに蹴り出されるんじゃないかと、本気で思った。

だけどその怒りの圧力は、ストンと消える。

ティオはおずおずとレミーナを見る。……いつのまにかティオは、レミーナから視線をそらしていた……と、レミーナも頬杖をついたまま、そっぽを向いている。

だけど髪は、広がったままだ。

そっぽを向いたまま、レミーナは冷たく言い放った。
「まあ、あなたに怒っても、一シルバーにもならないわ。あなたは知らないでしょうから教えてあげるけどね、そのボーガンこそが、歴史と伝統あるこの魔法ギルドの、メンバーたちを根こそぎ引きぬいて、ギルドを破綻させた、張本人なのよ」
実のところ、これは少し違っている。
ボーガンがメンバーを引きぬかなくても、魔法ギルドは破綻していた。
実際、給料を出さなくてよくなったので、オーサ家の経済状態は、好転したぐらいなのである。
だがまあ、人材こそが財産の魔法ギルドなのだから、メンバーがいなくなったことだって、破綻には違いない。
レミーナは、キッとティオの方を振り返り、人差し指をティオの鼻先に……間には大きな机があったのだから、距離は十分離れていたはずなのだけれども、ティオの気分としては鼻先に……突きつけて、きっぱりと結論を告げた。
「天に青き星があるかぎり、魔法ギルドはアルテナ神団に、一シルバーだって出すもんですか！」
ルナでは、青き星は常に天にある。
星といっても、私たちの世界の月以上に大きく、いつも天の同じ場所に留まり、そこで毎日

満ち欠けを繰り返す。

深夜には満月ならぬ満星として、ルナを煌々と照らし、正午には新月ならぬ新星として、空の青にまぎれ、明け方と夕方には半星となる。

とはいえ、青き星は新星となっても空の青の中に埋没してしまうことはない。

つまり『天に青き星があるかぎり』というのは、絶対を表すルナの慣用句と思えばいい。

だからティオは、来た早々に希望を失ったというわけだ。

……もうだめだ。もうヴェーンに神殿を建立するなんて、絶対に無理なんだ。神団はボクを除名するだろうし、アルテナ様は二度とボクの祈りを、聞いてくれないに違いない。それにボクが死んだあとも、魂は青き星で憩うことなく、ルナの果ての向こう側に閉じ込められて、苦しみながら永遠にさまようんだ。

ティオがそう考えるのは、彼の勝手だ。

だからといって……。

……ボクのせいで、このレミーナさんまで、魂をルナの果ての向こう側に、追放されてしまうんだ。

と、レミーナの心配までするのは、大きなお世話といって、いいだろう。

ティオは、布教活動家としては、あまりにも気弱すぎた。

しょっぱなの失敗にめげて、これからどうしたらいいかわからなくなっていた。

だけど、これからティオが何をすべきか、レミーナは知っている。

そして、落ち込んでいるティオに、それを告げた。

「なんにしたって、弁償はしてもらうわよ」

ティオの頭の中に、弁償という単語が染み込むには、少しばかり時間がかかったようだ。

しばらくしてから、声に出さず「え？」と、応えた。

まだ何のことか、わかっていないらしい。

ティオの頭の上に、『?』がいくつか浮かんでいるのが、目に見えるようだ。

レミーナは、部屋の隅を、指さした。

床に、この部屋にそぐわないガラクタが、置かれている。

まあこの部屋だって、一見豪華で重厚そうだし、作りこそは立派であるけれども、一つ一つをよく見ると、どれも擦り切れ、磨り減り、色あせている。

それでもよく掃除され、片付けられ、磨かれているからこそ、床に積み上げられた陶器の破片は、部屋の中で浮いていた。

よく見ると、文字通りその破片は、床から三センチぐらい、浮いていた。

レミーナは、一句一句区切るように、ティオに言い聞かせた。

「あれは、あなたが、ヴェーンの、階段で、私に、ぶつかったとき、私から、ふんだくって、ぶちまけた、マジックアイテムの、なれの果てよ！」

今度は、理解できたらしい。

ティオの顔は、レミーナが一句を発するごとに、どんどん青ざめていく。

「きっちり弁償してもらいますからね！」

ティオはレミーナの勢いに、「はい」と答えるしかなかった。

第四章　レミーナ　おサルと出会う

とはいえ、ティオはまるきりお金を持っていなかった。
神官の修行(しゅぎょう)の一環とかで、一着の神官服のみを身分証がわりに与えられ、これからの衣食住は全て人々の善意に頼るようにと言い渡されて、やってきたのである。
そこで、弁済が済むまで、ティオはレミーナの家に居候(いそうろう)しながら働くことになった。
……お金もないのにヴェーンに滞在(たいざい)しようとすれば、結局はそれしかない。
貧乏なオーサ家といっても、なにせ旧家で名家で大地主。
衣食住は、着る物だって売るほどあるし、食べ物だって家庭菜園でほとんどまかなえるし、古くて大きな館(やかた)には、部屋も掃除しきれないほどある。
足らないものも、町の人々が地代として持ちこむもので、すんでしまう。
ティオ一人など、オーサ家の多額な借金と、過去の遺産の維持費に比べれば、誤差のうち。
こうなると、ティオがレミーナに引っ張りまわされる、彼女のオプションに成り果てるまで、さして時間はかからなかった。

海に面したメリビアは、陸路海路に恵まれて、伝説にも名を記される、ルナでもっとも古い街の一つである。

*

ヴェーンからは、山を一つこえたところにあり、行って帰ってちょうど一日。
用事をすませる時間を加えれば、一泊二日の旅となる。
ヴェーンそのものが山の上にあるようなものだから、直線距離は短くても、下りて上ってまた下りて、帰りはその逆に上って下りてまた上ってと、結構しんどい。
その道を、レミーナとティオは、大きな荷物を担いで、歩いていた。
ティオは、黙々と。
そしてレミーナは、魔法ギルドの歴史と伝統とか、魔法的資料がいかに貴重であるかとか、古いマジックアイテムを手放すくやしさとか、ティオが壊したマジックアイテムを作るために、どれだけ貴重な材料やレミーナの情熱が費やされたのかとか、そんなことをしゃべくり続けていた。
担いだ荷物は、レミーナの方はラムス商会に売る大切な品で、ティオの方は彼が壊したガラクタに、それからお弁当の入ったバスケット。
さして荷物の量は変わらないはずなのに、だんだんティオの歩みがのろくなり、そしてつい

にはダウンした。

足を滑らせて転びそうになり、膝をついたとたん、起きあがれなくなったのだ。

「ちょっと、どうしたっていうのよ！　だいたいティオは、この山越えてヴェーンに来たんでしょーが。なんでそんなに簡単に、へばるわけ！」

「ひい……、はあ……」

どうやら、息が切れているらしい。

しばらくして、やっと言葉を搾り出す。

「えっと、その、ヴェーンに向かうときは、レオさんの体験談を聞いていると、旅もあっというまで……」

「つまりなあに！　私の話がつまらないから、疲れちゃったっていいたいの！」

「そ、そんなつもりじゃ……」

だけど、レミーナの話がティオにとって、面白いはずもないことは、確かだった。

もっともへばる直前は、レミーナについて歩くのがせいいっぱいで、彼女の話なんか聞いている余裕はなかったけれども。

「だいたいティオは、ヴェーンにくる旅の途中、野宿だってしたっていってたじゃない。そのための荷物は持ってたんでしょ！

……そういえばヴェーンに来たとき、手ぶらだったわね？」

「あ、はい。全部レオさんのを、借りました」
「……まったく。呆れてものも言えないわ！」
ティオは、レミーナは絶対呆れても黙らないだろうと思った。
そんなティオに関係なく、レミーナは話しつづける。
「荷物まで持ってくれる護衛つきでヴェーンまで来たっていうのに、本人は壊した品の弁償金どころか、一シルバーも持ってないんだから」
「はぁ、すみません」
「それにティオは、オケラでも神官でしょ！　アルテナ様に、疲れを癒してほしいって祈ればいいでしょーが！」
「……あの、でも、神官たるもの、あまり自分のために祈るのは……」
レミーナが、座り込んだティオの上にのしかかるように身を乗り出し、睨みつける。
「ここであなたにへばられたら、私が迷惑なのよ！」
「はい……」
実際、平和な時代といっても、一歩人里を出てしまえば、そこを支配するのは自然の厳しい弱肉強食の掟である。
街道は比較的安全とはいえ、ここんとこみたいに不安定な天候がつづくと、森や山の食料も減り、獣の方も遠慮はできない。

ヴェーンの人々も心配し、同行を申し出てた人もいる。

だけどレミーナは、町の人の貴重な時間を自分のために使わせることはできないと、それを断った。

彼女を小さいころからよく知る町の人々は、レミーナちゃんってば背伸びしすぎだなぁと、心配している。

けどまあ、レミーナはそんじょそこらの、自称冒険者程度なら、一人で追い出してしまえるような魔法使いでもあることだし、しかも今回神官もいる。

どんな怪我をしたって、アルテナ様の像までたどり着きさえすれば、完全に癒されるとはいえ、旅の途中は神官か、その力を込めた薬に、頼るしかない。

そしてまさに今が、その力が必要とされる場面であった。

レミーナのためではなく、ティオ自身のために。

怪我のためにではなく、ただの疲労のために。

しかし、ティオの力は、まだ小さい。

一度アルテナ様に祈りを聞き届けてもらったら、アルテナ様の像に祈りを捧げるか、あるいは一晩ぐっすり休まなければ、再びその力を使うことができないのだ。

ついでに、アルテナ様の像なら、どんな怪我でも瞬時に癒されるのだけれども、ティオの力の限界は、肩こり、腰痛、打ち身、捻挫、最大骨に入ったヒビの治癒が、せいぜい。

解呪(かいじゅ)や、その他アルテナ様の像にできない特別な力は、まったくない。
アルテナ様の像がある町の中では、まったくの役立たずである。
……情けないヤツだとは、思わないでほしい。
生まれながらの魔法が、いわゆる痛いの痛いのとんでけーという、神官の力だとわかったときから、一生懸命神官になることをめざし、努力してここまで力を伸ばしたのである。
十三歳なら、上等な方だといって、いいだろう。
ティオは、レミーナに睨みつけられて、やっとあきらめた。
ティオとしては、レミーナに対し、自分が役立つことを見せたかったのだけれども、先にへバって、威圧されてたら、しょうがない。
「……わかりました」
そしてアルテナ様に祈り、そして疲れを癒してもらい……、立ちあがって出発しようとしたとたんに、またも足元をふらつかせてしまった。
「なにやってるのよ！」
レミーナの質問には、ティオのお腹(なか)が返答する。
ぐきゅるるるるるぅ。
「いえ、あの」
アルテナ様は、疲れや怪我を癒し、活力を与えてくれはするけれども、空腹までは、満たし

てくれない。
伝説には、恵みの糧（かて）という、食料を出現させる奇跡もあるそうだが、もちろんティオには、そんな奇跡は、使えはしない。
活力が満たされれば、元気が出てきた分、ますますお腹が減るのが、関（せき）の山（やま）だ。
レミーナは、訳知り（わけし）顔で、頷（うなず）いた。
「そーゆーこと。ティオ、だから食事は全部たべなさいって、言ったでしょーが。だからバテたのよ」
レミーナは、怒るのをやめて呆（あき）れている。
ティオは、いらない遠慮をして、昨夜も今朝（けさ）も、半人前しか食べなかったのだ。
……すでに用意した食事を遠慮されても、迷惑なだけである。
レミーナは、真っ赤（まっか）になってうつむいているティオから、さっさとお弁当用のバスケットを、取り上げる。
「しかたないわね。ここでお弁当にしましょ」
「そ、そんな！　レミーナさんいけません！　ボクのために！　だってこの山には、怪物や山賊（さんぞく）が出るって、レオさんが言ってましたよ！」
「なにいってるの。そんな状態じゃあ、またすぐバテるだけでしょ。それに、この山に出るのはサルくらいなものだわ。まあたしかに、最近ちょっと物騒（ぶっそう）になってきたって、ラムスさんも

言ってたけどね」
「ラムスさん？」
「ラムス商会のラムスさん。私たちが行くお店の若旦那」
言いながらも、レミーナはバスケットから、次々といろんなものを、出していく。
敷物、皿、カップにティーポット、フォークにナイフ、そして小さな折り畳みテーブル。
とてもじゃないが、バスケットに入りきるような量ではない。
なのにまだ、バスケットが空になる様子はない。
ティオはあっけにとられていたが、どうなっているのかとバスケットを覗き込むと、おいしそうなサンドイッチがめいっぱい詰まっていた。
「あの、それ、もしかしたら魔法のバスケットなんですか？」
「そうよ」
レミーナは、にっこり笑って、そう答えた。
ティオがレミーナに出会ってから、はじめて見る彼女の笑顔である。
レミーナは夢を見るような笑顔で、ティオに説明する。
「昔はヴェーンに、こういったマジックアイテムが、いっぱいあったのよ。マジックアイテムじゃないものを、探すのが大変なくらいに。お風呂もお台所も寝室だって、マジックアイテムであふれてたの。

いちいち魔法使いが魔法をかけなくても、誰でも便利な生活ができたんですって」
「あれ？　でも、大昔のヴェーンには、魔法使いしか住んでなかったんじゃあ、ないんですか？」
……ヴェーンの歴史と伝統については、昨日今日だけでも、レミーナから散々聞かされつづけている。ほとんどBGMになってしまっているので、大半は聞き流しているけれども……。
レミーナは当然という顔でこう答えた。
「魔法使いだって、誰もがどんな魔法でも、使えるわけじゃないわ。氷系が得意な人もいれば、火系が得意な人もいる」
ティオは、……レミーナに機嫌よくしててほしい一心で……同じ話を聞かされるにしても、ニコニコしててもらったほうが、百倍気分がいい……それに相槌をうち、質問をする。
「あの、レミーナさんは、どんな魔法が使えるんですか？」
レミーナはひときわ嬉しそうに、笑った。
「光と火と氷よ。それに光でも、赤いのだって青いのだって点滅するのだって出せるし、明るさも、光ってる時間だって、変えられるのよ」
たしかにルナには、魔法が使える者はいくらでもいるけれども、複数の魔法を使ったり、魔法に変化を持たせることができるのは、才能と教育の機会に恵まれた魔法使いだけだ。
だけどティオには、それがどのくらいすごいことなのかは、よくわからなかった。

でも、レミーナが普通の「魔法を使える人」とは違うらしい。……少なくともレミーナがそう考えているということは、レミーナの口調から感じ取ることができる。

だからティオは、大きく頷く。

「そうなんですか、すごいですねぇ」

「感心してないで、手伝いなさいよ」

「は、はい！」

レミーナはツッケンドンにそう言ったけれども、その直前、一瞬だったけれども、その表情が再びほころんだのを、ティオはしっかり見届けた。

こうして、道端のお茶の時間が、始まった。

淡いピンクの敷布の上の、白いテーブルクロスが掛けられた、小さなテーブルの上には、白い皿の上にサンドイッチが、山積みされている。

レミーナが小さな水筒を傾けると、そこからとめどもなく熱い湯がほとばしり出て、ティーポットを満たしてゆく。

……どうやら水筒も、バスケットと同じような、マジックアイテムらしかった。

そして山々の木々の間に鳥は遊び、木漏れ日が優しく照らし出す中で、レミーナとティオは、まるでお人形さんのように可愛らしい。

……二人とも黙っていさえすれば、かなり見た目はいいほうである。

だから、それはまるで一幅の絵のようだった。

もしここに誰かが通りかかったら、きっと……逃げ出すか襲ってくるに、違いない。

山道のど真ん中、別に峠でも空き地でも見晴らしがいいわけでもない場所で、こんな場違いな光景を見せられて、納得して通りすぎろという方が、無理というものだ。

ルナは魔法世界だけあって、そういうイタズラをする魔法の小動物……私たちの世界の、人を化かすタヌキやキツネが現実化したような動物も、数は多くはないが、実在しているからである。

お茶が入ると、レミーナは早速お茶の時間を、楽しみ始めた。

落ちぶれても名家の育ち。なかなかの優雅なお手前だ。

一方ティオの方は、右手にティーカップ、左手にサンドイッチを持ったまま、動きを止めていた。

焼きたてのパンに、何種類かの香草にハムに、スライスされた酸味のある赤い果物。バターもたっぷり、そして隠し味にほんの少しのマスタード。

お茶は、口に含むと少し渋いのだけれども、のど越し甘く、そして鼻からほんわりと抜けていくような、ふくよかな香りがある。

……幸せだなー。

ティオはその幸せを、ゆっくりと噛み締める。

アルテナ神団の神官学校の、修行のためになる食事とやらは、味の方も壊滅的だったけれども、量の方も育ち盛りの子供たちにとっては少なすぎた。

クラスメイトたちは、いつもティオの皿から肉を取り上げて、腹の足しにしていたけれども、ティオの方も肉だけは……なんだかドロッとしていて、色もドス黒くて、いやな臭いがする肉らしきものだけには、卒業するまでどうしても馴染めず、さりとて好き嫌いがあるのは罪悪のように感じて残すのもはばかられ……、つまり利害が一致して、取られるにまかせていたものだ。

そして、卒業してからまともな食事にありつけるようになったのだが、最初はおいしいものを食べるだけで、なにか罪を犯しているような気がしてしまい、なかなか楽しめなかった。

……サンドイッチが無限に出てくるバスケットはあるし、食べている間はレミーナさんもなんやかんやと言わないし、この時間がもっとつづけばいいなー。

そう思ったものだから、ティオはゆっくり、一口一口を味わっていた。

まあ、非常識なほど、お茶の時間を引き延ばすつもりは、なかったけれども、だけど先に食べ終わったレミーナが、少しずつ緊張の度合いを高めているのに気づくには、少しばかり幸せを噛み締めるのに、熱中しすぎてしまっていた。

レミーナは、サンドイッチを一つ食べ終わったところで、ふと顔を上げた。

「なにしてんのよ！」
「え？」
「片づけるのよ！」
ティオはまだ、一つめの半分すら、食べていない。
だけどレミーナは、広げたものを無造作に、バスケットの中に突っ込み始める。
「え……」
ティオが、泣きそうな顔をする。
人間、基本的に食べ物のことで意地悪されるのが、一番堪えるといわれている。
ティオは、てっきりレミーナに、意地悪されたのだと、思ったのだ。
まだお腹は空腹を訴えているし、こんなことなら、もっとガツガツ食べればよかったと思ったところで、レミーナにまだ飲みきっていないティーカップを奪われた。
レミーナは、カップの中身を捨て、さっさとバスケットの中に、仕舞い込んでしまう。そしてさらに、ティオの手から残っていたサンドイッチをも、取り上げた。
「そんな……、ボクまだ……」
ティオの小声の抗議に、レミーナはその顔を覗きこみ……、あんまりにも情けないティオの表情に、何かを感じたようだった。
レミーナは、じっとティオの顔を見つめ、そして静かにこう言った。

「あなた自身が、ゴハンにされたくはないでしょ」
そして、いったんは取り上げた食べかけのサンドイッチを、ティオの手に押し込んだ。
「え？」
「早く食べちゃいなさい。早く！」
そしてレミーナは、再び荷造りを始める。
ティオはあたりを見まわし、初めて小鳥のさえずりが消えていることに、気がついた。
そしてやっと、どうやらレミーナに意地悪されたわけではなく、すぐさまここを引き上げなければならないような状況になったのだと、納得した。
そのティオを、荷造りを終えたレミーナが、叱り飛ばす。
「まだ食べてないの！　だったら走りながら食べるのよ！　食べ物を無駄にしたら、承知しないからね！」
そしてレミーナは、ティオの空いている方の手を引っ張りながら、走り始めた。
だけれども、重い荷物を担いで山を駆け上がるのは、尋常なしんどさではない。
現についさっき、歩いていただけでも、ティオはへバってしまったのだ。
それに、食べた直後に走ったもんだから、お腹も痛くなってきた。
だけど、頭上をミシミシと枝がたわむ音が追いかけてくる以上、立ち止まることは、できなかった。

「あッ」
ティオの手から、食べかけのサンドイッチが落ちる。
思わずそれに手を伸ばそうとして後ろを振り返り……。
山道で、大きな荷物を背負って、手を引かれながら走っているときに、そんなことをした場合にありがちなことが、起きた。
つまり、ティオはレミーナを巻き込んで、転んでしまったのである。
一瞬の間があってから、レミーナが悲鳴を上げた。
「痛ったーッ！」
転んだとき、自分の荷物を第一に守ろうとして、腕と頬を、おもいっきりすりすりむいてしまったのだ。
みるみるまにレミーナの、土まみれになった白い肌が、血で赤くそまっていく。
ティオの方は、レミーナの上に倒れこみ、すり傷一つありはしない。
「あの、大丈夫ですか？」
だけどレミーナは、まずティオが落としたサンドイッチを見つけて、血相を変える。
「まだ食べてなかったの！」
そしてなぜか石を拾い……、そのとき木の上から小さな影が、そのサンドイッチに向かって、飛び降りた。

それは、小さなサルだった。
「なんだ、サルだったんだ。かわいーなー。サンドイッチが、ほしかったんですねー」
ティオは、あきらかにホッとしたようだ。
けれども、レミーナはすぐさま小ザルに向けて、手にした石を投げつける。
「あ、可哀想じゃないですか！」
石はあたらず、小ザルはサンドイッチを拾うと、木の上に逃げ込んだ。
とたんに頭上で、ざわめきが起きる。
ティオの抗議に、レミーナが鋭く返す。
「なにいってるのよ！　私のサンドイッチを、持ってかれたのよ！」
「いいじゃないですか。食べかけのサンドイッチ一つくらい。サルだってお腹が減るんだろうし。ボクの食べかけなんです。どうしてもっていうなら、ボクもうお代わりしませんから！」
レミーナは、声を低く落とす。
「何も知らないのね。あのサルはね、集団で行動してるの。こっちが食べ物を持ってると知ったからには、襲ってくるわよ！」
言い終わる前に、レミーナは走り出そうとしたのだけれども、その前に雨あられとサルたちが、二人にむけて降ってきた。
サルたちは二人の腕を捉み、足を捉み、荷物を奪い取ろうとする。



「何するのよ！　サルのくせに！　放しなさいよ！　キャー！」

レミーナの叫びにも、もちろんサルが放してくれるわけもなく、それどころか嚙みつくわ引っかくわで、二人ともみるまに深手を負っていく。

そのとき、ギャーッ！　というサルの悲鳴が上がった。

あたりに、毛が燃えるイヤな臭いが、たちこめる。

サルたちの動きが突然止まる。

地面に突っ伏して、荷物を盾に、なんとか自分の身を守ろうとしていたティオが、恐る恐る顔を上げると、レミーナが仁王立ちになって、手を高く掲げていた。

まっすぐ頭上に掲げられたその手の、ほんのわずか上に、突如炎の花が現れる。

レミーナがその手を振り下ろすと、炎の花は特別サルたちが密集しているあたりに打ちつけられ、バッと散ったその様子は、まさに花びらが散るかのようだ。

何匹かのサルたちが、その火に毛を焼かれて、悲鳴を上げながら木の上に逃げていく。

ますます毛が燃えるイヤな臭いが、強くなっていく。

そしてレミーナが、三撃四撃と炎の花を打ちつけると、サルたちはついに、一斉に木の上へと逃げていった。

レミーナは、炎の花をかかげたまま、ゆっくりとティオに近づいた。

「大丈夫？」

「は、はい、なんとか。レミーナさんって、本当にすごいですね！　ボクたち助かったんですね！」

「まだよ。サルたちは木の上で、様子をうかがってるわ」

「でも、レミーナさんの魔法があれば……」

「もう、ないの」

「え？」

ティオは、レミーナが掲げた炎の花を見上げて、いぶかしそうな顔をする。

レミーナは、そのティオを、ちらりと視線だけ動かして見ると、こう言った。

「これは炎じゃないわ。赤い光の魔法を、それらしく見せているだけ。……ティオ、怪我(けが)を癒(いや)してちょうだい。それから、峠まで逃げるのよ」

とたんにティオは、これ以上ないというくらいに、情けない顔をした。

「す、すみません。ごめんなさい！」

「今日の分は、打ち止めってわけ？」

ティオは、こくりと頷(うなず)いた。

こうしている間にも、サルたちは再び二人に、近づこうとしつつある。

レミーナの怪我は、今すぐ動けなくなるほどではない。

だけれども、走るには少しばかり無理がありそうだし、それに怪我がなくても本気で追いか

けっこをしたら、サルたちの方が早いことだけは、目に見えている。

こうなったら、いっそサンドイッチを捨てて逃げたほうが、いいんじゃないだろうか？　とティオは思ったけれども、きっとレミーナさんはそうは思わないだろうと考え直し、その直後とてもいいことを思いついた。

ティオは、突然荷物を下ろし、バスケットからテーブルを放り出し、皿を放り出し、カップを放り出す。

「ちょっと、何してるのよ！」

レミーナが慌てるが、なにしろ魔法の火の花を掲げているふりをしているので、ティオのすることを止めることが、できなかった。

その間にも、サルはどんどん近づいてくる。

興奮しているところを見ると、どうやらバスケットの中の、サンドイッチに、気づいたらしい。

残るはサンドイッチとそれだけになって、やっとティオは、目当てのものを引っ張り出した。

魔法の水筒。

ティオは蓋をはずして振り回し、一番近くにいた猿に、熱湯をあびせ掛けた。

サンドイッチならもったいないと文句を言われるかもしれないけれども、たかがお湯ならいいだろうというわけだ。

サルは悲鳴を上げて飛び上がり、他のサルたちもびっくりして、少しばかり後ろへ下がる。
ティオは顔を輝かせながら水筒を振り回し、サルたちを追い払おうとした。
もちろん水筒からは、その見かけよりも遥(はる)かに大量の、熱湯があふれ出た。
だけどわずか数度で、空っぽになってしまったのである。
それに熱湯は、サルたちを驚かせたものの、撤退(てったい)させるほどではなかったらしく、包囲網(ほういもう)はすでに縮(ちぢ)まり始めている。
掲げっぱなしのレミーナの偽(にせ)の火の花も、そろそろ怪(あや)しまれているような、気がしないでもない。
レミーナは、静かに言った。
「ティオ、サルたちを興奮させないように、足元に注意しながら、私のところまでゆっくり下がるのよ」
そこらには、さっきティオがバスケットから放り出した、皿やらテーブルやらポットやらが、散乱していた。
そして言っているそばからティオはカップを踏んで足を滑らせ、盛大にすっころび、バスケットをひっくり返してしまったのである。
バスケットは斜面を転がって、大量のサンドイッチを、……後日レミーナが語ったところによると、四十七個のサンドイッチを、山肌(やまはだ)にぶちまけた。

とたんにサルたちが、叫びわめき群がって、大騒動が始まる。
レミーナが、すっころんでいるティオの腕をひっつかむ。
「バカね！　全力で逃げるのよ！　食べ終わったら、もう一度襲ってくるわよ！」
確かにいくらサンドイッチが大量にあるといっても、これだけサルがいたら、あっというまに食べつくされてしまうだろう。
二人は振り返りもせず、一目散に逃げ出した。

アルテナ様の像が奉られた、山の峠。
なんとかサルから逃げ切って、レミーナとティオは座り込んでいた。
……像の周りは、どんな怪物も襲ってはこない、聖域となる。
すでにアルテナ様の像に祈って、怪我は癒してもらったものの、気分は未だ優れない。
破れた服や、ぐじゃぐじゃになった髪、泥汚れなんかはそのままなので、二人とも見るからに痛々しいありさまだ。
レミーナは、黙り込んで地面をにらみつけ、手櫛で髪を整えている。
ティオは、何をしているというわけでもないけれども、レミーナと目を合わせられず、ビクビクしながら横目で、ちらちらと様子をうかがっている。
ヴェーンで見せた、怒りを爆発させるレミーナも怖かったけれども、こういう怒りを押し殺

しているレミーナは、さらに怖いとティオは思った。
ついにティオは静寂に耐えられなくなり、恐る恐る声を掛ける。
「あのぉ……」
「弁償！」
レミーナは、地面をにらみつけたまま、ただ一言そういった。
それから、キッとティオを見据えると、堰が切れたかのように、話し始めた。
「なんであんなとこで、バスケットを開けたりしたのよ！　サルはね、ちょっと脅してやれば、目の前に食べ物がないかぎり、襲ってはこないのよ！」
「そう……だったんですか？」
「とにかく、全部弁償してもらうわよ。テーブル、お皿にポット、サンドイッチも、それにもちろん、魔法のバスケットに魔法の水筒！　それからこれもね！」
……ティオが手にしていたはずの水筒は、どこかへ消えてしまったし、ラムス商会に売るはずの、レミーナ特製のマジックアイテム、……サルに追われて転んだとき、レミーナが自分の身を挺してかばったその包みを、レミーナがティオに向けて突き出すと、それはガシャガシャと、イヤな音を響かせた。
さらにレミーナは、ティオを責め立てる。
「だいたいね、あの水筒から限りなくお湯が出てくるとでも、思ったわけ？　あのバスケット

も水筒もね、とっても沢山入るし、入れた状態が保たれるけど、中から湧いて出てくるわけじゃないのよ！　入れた分しか出てこないの！
もしサンドイッチの残りがもっと少なかったら、逃げきれなくておサルに襲われて、アルテナ様の像にたどりつくこともできなくて、命を落としてたのよ！
だいたい何かする前に、どうして一言聞かないのよ！　それに私の言うことは聞かないし、足元ぐらい確かめて歩きなさいよね！」
　そしてティオは、小さくハイと答えるしか、なかったのである。

＊

　その後、レミーナとティオは無事にメリビアに到着した。
　街に近づいてから、ラムス商会までの短い距離、その間すれ違う人たちはみな、レミーナとティオのありさまに驚いたようだった。
　ティオは、人々の視線にうつむいてしまったけれども、レミーナは壊れた品が入った風呂敷包みをしっかりと抱きしめたまま、前方を無言で睨みつけていたため、声すらかけられなかったというところだろう。
　ちなみに、ティオは荷物を全部失って、手ぶらである。
　街に入るときだけ、自治会の衛兵に呼びとめられたので、レミーナが事情を説明すると、

「そりゃあ難儀（なんぎ）だったねえ」と、同情された。
ラムス商会の暖簾（のれん）をくぐり、レミーナは壊れたアイテムが入っている包みを、カウンターに載（の）せた。
「マジックアイテムを、持ってきたわ。買って欲しいの」
ティオは、レミーナの後ろで、小さくなっている。
店の奥から出てきたラムスは、まず二人の格好に驚きはしたものの、まああの山道のことはラムスもよく知っている。
だいたい何があったのかを察して、その上でその話題には触れず、風呂敷包みをカウンターに広げた。
中身は完全な、ガラクタと化している。
「本当に、これを売る気なのかい？　レミーナちゃん」
「ええそうよ」
ラムスは、風呂敷の端（はし）を摘（つま）み上げ、レミーナに示す。
「本当に？」
「売るつもりで持ってきたわけじゃないけど、借金返済と当面の生活費のためには、しかたないわ。だけど、高く買ってくれるわよね」
「もちろんだよ、レミーナちゃん。もちろん適正な価格の範囲の中で、できるかぎり高く買い

取らせてもらうよ。四万五千シルバーで、どうだい？」
「もっと高くならないの？」
レミーナとラムスの交渉を、ティオはあっけに取られて見ているしかなかった。
……このガラクタが売れる？　しかも四万五千シルバーで？　だったら、壊れてなかったら、いったいいくらになるんだろう。ボクが弁償しなきゃいけない、その額は……。
「じゃあ四万五千シルバーに、うちの商品五千シルバー分を追加しよう」
「それでいいわ」
商談をまとめると、ラムスは同情しいしい、こう言った。
「帰るときは、護衛を雇ったほうが、いいんじゃないかなー」
「そんなお金、ありゃしないわ」
「ケチると全部失いかねないよ。命まで失ったら、大損だ。それに最近、山の食べ物が少なくなったらしくってさ、多いんだよ。そういう被害が。目をつけられたから、帰りも襲われるってことだって、ありえるし」
「商品五千シルバー分の一部で、剣でももらってくわ。持ってるだけでも、サルには結構効果があるんでしょ？」
「まあ、僕はそうしてたけどね」
そしてラムスは、ひょいと視線を、レミーナの後ろで小さくなっているティオに移す。

「……ところで、その子は誰だい？
　ヴェーンでも、メリビアでも、見掛けたことがない子だね」
　ティオは何を言われるかと身を堅くし、そしてレミーナは、きっぱりと言った。
「せっかく作った新しいマジックアイテム、それから魔法のバスケットに魔法の水筒、全部ダメになったのは、この子のせいなのよ」
　ラムスは、オーバーなアクションで、アルテナ様に助けを求めるしぐさをする。
「あのバスケットもかい！　ってことは、少なくとも四十万シルバーの損失ってわけだ」
「そうよ！　悔しくてしかたないの。思い出したくもないわ。だけどその四十万シルバーは、このティオに弁償してもらうわ。絶対に！　たとえ何年かかろうとも！」
　ティオの顔から、血の気が引いていく。
　小さな声で、ティオは聞いた。
「四十……万……シルバー……ですか？」
　ちなみに一シルバーが百円ぐらいだと思ってくれれば、わかりやすい。
　四十万シルバーは、四千万円くらいになる。
「まあ、商売に浮き沈みは、必ずあるさ。がんばりたまえ」
　ラムスは笑顔で、ティオの肩をポンと叩くと、ティオへの興味は失って、カウンターの上のガラクタを、そのままゴミ箱に放り込む。

「あの、それ……」

キョトンとしているティオに、レミーナが説明した。

「あのガラクタに、値がついたとでも思ったの？　売れたのはあの風呂敷。何を入れても重くならない、魔法の風呂敷なの！　売りたくない品だったんだからね！　魔法ギルドの歴史と伝統を私に感じさせてくれる、素晴らしい実用品だったんだから！」

ティオは、なぜ山道で自分だけがヘバったのか、なぜレミーナが平気だったのか、納得した。

一方ラムスは、風呂敷を大事そうに仕舞い込んでいる。

「レミーナちゃん。できるかぎりラムス商会で、大切に使うことにするよ。将来レミーナちゃんが、買い戻せるようにね。

それから、奥でレミーナちゃんが試作したマジックアイテムの、話だけでも聞かせてくれないかな？

その様子じゃあ服も繕わなきゃならないだろうし、体も洗ったほうがいいよ。商品五千シルバーで、着替えを買ってくかい？

それに……、今日はメリビアに泊まっていくんだろう？　だったら……」

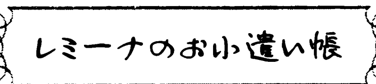
そしてラムスは一拍おいて、さも重大なニュースを告げるかのように、こう言った。

「うちに泊まってくといい。もちろん食事代も宿代も、とらないよ」

その一言で、ムスッとしていたレミーナの表情が、パッと明るくなったのである。

「まあ、ありがとう！　ラムスさん！　感謝するわ！」

とまあ、歴史と伝統の魔法ギルドからやってきたレミーナも、歴史と伝統の老舗(しにせ)ラムス商会の若旦那には、結構かなわなかったりするのであった。



今回の収入

魔法のフロシキ売却　　S50，000

今回の支出

マジックアイテム　　S450，000

擅失　魔法のバスケット　魔法の水筒　その他

売却　魔法のフロシキ

その他　　S120

ピクニックセット一式

サンドイッチ　四十七食分

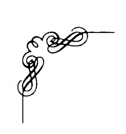
今期の返済　　S30，000

今回の収支　マイナス430，120S

400，120Sは

ティオに弁済させること！

(※ 1S(シルバー)は100円前後。約43,012,000円)



第二話　毛皮の値段

ティオ・ミスト
アルテナ神団の命によりヴェーンにやってきた、なりたて神官。

ラムス・ブルグ
メリビアの老舗、ラムス商会の若旦那。

「一歩ごとに一シルバーもらえるとしても、もー歩くのはヤ！」
ここは、メリビアから半日ほど歩いたところにある、森の中。
ルナでは人里を離れれば、すぐさま自然の弱肉強食の掟が支配する。
その森の中、草分け道のどんづまりの丸石の上に、レミーナは座り込んでいた。
正確には、歴史と伝統のヴェーンの魔法ギルドの現当主、旧家にして魔法名門オーサ家の女家長、将来有望なる魔法使い、レミーナ・オーサ、十四歳。
黙って微笑んでいれば、色白の肌とウェーブのかかった金髪の、まばゆいばかりの美少女である。
ただしレミーナが黙っていることなど、めったにありはしない。
そのレミーナの前でおろおろしているのが、アルテナ神団所属の新米神官ティオ、十三歳。
これまた色白に、ストレートのさらさら髪、お人形さんのような外見に恵まれて、すまして立っていさえすれば、なかなか落ち着いた雰囲気の、賢そうな美少年。
ただしこれまた、生来の気弱な性格のため、いつもオロオロしていて、これまで外見で得をしたことなど一度もない。
こんな二人が一緒にいるのは、ひとえにティオが、レミーナの大切な財産を、壊してしまっ

て弁償できないでいるからに、ほかならない。

ティオは、情けない声でレミーナを説得しようとする。

「そんなー、レミーナさん、こんなとこで座り込まないでくださいよー。もうすぐ日暮れなんですよー。日があるうちに、猟師村にたどり着かないと危ないって、ラムスさんも言ってたじゃないですかー」

ところがレミーナは、そっぽを向いたまま、鼻歌なんぞを歌い、それに合わせて足をぶらぶらさせている。

ティオが言ったとおり、日が暮れれば、森の中はマジで危ない。

ただでさえ獣の支配する世界なのに、ここ何年か天気が悪いせいで、森の食べ物も減ってしまい、旅人が襲われたり、畑が荒される被害が、増えている。

だいたい町育ちの十四歳の少女と十三歳の少年が、いくら魔法使いと神官であったとしても、二人だけで森に入るべきではない。

街道のあるヴェーン・メリビア間でさえ、最近はサルが旅人を襲うのである。

なにしろつい先日、レミーナとティオも、サルにボロボロにされたばかりだ。

なのに、その無理をしたには、それなりの理由がある。

しばらく前の話。

レミーナの家は、旧家で名家で名門で、大きな館もギルド当主の地位もあるヴェーンの大地

主だけれども、財政は破綻し、過去の遺物を維持するために、その一部を切り売りしているありさまだ。

しかしオーサ家に残っているのは、資料的な価値はあるが、商品的な価値はほとんどないものばかり。

レミーナにお金を貸しているラムスも困って、思いつきで彼女にこうささやいた。

「新製品を開発したらどうだろう」

そのアイデアにレミーナは飛びついて、家にあるものを材料に、早速マジックアイテムを作ったものの、それはティオが壊してしまった。

それでもめげずに、ただし経験に照らし合わせて壊れものはやめることにし、材料を集めにかかったのだけれども、足らないものが一つある。

チロの毛皮。

チロは、毛深くて耳のないモルモットを、大きくしたような動物だ。

寒い北の地の動物といわれているが、昨今このあたりでも、珍しくはない。

だけど毛は硬く、皮は傷みやすく、肉は臭いし、見た目よりもずっと敏捷で強暴で、嚙まれると呪われるとかいう噂もある。

値が付くならば雲さえ売ると評判のメリビアの商人たちも、こればっかりは、扱わなかった。

ラムスいわく……、

「ドブネズミみたいなものだよ。獲ったって、店に置いたって、どんなに安くしたって、誰も買わない。需要がないから、メリビア中の店を探しても、売ってやしない。猟師だって、売れもしないものを、わざわざ狩りはしないし、偶然罠にかかったって、手間をかけてまでメリビアに持ってこようとは、思わない。
需要がなければ、供給もないってことさ。
手に入れるには、こっちから出向くしかないだろうね」
というわけでまあ、人を頼めばその分余分にお金がかかるもんだから、レミーナはティオを連れて、森の猟師村を目指した。
お昼すぎには到着する予定だったのだけれども、どこかで道を間違えたのか、深い森の短い日中が終わろうとしているのに、人里に近づいたような気配すら、ありはしない。
そして、下生えの草に消えてしまいそうな道が、大きな丸石に突き当たって終わりになってしまったとき、ついにレミーナは、その石の上に座り込んでしまい、冒頭の叫びを上げたというわけだ。
レミーナは、足をぶらぶらさせながら、ぶつくさつづけた。
「道は悪いし、森は暗いし、荷物は重いし、お茶は冷たいし、まったくヤになっちゃうわ」
「ゴメンなさい……」
先日、ティオのせいでレミーナは、新商品の試作品だけでなく、魔法の風呂敷や、魔法のバ

スケットや、魔法の水筒を失った。
ティオがしおらしく謝ると、レミーナはますますいきり立つ。
「なんでそんなに簡単に、謝っちゃうのよ！」
「……そんなー、そんなこと言われてもー」
三ツつ数える間、レミーナはムスッとティオを睨んだ。
だけどその後、ふっと表情を和らげて、肩をすくめる。
「まったく、張り合いがないんだから。そんなことじゃあ、厳しい世間を渡っていけないわよ」
「はあ……」
レミーナは怒ることによって、彼女自身を元気づけていたのかもしれない。
こっそりラムスがティオに教えたところによると、当主を継いでここ一年ばかり、レミーナは、魔法ギルドとオーサ家を守るために、群がる悪徳商人や、寄付を求める胡乱な勇者相手に、打々発矢とやりあっていたのだそうだ。
その間ずいぶん危険な目にもあい、また幾度も騙されて、貴重な財産を失ったという。
「危険な目にあったり、騙されたり、財産を失うことならできるけど、打々発矢なんて怖くてできないや。なぜ、レミーナさんには、できるんだろう。ボクとそんなに年も変わらないのに。それに女の子なのに……」

それに対し、ラムスはこう答えた。

「レミーナちゃんは、お母さんや、魔法ギルドや、ヴェーンが大好きで、それを守りたいと思ってるから、必死なんだよ。それに年や性別は関係ないさ。

……いや、もしかすると女性の方が強いかもしれないぞ。熊だって、子熊を守ろうとする母熊が、一番怖いっていうだろ？」

ティオは、少し考え込んだようだ。

「ボクにもできるでしょうか？」

ラムスは、笑った。

もっとも彼は、いつも愛想のよいニコニコ顔をしているけれども。

「恋の一つもすれば、恋人のために、できるようになるさ」

「そうじゃなくて……。ボクは神官として、アルテナ様に全てを捧げた身です。アルテナ様のためになら、何だってしなきゃいけないんです」

「ドラゴンマスターみたいに？」

ドラゴンマスターとは、伝説上の、四竜を従え女神アルテナ様を守護する、最高の戦士のことである。

「まさか！　そんな大それたものじゃありません！　だけど神官長様はいつもおっしゃってました。アルテナ様のために命を捨てる覚悟があれば、なんだってできるって……。

現に、レオさんも……、レオさんっていうのは、神団附属の戦士なんですけど、すごく強いんです。そのレオさんも、世のため人のためアルテナ様のためになら、どんな危険も恐れはしないって言ってましたし」
ラムスは、愛想笑いのまま、肩をすくめた。
「臆病な戦士はそりゃ困るけど、ティオくんは神官なんだから」
「そうじゃなくて……。ボクも、レミーナさんやレオさんみたいに、頑張れるかな、って。結局何もできないんじゃないかって、怖いんです。
神官長様は言いました。もし神官長様が、命を捨てよというアルテナ様の言葉をボクに伝えたならば、その言葉を疑うことなく、喜んで死ななければならない。それが信仰だって。だけどボクには、できそうもありません」
ラムスは表情を失って、ポカンとした顔でティオを見つめた。
少なくとも民間で信仰されている女神アルテナは、人々と共に歌い踊る身近な優しき女神様で、死を求めるといったイメージはない。
ラムスはしばらくしてから笑顔を取り戻し、肩をすくめる。
「アルテナ様が、誰かの命を取るなんてこと、ありはしないさ」
「でも……」
「でももしそう言われたら、その神団をやめて、フリーの神官になればいいじゃないか」

ルナでは、奇跡さえ行えれば神官なので、組織化されていないフリーの神官や、兼業神官も、数多くいる。

「そんなことをしたら、アルテナ様のばちが当たります！」

「そんなことは、無いと思うけどなー」

とりあえず、ラムスとの話はそこで終わった。

そしてティオは今、レミーナを立たせるためには、勇気を持って強く言うべきなのか、勇気を持って引っ張っていくべきなのか悩みながら、どっちにも踏み切れない自分を、情けなく思いながら、オロオロしているというわけだ。

レミーナは、あいかわらず足をプラプラさせながら、空を見上げている。

いつもより、静かに。

ティオは、はたと気がついた。

「あのぉ、レミーナさん」

「なによ」

「もしかして、足を痛めてるんじゃありませんか？」

レミーナは、ティオを見もせず、それを認めた。

「ちょっとだけ……ね」

「見せてください。癒(いや)しますから」

「それほどじゃないわ。それにもったいないじゃない。ティオの奇跡は一回きりなんだから、本当に必要になったときのために、とっといてよ。少し休めば歩けるようになるわ」
「すみません……」
ティオは、なりたてとはいえ神官だ。
彼がアルテナ様に祈ればアルテナ様からもたらされる奇跡によって、疲れや怪我は、たちまちのうちに癒される。
だけどレミーナの言うとおり、一度アルテナ様に祈りを聞き届けてもらったら、アルテナ様の像に祈りを捧げるか、あるいは一晩ぐっすり休まなければ、奇跡を呼ぶ力は蘇らないし、治せる怪我も骨折までがせいぜいだ。
ティオの年を考えれば、それでも立派なものだし、近くにアルテナ様の像がない場所では、それが生死を決めることも、充分にある。
ちなみにレミーナの魔法の力も、一晩の休息か、アルテナ様の像への祈りによって、回復する。
ただしレミーナは、すでに三種の魔法を、一日数度は使うことができる一人前以上の魔法使いであり、それ以上のことができる魔法使いは、この近隣には彼女の母ミリアしかいない。
……いくら魔法使いの人気の無い時代だとはいえ、前は魔法ギルドに、多少の魔法使いたちはいた。

けれども、元魔法ギルドメンバーにして、魔法をまったく使えない魔法使いという、存在自体が矛盾しているボーガンという男が、金の力で根こそぎヘッドハンティングしていってしまったのである。

彼が、何の目的で魔法使いたちを連れ去ったのかは知らないけれども、それゆえレミーナにとって、ボーガンこそがギルド崩壊の象徴となった。

そのボーガンの後ろ盾となったのが、ティオの属するアルテナ神団とくれば、レミーナの怒りはティオにも及びそうなものだ。

だけどレミーナには、いくらなんでも組織の末端の、気の小さくて人のよい、謝りぐせのあるティオに、怒りをぶつけはしない。そういったバランス感覚は、もっている。

そして今もティオは、レミーナの前で、グズグズイジイジオドオドするばかり。

ティオがレミーナを癒したくて、それを主張できないでいることは、まるわかりである。

レミーナはこういう謝ってばかりいる、私は弱者でございというタイプが、ボーガンのような厚顔無恥なヤツの次にキライだ。

蜜に集まる蟻のように、オーサ家の財産目当てに集まってくる胡乱な連中の方が、罵倒しても、場合によっては攻撃魔法の一つもぶつけても、心が痛まずストレス発散になる分、ましではないか。

「……しょーがないわねー。わかったわ。ティオ、お願いするわ」

レミーナがそう言うと、ティオはパッと顔を明るく輝かせて、いそいそとレミーナの足元に、ひざまずいた。

そして靴を脱がせようとしたとき……、

ツツツ……。

レミーナの足は、ティオの手から逃げるように、後ろへ下がった。

ティオが、雨に濡れた子犬のような瞳で、レミーナを見上げる。

……ボクに、癒させてくれないんですか？　そんなに信用されてないんですか？　と、その瞳は訴えていた。

ところが、レミーナもまたキョトンとして、ティオを見ていた。

目が合ったとき、またもツツツ……、と距離が開く。

二人とも、まったく動いてはいなかった。

「え？」

座っていた石が動いたということに気づいて、レミーナがそこから降りようとしたとき、石はグラリとゆれて、持ち上がる。

その下から何十本もの昆虫のような足が生えていた。

「何よこれ！」

落ちかけたレミーナが、反射的に石にしがみついたのが、まずかった。

石は突然走り出し、森の中に掛け込んでいく。
レミーナを、乗せたまま。
「レ、レミーナさん！」
ティオが、レミーナを追う前に、二人分の荷物を担ぐべきかどうか迷ったのも、まずかった。
とはいえティオは、レミーナの荷物をダメにしたのが原因で、多額の弁償金を支払わなければならない身に、なってしまったばかりである。
迷うなというのも、無理だろう。
それはともかく、あっというまに、二人は引き離されてゆく。
そしてそのとき二人は、気がついた。
それまで二人が道だと思っていたのは、その石のような生きものが、移動した跡だったということに。
とにかくティオは、えっちらおっちらと二人分の荷物を担ぎ、その跡をたどる。
レミーナの姿は見えないけれども、その声はまだ聞こえている。
「ちょっと止まりなさいよ！　この！　この！……なんで止まらないのよーッ！」
ちなみに真中の……は、レミーナが呪文を唱えて魔法を掛けた、その間である。
どうやら、効果が無かったらしい。
ティオは、大慌てで叫んだ。

「レミーナさん！　飛び降りてください！　飛び降りて！　飛び降りるんです！」
その直後、レミーナの悪態は突然聞こえなくなった。
そして慌てて後を追いかけたティオが見たのは、崖の下で身体を丸めて倒れている、レミーナの姿だった。
あの動く石は、もういない。
「大丈夫ですか？」
レミーナは、苦痛に顔を歪め、右足の膝の下あたりを両手で掴み、ギュッと目をつむったまま、ほんの少し首を横に振る。
「大丈夫じゃないッ！　足をひねったみたいッ！　ティオ！　癒して！　早く！」
レミーナらしからぬ、搾り出すような小さな声だ。
ティオは、レミーナの足首が奇妙な方向を向いているのに、気がついた。
ひねったどころではない。
完全に骨折している。
ティオは、またもオロオロし始めた。
「ごめんなさい！　ボクが飛び降りろなんて、言ったばかりに！」
「謝るのは後にして！　とにかく先に癒してちょうだい！　痛くてたまらないのよ！」
「す、すみません！　だけど！」

「できないのッ！　それとも、弁償金をチャラにしてくれとでも、言うんじゃないでしょうね。それは絶対にイヤよ！」
ティオが、慌ててかぶりをふる。
もっとも、レミーナはティオの方など見る余裕はないけれども。
「そんなこと言いません！　癒すことはできます！……だけど……」
「だけど、何よ」
どうやらレミーナは、痛いなりにも落ち着いてきたらしい。
「このまま癒すと、骨がずれたまま、固まってしまいます。癒す前に引っ張って、骨を正しい位置に直さないと、いけないんです」
「……それって……」
「すごく痛いんですッ！　立派な戦士が、痛みに耐えられなくて泣き叫んで、結局一生足を引きずることを、選ぶくらいに。
ごめんなさい！　本当にすみません！　アルテナ様の像や、もっと力のある神官だったら、それ込みで癒したり、痛みを消したりできるんですけど！
それに一度歪んだまま癒された骨は、治すところがないから、もう普通の方法じゃあ元に戻せないんです！　もう一度骨を砕いて……」
ティオは、半分泣きべそをかき始めている。



レミーナは、決心したようだ。
「わかったわ。引っ張ってちょうだい。私はどうしてたらいいの」
「ごめんなさい！　すみません！　ボクがいけないんです！」
ついにレミーナは、大声でティオを叱り飛ばした。
「いいかげんにしなさい！　泣きたいのは私の方であって、ティオじゃないでしょ！　泣きたいなら、後で好きなだけ泣くといいわ！　謝りたいなら、後で好きなだけ、謝らせてあげる！　でも、今私を癒せるのは、ティオだけなのよ！　今は私を癒すことだけを、考えてちょうだい！」
ティオはその言葉に対してというよりも、その勢いに驚いて、泣くのを止める。
レミーナは、ティオを睨みつけている。
そしてしばらくそうした後、ボソッとこうつけ加えた。
「……怒ってる間だけは、少しは痛みを忘れてられるわね」
ティオは袖で涙を拭い取ると、まだ多少オドオドとしていたものの、レミーナに近づいて、崖からはみ出している大きな木の根があるところまで、彼女を引きずっていった。
その間、レミーナは痛みをこらえて歯を食いしばっている。
「あの、その、まっすぐになるまで、足を引っ張らなければならないんです。押さえてくれる人がいませんから、その根につかまってください」

「わかったわ。やってちょうだい」
そしてティオは、レミーナの足を引っ張ったのだけれども……。
「いったーい！」
「ごめんなさい！」
レミーナの悲鳴（ひめい）で、思わず手を放してしまった。
レミーナは、涙を浮かべ、肩で息をしながら、ティオにたずねる。
「もういいんでしょ。早く癒して」
「すみません！　まだ全然なんです！」
「やんなさい！」
レミーナが怖い顔で睨むと、ティオはそそくさと再びレミーナの足を、引っ張った。
「いたい！　いたい！　いたいッ！　や、やめて！」
「は、はい！」
再びティオは、レミーナの足から手を放す。
ティオが、レミーナの痛みにおびえて思いきり力を出せないせいか、それとも元々（もともと）力が足らないせいなのか、……多分その両方のせいで、まだ骨は本来の位置には収まっていない。
それはレミーナの目にも、明らかだった。
ティオは、またも泣き出しそうになっている。

「あの、レミーナさん。このまま癒したほうが……。これから少し歩き辛くはなると思いますけど……」
「ダメ！　もう一度！」
レミーナはきつくそう言ったが、その声からはすでに力が、感じられなくなりつつある。
今度こそはと、ティオは思いっきり引っ張った。
レミーナも歯を食いしばってがんばったが、あと一歩というところで、今度はレミーナが、木の根を放してしまった。
そのとたん、今まで以上の激痛がレミーナを襲い、悲鳴を上げる。
「すみません！」
「うるさいわね……」
どうやら、レミーナの体力が、本格的に尽きてきたらしい。
声はさっきよりも力を失い、目の下には、クマも現れ始めている。
だけどレミーナは、その目でティオを睨みつけながら、その声で、ゆっくりと言った。
「ティオ、私のワンピースのリボンを解いて。そしてそれで、私の身体を根っ子に固定するのよ。それから、私が痛いって言おうが、やめてって言おうが、お構いなしにひっぱるの。わかったわね。……やりなさい、ティオ」
「はい」

そしてティオは、レミーナを木の根に縛りつけ、言われた通りに引っ張った。

「いやーッ！　ヤッ！　ヤッ！　ヤーッ！」

レミーナは悲鳴を上げる。

思わず力を抜きそうになる自分を叱咤激励しながら、ティオはレミーナの足を引っ張った。

そして、祈った。

……女神アルテナ様！　レミーナさんの足を、癒してください！　丁度いいときに！　レミーナさんの足が元通りになるように！

ティオは、アルテナ様の力が自分の手の中に集まってくるのを感じた。

丁度いいときに、なったのだ。

暖かな塊が、足を引っ張るティオの手のひらからレミーナの足へ、そして患部へと流れ込み、またたくまに怪我を癒し、痛みを消し去り、レミーナに活力を与えていく。

もう大丈夫。

十四歳の女の子には似つかわしくない目の下のクマも、消えつつある。

ティオは、ホッとしてレミーナの足から手を放し、微笑み掛けた。

レミーナの表情からも、ゆっくりと緊張が消えつつある。

そして多分、レミーナもまたティオに微笑みかけようとして……、その表情は一瞬にして凍りついた。

そしてティオも、レミーナが自分ではなくその背後を見ていることに気がつくと同時に、知らぬまに、後ろにクマに立たれたようなイヤーな気配を感じ（といっても、ティオにそんな経験があるわけではないけれども）、振りかえった。

そこには、一人の男が立っていた。

その男は、クマに似ていなくもない。

そして彼は、ティオに向かって拳を振り上げていた。

「ガキのくせにオナゴを襲うとは、こん不届きモンが！」

クマ男は拳を振り下ろし、突然のことにティオは身動きどころか、声すら上げられなかった。

そのかわり……、

「ちがーう！」

レミーナは、咄嗟に大急ぎで呪文を唱え、男が拳を振り下ろそうとした瞬間に、叫びながら男に向けて魔法を放った。

ただし、呪文は大急ぎだったし、身体はまだ木の根に固定されていて自由に動かせなかったし、こんなときに、完璧な対応など期待しないでいただきたい。

……そしてティオは、見事に拳と炎の挟み撃ちを、くらったのである。

「いやはははー。すまんすまん！　しかしどう見ても、ボウズがジョウちゃんを、襲ってい

るようにしか、見えんかったもんでなー」

「いいえ。こちらこそ助けてくださったことを、感謝してますわ。マタグさんが来てくださらなかったら、私たち大変なことになっていたんですもの」

レミーナとティオは、クマ男……もとい猟師のマタグの小屋へ招かれて、夕食なんぞを、ご馳走してもらっているところである。

なんのことはない。

二人が目指していた猟師村は、レミーナが石モドキから振り落とされた崖から、ほんの少ししか離れておらず、マタグがレミーナの叫びを聞いて何事かとやってきてみると、男の子が、木の根に縛りつけられたままイヤがっている女の子の足を、引っ張ってる最中だったというわけだ。

それであんな結果になってしまったわけだけれども、マタグと出会えたことは、二人にとって幸運だったといって、いいだろう。

なにしろ、レミーナの怪我は治りきらず、痛みが残っていたし、歩けてもどっちがどっちなのか、わからなくなっていたからだ。

マタグはレミーナを背負って、猟師村に案内してくれた。

そこにはちゃんと、アルテナ様の像もあって、二人はさっそくお参りして、それぞれの怪我を癒してもらい、その後マタグの小屋におじゃまさせてもらっていると、まあ、そういうわけ

である。
にこやかに談笑しているレミーナの陰で、ティオはイジイジしていた。
よりによって暴漢と間違えられたことが、ショックを受けたらしい。
いままで、暴漢に襲われるという事態を心配したことはあっても、自分が暴力を振るうどころか、暴漢に間違えられることがあるなんて、思いつきもしなかった。
それに、自分の最大限の勇気と力を発揮し、初めてレミーナのために役だって、認めてもらえると思ったのに、アルテナ様の像が近くにあれば、これがほんとの骨折り損のくたびれ儲け。
それどころか、レミーナを余分に痛がらせただけである。
いや、一歩間違えば、不完全な治療を施して、レミーナは一生歩くのにも不自由し、ティオがいなかったほうがマシという結果になっていただろう。
ちょうどレミーナとマタグの話も、それについての話題に移ったようだ。
「ですけど、いくらなんでも私がティオに襲われてるなんて……」
レミーナが、ちょっと赤くなりながらそう言うと、マタグも頭を掻き掻き大笑いする。
体格も大きいが、その声も大きい。
「それもそうだ。こんなにちっこいオナゴみたいな子が、よりにもよってあんたのような魔法使いを襲うなどとは、絶対に不可能だ」
……えらい言われようだけれども、ティオは反論するそぶりもなく、落ち込みつづけている。

反論するったって、そんなことはありません、ボクにだってレミーナさんを襲うくらいのことは出来ますなんて、言えるわけもない。

マタグは、特性の野性味溢れる猟師鍋（猟の獲物と、森で採れたキノコを、鍋でグツグツ煮込んだもの）のお代わりを、レミーナに薦める。

……ティオの椀の中身は、ちっとも減っていない。

「で、なんであんなとこにいたんだ？　道にでも迷ったのか？」

「迷ったには違いないんですが、目的地はここなんです。どうしてもチロが欲しいんですけど、メリビアで猟師に直接頼むしかないだろうって、言われたんです」

マタグは、首をひねる。

「まあ確かに、あんなもんは罠にかかっても、そのまま放り出しちまうからなぁ。だが、何に使うんだ？　肉は臭いし、生きている間は固い皮も、死んだらすぐにボロボロになる。毛は松葉みたいにゴワゴワだ。まさかペットにしようなんて、思っちゃいないだろうな。あれは見た目より強暴だぞ」

レミーナは、いそいそと嬉しそうに椀を受け取る。

ちなみに三杯目。

多少塩気は足らないが、日も暮れて冷え始めた森の中の、簡素な猟師小屋にふさわしい、ここでしか食べられない、ご馳走である。

しかも、タダ。
タダほど美味しいものはない。
レミーナは、美少女という代名詞にふさわしい笑みを浮かべた。
「マジックアイテムを開発するための、材料として必要なんです」
「ほう、どうやって作るんだ？
冬の猟に出られん間、家の中で内職できるようなもんかね？」
レミーナは、ちょっと申し訳ないという顔をする。
「それなりの魔法使いでないと……」
「そうか、それは残念だ」
とはいうものの、マタグはさして残念そうな様子でもなく、先をつづけた。
「で、必要なのは生きたチロかね？　死んだチロかね？　何匹くらいいるんだい？」
「最初は一匹でいいんです。えっと、欲しいのは皮だけです。試作が成功して、売れるようになったら、いくらでも必要になりますけど」
マタグは、ひょいと眉を上げた。
「なんだ、最初は一匹っきりでいいのか。だったら後で、みんなに話しておこう。そしたら明日中には手に入るだろう。明後日、それを持って帰ればいい」
レミーナは小首をかしげて、可愛らしくこう聞いた。

「おいくらでしょう」
「そうさなあ、大きさにもよるが、皮を剝(は)ぐのが難しいし、一匹五百シルバーはもらわんと、割(わり)に合わんな。
なあに！　こっちとしても、役立たずのチロが売れるようになれば、大助かりだ。最初の一匹はプレゼントしよう。そして今後は、チロの毛皮も他の毛皮と一緒に、出荷してやる。そうすればお嬢(じょう)さんは、メリビアで買うことができるだろ？」
「きゃー！　嬉しい！　ありがとうございます！」
レミーナは、その瞳(ひとみ)をシルバーと同じ輝きで満たしながら、マタグに飛びつかんばかりだ。
そして、瞳をキラキラさせた美少女に、全身で感謝を示されると、たいがいの男は思わず頰(ほお)をほころばせる。
マタグも例外では、ありはしなかった。
……知っててやってんだか、知らずにやってんだか……。
「まてまて、礼はチロが獲(と)れてからでいいよ。それこそ獲らぬタヌキの皮算用(かわざんよう)というやつだ。そのかわりお嬢さんは、必ずそのチロを使ったマジックアイテムの開発とやらを、成功させてくれよな」
「もちろんです！」
レミーナは、自信ありげに力強い笑みを浮かべた。

＊

こうして商談は成立し、その二日後、レミーナは無事にチロを手に入れ、それをティオに担がせて、マタグとその猟師仲間たちに見送られながら、猟師村を出発した。
その帰り道。
いつものようにレミーナはしゃべり、ティオは黙って、歩いてゆく。
「今回の旅は大成功だわ！　寝る場所も、食事も、おまけにチロまでタダだったんですもの！　あとは帰って、マジックアイテムを完成させるだけ！
二倍の早さで歩ける早足のサンダルは、旅をする人たちが、こぞって買っていってくれるに決まってる！
……ティオ、元気ないわね。もう疲れたの？」
いつもと同じのようではあるけれども、レミーナはその違いがわかるらしい。
「いえ、そういうわけでは、ないんですけど」
「じゃ、どういうわけよ」
「えっと、あの、その……。ボクって、役に立たないなって……。神団から受けた神殿の建立という使命が、簡単だとは思ってませんでしたけど、手がつけられるかどうかも皆目わからないし……」

「そうねー。それに協力する気は、まったくないけど、何するにしてもその前に、私への弁償を、すませてくれないとねー」

「弁償も、まだ一シルバーも払えないし、なのにレミーナさんはボクを家に置いてくれて、食事もベッドも提供してくれるし……」

「そのくらい、なんでもないわよ。ウチの家事も仕事も手伝ってくれるし、働き者だし、特に繕いものなんか、プロ級じゃない。

古い服の仕立て直しまでしてくれるから、助かっちゃうわ」

ティオは、ちょっと元気を取り戻して、自慢した。

「はい、実家が仕立て屋ですから！　学校でもみんなに頼りにされて、上級生も同級生も、それから下級生も先生も、みーんな繕いものを、ボクのところに持ってきてたんですよ。だから、腕は鈍ってないんです」

「ティオ……。あなたお人よしだって、言われたことない？」

「はい！　学校でもよく、みんなにそう誉められました！」

「あ、そう。ま、給料無しでお手伝いさんみたいなことさせてるから、悪いなとは、思ってるのよ。でも家には今、給料を払えるようなお金は、まったくないの」

それはティオにも、わかっている。

確かに仕事はさせられるけど、いわば家族の一員として、仕事を割り当てられているといっ

た感じでしかない。

さらにミリアは、「レミーナには内緒よ」と、こっそりお小遣いまで、くれたりする。

もっともヴェーンには、お金を使えるお店がないし、ヴェーンを出るときはレミーナと一緒だし、内緒という約束を守るためには、弁償にも使えないため、使い道がなく、貯まっていく一方だったりする。

「とんでもありません！　放り出されないだけで、感謝してます！」

「ティオ、あんたほんとーに、お人よしね」

「だけど、ボク正直いって、生活費は弁償金に上乗せされると思ってました」

レミーナは、何を言っているの？　とでもいう顔をする。

「あの、山道でのサンドイッチ四十七食みたいに、もったいないことしたら弁償させるわよ。それともティオ。あんた今家を出て、どっか寝泊りしたりゴハン食べてくアテがあるの？」

「……ありません」

「だったら、いいじゃない。ウチでは充分役に立ってるわよ。あなたが神官じゃなくって、魔法力があるなら、そのまま魔法ギルドの一員にしたいくらいだわ」

……ルナは、魔法にあふれた世界で、大半の人が魔法を持っているのだけれども、例外はある。

癒しや解呪といった、アルテナ様の力を与えられた者は、魔法が使えないというのも、その

一つだ。
それはともかく、ティオはレミーナに誉められたのに、またも落ち込み始める。
「……でも、その、神官としては、ボク役立たずなんです」
ティオの悩みは、どうやらそこに集約されるようだ。
だけどレミーナは、そんなの気にしなかった。
「アルテナ様の像を独占して、祈るのにお金を取るような神殿は、絶対に作らせないわよ。だいたいタダで奇跡を与えてくださるところが、アルテナ様のいいとこなのに……」
「それはそうですけどッ！」
めずらしく、ティオがレミーナの言葉を、遮った。
いくら気弱でも、一応神官だけはあって、信仰のことになると、黙ってはいられない。
「はいはい、あんたの言いたいことは、わかってるわよ。認めないけど」
「は、はい」
黙ってはいられなくても、軽くいなされてしまうあたりが、ティオである。
「それにね、みんなのアルテナ様を、自分だけのアルテナ様にする神官なら、役立たずで結構だわ」
「……いえ、その、あの、それだけじゃなくって」
「それだけじゃなくって、何よ」

「レミーナさんが怪我をしたとき、ボク神官なのに……」

「なによー。ちゃんとティオは、やったじゃない」

「でも、結局すぐそばにアルテナ様の像があって、最初からアルテナ様の像に祈りを捧げてれば、レミーナさんも痛い思いをせずにすんだわけで、しかもボクの祈りじゃ、結局レミーナさんを完治させることはできなくって。ボクの神官としての力は、結局アルテナ様の像がある場所じゃあ、なんの意味もないわけで……」

「あーッ！　もうッ！　ウダウダウダウダウダうっとーしい！」

レミーナは、叫ぶ。

「愚痴なんて、聞きたくないわよ！　だいたいね、もしティオが神官じゃなかったら、私はもうあそこから動けなくって、そのまま夜が来て、死んでたかもしれないのよ！　確かにティオは、私を完治させられなかったし、治療はものすごく痛かったわ！」

「す、すみません！」

「そこで謝らないで！」

「ごめんなさい！」

ティオは、反射的にもう一度謝ってしまう。

「でもね、あれで私が悲鳴を上げたから、マタグさんが来たのよ！　ティオがものすごく力のある神官で、痛みなんか全然なしで、私を完治させることができてたら、マタグさんはこなく

て、私たちは猟師村の近くにいるなんて気づかなくって、森で迷ったままで、そしたらやっぱり、死んでたかもしれないのよ！」

「でも……」

「でもじゃないわ！

大事なのは、ティオは精一杯やって、私たちは助かったってことでしょ！

気の弱いあんたにとって、痛がる私の足を引っ張るのが、どんなに大変なことなのか、私にわからないとでも、思ったの！」

「でも、怪我をしたレミーナさんの方が……」

「でもじゃないッ！」

「すみません！」

「とにかくティオはやり遂げたのよ！　足を引っ張って、骨を正しい位置に戻して、祈って治療してくれた。そりゃ完全じゃあなかったけど、それをやり遂げたことに、何の文句があるっていうの！」

ティオは、またも「でも……」と言いかけて、その言葉を飲み込んだ。

「だけど、アルテナ様の像の近くじゃ、ボクなんて……」

「あのとき、アルテナ様の像は、近くになかった！

私一人じゃ、間違いなく野たれ死んでた！

……もちろん、私一人でも、大人しく野たれ死ぬつもりなんて、ありませんけどね！　とにかくあそこにいたのは、ティオ！　あんただったのよ！　そして私のために、やり遂げた！　だからね、ティオ、一度しか言わないから、よーく聞きなさい」
「は、はい」
「ありがとう」
ティオが、え？　という顔をする。
レミーナの頬が、ほんのちょっと赤らんでいる。
どうやら照れているようだ。
「もう一度、言わせる気？　だったら、お金取るわよ！」
「い、いえ結構です」
その後も、レミーナはなんやかんやと話しつづけ、ティオは黙ってそれを聞いていたけれども、二人ともなんとなく、幸せそうだった。

＊

あれから、とっとと、ときは過ぎ去り、レミーナは順調にチロの毛皮を使った魔法のサンダルを完成させ、その試作品をラムス商会に持ち込んだ。
そして入荷していたチロの毛皮を、魔法のサンダル量産に向けて、買おうとしたとき、ラム

ス商会のカウンターごしに、レミーナは叫んでいた。
「どーしてチロの毛皮が、千シルバーもするのよ！」
その後ろには、オプションのティオが、いつもの情けなさそうな顔で、オロオロしている。
毛皮自体は、約束どおり入荷した。
だけどラムスがレミーナに告げた価格は、レミーナの叫びにあるように、千シルバーだったのである。
マタグが言ってた、五百シルバーの倍。
「絶対納得できない！　マタグさんは五百シルバーって、言ったのよ！　ちゃんとお小遣い帳にも、メモしといたんだから！　ラムスさん、長いつき合いだったけど、今さら私を騙すつもり！　ううん、今までも騙してたんじゃないでしょうね！」
「レミーナさん、あの、その、落ち着いて話し合いましょうよ」
ティオが後ろで、オロオロしながら、レミーナを落ち着かせようとしている。
だけど、逃げるドロボーに、待てと叫んでも無駄なように、落ち着けと言われて落ち着けるぐらいなら、そもそも落ち着けと言う必要など、ありはしない。
しかもティオの声が小さいもんだから、まったくレミーナの耳には、入っていないようだ。
一方ラムスは、いつもの愛想笑いを崩しもせず、レミーナが言いたいだけ言って、言うことがなくなるのを、じっと待った。そして……。

「レミーナちゃん。ちゃんと説明するよ。だけど、こんなところで立ち話もなんだから、奥へ行こう。お茶とお菓子を用意するから」

そして、そして……。

おおむね人は、口にものが入っているときは、あえて話そうとはしないものだ。

少なくとも没落しているとはいえ、旧家で名家のお嬢様で、そのことに誇りも持っているレミーナは、確かに深窓の令嬢には見えないけれども、それでも口に何かを入れたまま話すようなことは、常識としてできはしない。

ついでにいうなら、タダのお茶とお菓子である。

レミーナの家がどんなに赤字だろうと、いや半端な赤字じゃないからこそ、別にお茶とお菓子に苦労しはしないのだけれども、とにかくレミーナは、タダで貰えるものを、断りはしない。

つまり、わずかな生活費を、借金のカタに取り上げて、オーサ家の息の根を止めてしまえば、莫大な貸付金は完全に焦げついてしまう。

レミーナがタダに弱いということも、口にものが入っているときだけは、おしゃべりを止めるということも、そして金の卵を生む鶏の、首を絞めたらお終いだということも、ラムスはよく知っていた。

ラムス商会の明暗は、レミーナが金の卵を生むかどうかに、かかっている。

ちなみに、今日のお茶菓子は、ちょっと場違いなスルメの短冊。

しかも、ラーパから取り寄せた、砂漠大イカのスルメである。
噛めば噛むほど味が出るけど、なかなか手ごわい代物だ。
「ねえレミーナちゃん。確かに猟師村では、チロの毛皮は五百シルバーだ。それは僕も知ってるよ」
レミーナは、無言で頷いた。……モグモグモグ。
隣でお相伴に預かっているティオも、モグモグしている。
「だけど、それは現地価格なんだ。レミーナちゃんがもし、毛皮を猟師村からメリビアまで運んで欲しいって仕事があったら、タダで引きうけるかい？」
レミーナは、無言で首を、横に振る。……モグモグモグ。
「だろう？　旅費だっているし、こないだサルに襲われたときみたいに、荷物を失うことだってある。だから、メリビアに到着した時点で、毛皮はその分高くなる」
レミーナは、しぶしぶ頷く。……モグモグモグ。
「それでレミーナちゃんが、メリビアの商人だったとするよ。で、その毛皮を買って、人々に売る。そのためには商品を陳列したり、保存したりするための、場所がいるよね。店の建物も土地も、タダじゃない」
レミーナは、頷く。……モグモグモグ。
それについては、よーく知っている。

というよりも、最近よーく思い知らされた。
彼女が当主を継いだ直後、彼女の家であるところの古くて大きな館の維持費をケチったとたん、ひどい目に遭ったのだ。
館の屋根だろうが床だろうが、一見昨日と同じように、明日も存在しているように見えるのだけれども、実はそうではない。
特に日々の掃除や、空気の入れ替えなんていうありきたりのことを怠ると、あっというまにカビが生え、虫や小動物が住みつき荒し、ついには天井や床が抜けて、建物そのものが崩壊し始めかねない。
いや、すでにレミーナの家の屋根にはペンペン草が生え、大穴が一つ開いている。
しかも生えた雑草の根が、ますます屋根を傷めつつある。
どうにかしなくちゃと思うんだけれども、レミーナにできるのは草むしりか、つけ焼刃の素人修理がせいぜいで、それじゃあ根本的な解決にはならず、館は今でも徐々に、崩壊しつつある。
どうにかするには、館全体を一度にリニューアルするしかないのだけれども、なまじ古くて大きくて栄光の時代の粋を集めて作られた館であるため、そのためには、普通サイズの新しい家が、三軒建てられるほどの費用が、かかる。
しかたなくレミーナは、絶対に失いたくはない、貴重な古文書が数多く納められている、図

書館と、ヴェーンの住民に貸している比較的小さな家の修繕だけで、あきらめた。
ちなみにラムス商会からの多額の借金の大半は、この費用に由来する。
めずらしく落ち込んでいくレミーナを前に、ラムスは話しつづける。
「商品の手入れも必要だ。生物は腐るし、布や皮は虫に食われないようにしなきゃいけない。鍋だって、埃だらけの錆びだらけにしていたら、誰も買わない。……とくにチロの毛皮は、特別な手入れをつづけないと、皮の部分がすぐボロボロになるしね。つまり、維持費がかかるということさ。
レミーナちゃん、面倒な商品の手入れを、タダで毎日やってくれる人がいると思うかい？」
レミーナは、首を横に振る。……モグモグモグ。
話のたどり着く先は、もう見えた。
そういう計算は、思いつかなかっただけで、一を知れば十を知る。
レミーナは、そういう子だ。
「というわけで商品には、人件費その他必要経費が、含まれる。とはいえ、商品を百売るために、二千シルバーの経費が必要だったとしても、何でもかんでも売値を二十シルバー上げるわけにはいかないんだ。一シルバーの糸巻きに、二十一シルバーの値札をつけたら、売れるわけがない。となると、商人はどうするべきかな？」
モグモグ、ごっくん。

「一シルバーのものは二シルバーで。十シルバーのものは、二十シルバーで。五百シルバーのものを千シルバーで売って、必要経費を捻出しなくちゃいけないんだわ」

そう言うレミーナは、ものすごく悲しそうだった。

「その通りさ。というわけで、現地で五百シルバーのチロが、ここで千シルバーというのは、僕は適正な価格の範囲内だと思っているよ」

「だったらなぜ……」

「なんだい？」

「みんな現地で買わないのかしら。その方が、安いのに。お野菜だって、お魚だって、お鍋だって、武器や防具や、それにチロだって。お店を通さず全部自分で、作っている人から買えば、ずっと安いのに……」

ティオが、不安そうにレミーナを見上げた。

彼女の言葉が、ラムスを不快にさせたのではないかと、心配したのだ。

だけどラムスは、愛想笑いを崩さない。

それはいつものことだけど、実際別に気を悪くもしてないらしい。

レミーナは、ラムス商会の店員たちと比べても、勘の良い生徒だからだ。

ラムスは、商売の話を理解してくれるレミーナを、心地よく感じた。

「レミーナちゃん。働く人の手間や時間を、忘れているよ」

「え？」
「人件費さ。野菜一把のために、農村へ行って帰って一日つぶれる。魚一匹のために漁村へいって帰って一日つぶれる。行っても手に入らないかもしれないし、途中で事故に遭うかもしれないってのにだよ」
「じゃあ商売の基本って、運び賃ってことなの？」
「それも含まれるけど、厳密にはそうじゃないんだ。商いは、他人を満足させて、お金を貰う仕事なんだよ」
　レミーナが、そしてティオも、きょとんとする。
「ものの価値と同じだけのお金を貰うなら、それはただの交換さ。お金を出した方がお客様ってわけじゃないんだ。そのもの以上の価値を加えて売って初めて、商売になる。
　ただ、その価値はさわれるようなものじゃあないんだ。たとえば、遠くまで行かなくても手に入れられるという便利さ。そこへ行けば必ず手に入るという安心感。商品の質に対する信頼感。いいものを買ったという満足感。そういったものが無きゃいけない。商人の笑顔もね。それに、商品を仕入れるときだって、相手を満足させてこそ、商人さ」
　レミーナが、目を丸くした。
「それじゃ、商人は損するばっかじゃない」
「違うよ、レミーナちゃん。誰かが得するには、誰かが損をしなきゃいけないわけじゃ、ない

はずなんだ。どっちにとっても得な取引で、両方が満足するのが、僕の理想の商売さ。
売りたい人のためにも、買いたい人のためにもなる。安定した適正な価格で、商品を売る。物だけじゃない。仕事でも、娯楽でも、なんでもさ。需要があるなら供給し、供給があるなら需要を見つける。それが社会の一部としての……」

……ラムスは得々と話していたが、レミーナが、それからティオも、ぽかんとしているのに気がついて、それをやめた。

つい、調子に乗って、やりすぎてしまったらしい。

「……といっても、わかんないよね。商品を右から左へ流して、儲けるのだけが商いだと、誰もが……商人でさえ、思ってるものなぁ。それに理想は、ほんのちょっとでも実現して見せないかぎり、説得力がないし……」

ラムスの話は、だんだんと独り言になってしまう。

彼にしては、めずらしいことだ。

レミーナは、小さく肩をすくめてから、残っていたお茶を飲み干した。

そして、あまり嬉しくはなかったけれども、納得して、千シルバーのチロを買って帰ったのである。

「なんで千五百シルバーなわけ！　前より小さいチロなのに！」

レミーナは、早速作り上げた魔法のサンダルを、ラムス商会に売りに来た。
もちろん、ティオも一緒。
そして後ろにティオをくっつけたレミーナは、ラムスに詰め寄った。
ティオはその後ろで、いつも通りオロオロとしている。
ラムスはちょっと、肩をすくめる。
「需要と供給だよ。レミーナちゃん。キミはまったくなかったチロへの需要を、作り出してしまったんだ。しかも、猟師たちに大きなことを話したらしいね」
「だって、私がこの魔法のサンダルで、大儲けするつもりなのは、本当だもの」
「……ここんとこ、天候不順で森の獣たちまでおかしくなってるのは、知ってるだろ？　まともな獲物の数が、減っているんだ。
だから猟師たちは、生活のためにチロを一シルバーでも高く売りたがっている。
しかも需要が生まれたことにより、他の商店もチロを扱い始めた。猟師たちは、一シルバーでも高く買う店に、チロを持ち込んでいる」
「それって、おかしいわ！　だって、私しか買うはずないのに！」
「そうでもないらしいんだよ」
ラムスはもう一度肩をすくめ、そしてレミーナは、千五百シルバーのチロを、買うしかなかった。他の店にもあったのだけれども、本当にラムス商会が、一番安かったからである。

「なんで三千シルバーなわけ！」

またもレミーナは、店先で叫んだ。

ティオは……以下略。

ラムスは、すまなそうな顔をして、肩をすくめる。

「魔法のサンダルが、結構好評だったからね」

「それとこれと、どう関係があるっていうのよ！」

「チロを材料にした製品が売れるなら、チロの価値も上がるに違いないと、みんなが考えたんだよ」

「そんな！　そんな高いチロを買ってたら、なんの儲けも出やしない！　それどころか赤字だわ！　いったいどうしたらいいっていうの！　前に言ってた理想の商売の適正価格ってやつは、どうなったのよ！」

「僕だけがそう思っていても、仕入れ値が高騰してるんだ。三千シルバーっていう値だって、レミーナちゃんには特別、商売の基本を外れて、ラムス商会の儲け無しでやってるんだよ。これでサンダルを作ってもらって、それを仕入れたいから」

「三千シルバーのチロなんか使ってたら、今度は私が儲け無し……、ううん赤字になっちゃうわよ！」

「価格を、考え直すしかないだろうねぇ」

「なんでッ！　なんで六千シルバーなのッ！」

「原因は、いくつかある」

「どんなッ！」

　いつもニコニコ愛想のいいラムスが、しぶい顔だ。

「まず、サンダルが高くなったからには、チロの価値も上がっただろうと、みんなが考えた。二つめは、チロがもっと高くなるだろうと、他の商店がチロを売り惜しんでいること。みんな、もっとチロが値上がりしてから売って、儲けたいと思ってる。チロは、投機の対象になったんだよ」

「そんな！　おかしいわ！　だって、実際に使うのは、私だけのはずなのに！」

「さあねえ……。こないだは、レミーナちゃんも知ってる、あのボーガンさんの使いが買いに来たよ。お金に糸目をつけないから、あるだけ売ってくれって。よその店でも、買い集めているみたいだ。彼もマジックアイテムを、作るつもりなのかな？」

「ボーガンですってぇ！」

　とたんにレミーナの金の髪が、フワッと広がった。本気で怒り出した兆候だ。

「あの魔法無能力者に、マジックアイテムを作れるわけがないじゃない！　どーせみんなが買ってるから、自分も買っただけなのよ！

でなきゃ、私の真似をして、魔法使いでございっていうフリをしたいんだわ！

ううん。ボーガンのことだもの。私への嫌がらせのためだけに、チロを買いあさって、値を吊り上げているに違いないわ！」

「……嫌がらせのためだけに、こんな高くて、他に使い道がないもの、買い集めるかなー」

「あいつなら、やるわよ！　私を嫌ってるに違いないんだもの！」

「なんでそんなに、レミーナちゃんを嫌ってるんだい？」

「私がちょっと、意地悪したからよ！　だって、魔法力がないのに、魔法ギルドに籍を置いて、お母様にベタベタとつきまとったのよ！　追い出して、当然でしょ！」

レミーナの後ろで、ティオがイヤーな顔をする。

「レミーナさん、イジメしてたんですかぁ」

「いーのよッ！　相手はボーガンなんだからッ！」

ティオは、わりかしイジメられっ子の方である。

だから、ボーガンに同情したいような気にもなったのだけれども、ティオがアルテナ神団で、ちらりとだけだけれども見たことがあるボーガンなる人物は、レミーナよりもずっと年上で、身体も大きくて、堂々としていて、だからどうやっても、レミーナにイジメられているボーガ



ンを、想像することができなかった。
　一方ラムスは、すまなさそうな顔で、こう言った。
「で、どうする？　このチロ、買っていくかい？」
　レミーナも、すごくイヤそうな顔で、こう言った。
「……買うわ。魔法のサンダルの売上全部使って、買ってくわ。でないと、次のサンダルが、作れないんですもの」

「どうして一万シルバーなのッ！」
　いつも愛想のよいラムスが、本当に難しい顔をして、こう言った。
「レミーナちゃん」
「なによ！」
「もし手元にチロの毛皮があるなら、高値で買い戻すよ」
「あるわけないじゃない！　全部サンダルに、しちゃったわ！」
「それから、悪いニュースがあるんだ……」
「これ以上、なんだっていうの！」
「サンダルに欠陥（けっかん）が見つかった。二倍の速さで歩けるけれども、四倍疲れるらしい。それをどうにかしないかぎり、あれはもう売れない」

「じゃあ、今日持ってきた分は……」

「今日の分は買おう。だけど、ある分が売れないかぎり、もう仕入れることはできない。……でも売れる見込み薄だ。他に仕入れるっていう店があるなら、そっちに卸してくれてもいい」

ラムスが指した先には、前回レミーナが持ち込んだサンダルが、そのまま山積みになっていた。しかも、『五割引』の赤札が添えられている。

レミーナは、とたんにその場に、座り込んでしまった。

「なんで？　なんでサンダルが安くなってるのに、チロは高いままなのよ」

「みんなが、チロはもっと高値になると、思っているからさ」

ラムスは遠慮がちに、レミーナにたずねる。

「……チロ、買っていくかい？」

「そんなお金、あるわけないじゃない。それにもうサンダルだって、売れないのに」

「改良することは、できないのかな？」

「魔法理論上、そんな欠陥が出るはず無いわ！　だからどう改良したらいいかも、思いつかない！　研究するにも、材料のチロが高すぎる。

……もうダメよ。少なくとも、チロを使うものは、当分ダメ」

「そうだね、チロには当分、手を出さないでいたほうがいい。ラムス商会でも、レミーナちゃんの分以外は、チロの取り扱いを止めてるんだ。一応レミーナちゃんが買うかなと思って、と

っておいた分を、誰かに売って、おしまいさ」
「あの、どうしてですか？」と、ティオ。
影は薄いが、今回もちゃんと、レミーナにくっついて来ているのである。
「どうしてって、何がだい？」
「だってサンダルは売れなくても、チロはまだ売れてるんでしょ？　レミーナさんに関係なく。なぜ扱いを止めるんですか？」
「もうすぐこの実体のない騒ぎも、おしまいになる。その前に売り逃げてこそ商人だと言う人もいる。だけどそれは、あまり僕の趣味じゃないんでね」
「え？……じゃあ、みんなもうチロが売れなくなることを、知ってて……」
ラムスは、ゆっくりと頷いた。
「そうなんだ。ババ抜きみたいなものさ。誰かが最後にババを引くことがわかっていても、みんな勝つつもりでゲームしてるんだ。
このゲームに加わっている大半の人が、ババを引くことになるだろうね。ババは毛皮の枚数だけあるんだから」
「そんなー。それでラムスさんは、それをただ見てるんですか？」
「ことあるごとに、忠告はした。だけどみんな、他の人が儲けているときに、自分だけ儲けそこねたくないんだ。メリビアの街の中で、チロの毛皮がグルグル回りながら、値上がっている

だけなのにね」
　レミーナが、床に座り込んだまま、ラムスを見上げて叫んだ。
「そりゃそうよ！　私だってお金があったら、チロを買って値が上がったとこで売るわ！　最初は一匹五百シルバーだったのよ！　それが今は一万シルバー！　待ってるだけで一匹あたり九千五百シルバーも、儲けることができたのよ！　私が苦労して作ったサンダル全部の売上より、ずっとずっと大きいわ！」
　だけどラムスは、しみじみとこう言った。
「レミーナちゃん。僕は今レミーナちゃんにお金がなくて、本当によかったと、そう思っているよ」

*

　結局チロは、最高一万二千シルバーの値をつけた。
　そしてその直後、突然値が下がり始めると、それまでどの店でも売り切れ状態だったのに、あれよあれよと店頭に積み上げられ、そのまま売れもせず、どんどん値を下げつづけていった。
　しかも手入れが悪かったのか、その大半は皮の部分がボロボロになって崩壊し、ただのゴミとなりはてて、メリビアのチロバブルは崩壊したのである。
「ボーガン！　ざまーみなさい！　あんたなんかね！　あんたなんかね！　使えもしないチロ

の毛皮抱えて、大損こいてりゃいいのよ！」
「ああ、そのことだけどね、レミーナちゃん。噂によると、彼はかなり儲けたらしいよ」
「なんですってー！」
「しかも不思議なことに、その後でまた、タダ同然になったチロを、手当たり次第集めていったみたいなんだ。どうするつもりなんだろうね？」
「知るもんですか！
……ちょっとまってよ！　っていうことは、私が今、安くなったチロの毛皮を、マジックアイテムの開発用に欲しいと思っても……」
「そうなんだ。今メリビアには、チロの毛皮は一枚も残っていないんだ」
「絶対嫌がらせだわ！　ボーガンの、私に対する嫌がらせに違いないわよ！」
叫びまくるレミーナの後ろで、ティオがラムスに、表情だけで「そうかなぁ？」と問うと、ラムスは小さく肩をすくめただけだった。

＊

いつものように、レミーナがお小遣い帳を前にして、お金を儲ける方法はないかと頭をひねる、ヴェーンのうららかな午後。
といっても、そうそう思いつくものではない。

マジックアイテムの製作販売は、とりあえずやめにした。
コレと思えば全力投球するけれども、ダメと見切りをつければあっという間に気持ちを切り替える。
それがレミーナの気質だからだ。
それに、マジックアイテムを作るといっても、全部レミーナが手作りしなければならないから量産するにも、ほどがある。
魔法ギルドの当主が、内職みたいにコツコツマジックアイテムを手作りしたからといって、ギルドが復興できるほど、甘くはない。
栄光の時代ギルドを潤したマジックアイテムは、多数の魔法使いの職人たちによる、分業体制で製作されたらしい。
……ってことは、ギルドを復興しなけりゃ、マジックアイテムで儲けることも、できないってことよね……。
「レミーナ、お客様よ」
「はーいお母様。借金の取り立て？　それとも、ひさしぶりに自称勇者殿？」
……勇者なら、思いきり怒鳴りつけて、ストレス発散できるのにな。
だけど応接室で待っていたのは、クマのような猟師。
「あら、マタグさん！」

「今日は、礼に来たんだ」
「お礼？　何の？」
「チロのだよ」
「でも、チロはあっというまに売れなくなって……。期待だけさせて、申し訳ないと思ってるんです」
「まあ、わしらとしても、ずっと高く売れてくれたほうが、ありがたい。
が、何の役にも立たなかったチロが、ほんのしばらくとはいえ、バカスカ高値で売れてくれた。あれで失敗したヤツがいないとは言わないが、オレは稼ぎを蓄えて、おかげで世帯を持つことができたんだ」
「あら、そうなんですか。おめでとうございます」
「それでな、これはその礼だよ。これを実際に必要としているのは、あんただけだと、ラムスが言っていたからな」
マタグが袋から取り出したのは、チロの毛皮。
「オレたち猟師は、獣の命をもらって、生計を立てている。獣を与えてくれたアルテナ様に感謝する。その獲った命が何の役にも立たず、捨てられていくとなれば、アルテナ様に申し訳ない。それでここへ持ってきた。貰ってくれるかな？」
「はい、喜んで」

レミーナは微笑んで、チロの毛皮を受け取った。

＊

没落したとはいえ、旧家で名家で魔法名門のオーサ家には、正体不明の、一見なんの使い道もないガラクタが、たくさん転がっている。

そこに、ボロボロにならないように、保存の封印が施された、ちょっと臭くてゴワゴワした、チロの毛皮が加わった。

レミーナが、いつかチロがまた高値になることを祈って手元に置いたのか、それとも研究用に置いてあるのか、はたまたこの騒動の記念なのか、ティオの知るところではない。

だけどティオは、その毛皮を見るたびに、レミーナの足を引っ張った、あのときのことを、思い出すのである。



レミーナのお小遣い帳

今回の収入

魔法のサンダル売上代金	S2,000
	(200S×10)
魔法のサンダル売上代金	S3,000
	(300S×10)
魔法のサンダル売上代金	S4,000
	(400S×10)

今回の支出

チロ	S1,000
チロ	S1,500
チロ	S3,000
チロ	S6,000

今回の収支　マイナス2,500S

（※1S（シルバー）は100円前後）

第三話　難点のある不動産



メリビアは、陸路海路に恵まれて、物も人も常に流動する、生きのいい町だ。
各地の美味珍味、各地の料理人たちが集まっているため、「メリビアの食い倒れ」という言葉もあり、そのせいでメリビアッ子は太っているのだとさえ、言われている。
そういえば、メリビアの老舗の若旦那、ラムスも結構な太め。
しかし、太めなのはなにもメリビアッ子ばかりではない。
メリビアの高級割烹旅館、海千山千亭には、ラムスなんか目じゃないほど恰幅のいい男が、長期滞在していた。
年のころは、四十弱。
羽振りのよい、やたらと尊大に振る舞うが、そうすればするほど、その品性の低さがそこからスケて見える、よくいる権力を笠に着る成金タイプである。
そのうえ朝昼晩夜食と、こってりしたフルコースを綺麗に平らげ、食事の合間は部屋に閉じこもってなにやらしているのだが、その間に消費される肉入り丸パンは、一つや二つではない。
運動らしきことは散歩すらせず、こんな食生活をつづけているもんだから、全身に日々だらしのない脂肪をため込み、顔はいい年こいてニキビ……いや吹き出物だらけ。
そう、彼こそがタラコ唇で、ねちゃねちゃした話し方をする、魔法力のない自称魔法使い、

レミーナの仇敵ボーガンその人であった。

しかし、海千山千亭にとっては、それほど悪い客でもない。

海千山千亭は、海から千の食材を、山から千の食材を集め提供すると豪語するだけあって、値段の方も目の玉が飛び出るほど高い。

代金はまとめて先払いだし、時間通りに食事を提供している間は、なんの文句も言わないし、雑用係は連れてきているし、ほとんど部屋から出てきもしない、手間のかからない客だからだ。

それにその雑用係、ボーガンの連れの方は愛想がいい。

彼の甥ということだ。

だけど、見た目はまったく似ていない。

平凡な、二十歳前後の青年。

ただしボーガンと一緒だと、二枚目半も二枚目に見える。

何事もそつなくこなし、いつも明るく、海千山千亭の従業員たちにも、挨拶をかかさない。

名を、モーリス。

正確にはモーリス・ボーガンという。

この二人がメリビアにやってきて、海千山千亭のスイートルームに泊まり込んだのは、つい二十日前。

ボーガンの書きつけを手に、モーリスがメリビアを走り回るだけで、魔法のように、お金が

ボーガンの元に集まってきた。
たとえばある商品を買う約束をし、手付金を払う。
そして、商品を受け取る前に、それを売る。
ボーガンは商品を見ることもなく、売買の差額だけを手に入れた。
店舗も倉庫もいらない商売だ。
買ってから売るまでの時間は、長くて三日。
半日なんてのもざらにあるし、ときには買う前に売り契約を結ぶことまであった。
扱う商品はなんでもあり。
その中でも、もっともボーガンを儲けさせたのは、チロの毛皮であったという。

ボーガンが、よいこらせと椅子から立ち上がり、甥を呼んだ。
「モーリス！」
「おじさん。なんか、用？」
平凡な青年が、顔を出す。
「おじさんと呼ぶのはやめい！　ボーガン様と言えと、いつむぉいっているどぁろうが！」
(註・ボーガンのねちゃねちゃ語は、読みにくいと不評のため、ねちゃ度を30％減量させていただきました)

「そんなこと言ったって、オレだって、モーリス・ボーガンなんだぜ。ボーガン様だなんて、笑っちゃって呼べないよ」

ボーガンは、苦虫を噛み潰したような顔をする。

この甥は、頭の回転が早く、能力もあり、勘が鋭く、そつなくよく働く。

とくに口先と手先の器用さは、抜群だ。

ついでに、ボーガンには理解できないことなのだが、出世欲がない。

面白ければなんでもやるし、そうでないなら手を出さない。

そしてモーリスにとって、人を騙したり、足をすくったり、陥れたりすることが、面白いことらしい。

知恵も能力も、そして勤勉さも、そのために使われる。

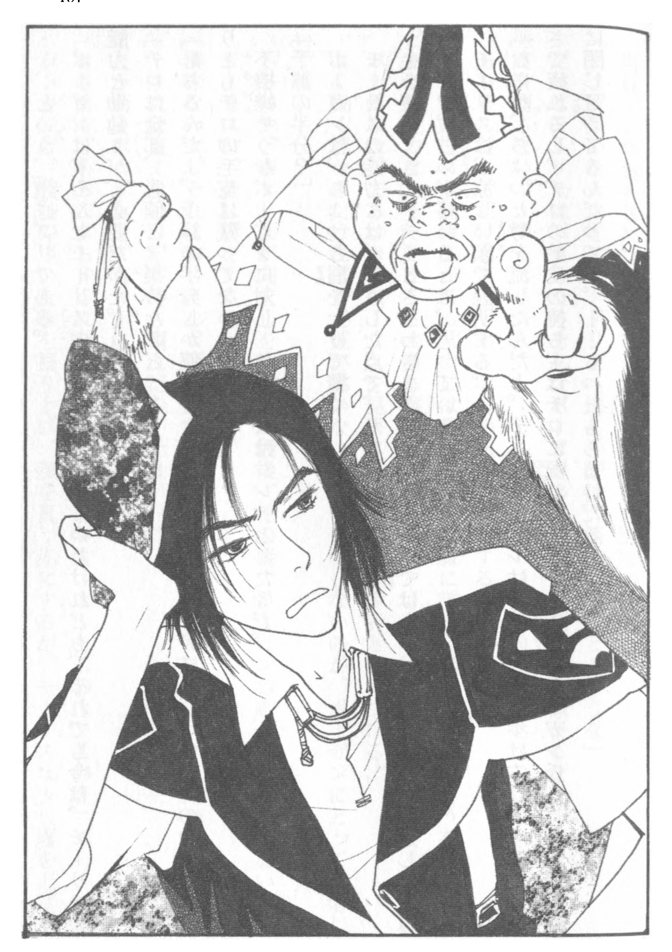
その上、飽きっぽい。

そのモーリスがボーガンを手伝っているのは、面白いからだ。

面白がっている間は、ボーガンが邪険に扱おうとも、仕事を手伝うだろうし、飽きれば大金をつもうとも、指一本動かさない。

いや、別れ間際にボーガンをだまくらかして、ひと笑いしようとたくらみかねない、そんな自分本意の若者だ。

普段愛想がいいのも、後で手のひらをかえす機会があったら、落差が大きいほど面白いから



……、という、徹底ブリである。
　ボーガンは、そんなモーリスの性格を良く知っていたけれども、それでも今は、モーリスの能力と勤勉さが、必要だった。
「チロは全部、底値どぇ集めたのどぅあろうぬぁ！」
「もちろんだよ。予算の半分しか使ってないけど、もうメリビアには、ボロボロのやつ一枚たりともチロの毛皮は残ってないよ」
　不機嫌そうなボーガンに対し、モーリスはシレッとした顔だ。
「予算の半分？」
　ボーガンは、ちょっと眉を上げて驚く。
　モーリスの能力には、こうした点で、たびたび驚かされる。
　金を使うときとケチるときをわきまえているボーガンではあるけれども、彼が想定した予算の半分で買占めが終わるとは、思っていなかった。
　モーリスは、涼しい顔で説明する。
「なにね、ちょっと噂を流したんだよ。チロのサンダルは二倍の速さで歩けるけど、四倍の速さで疲れるし、チロの毛皮の持ち主はチロに呪われて、チロ成金のボーガン氏も、それで旅館に閉じ篭ってるんだってね。……もっともらしいだろ？」
　得意そうなモーリスに、ボーガンは渋い顔のままだ。

別に、気に食わないことがなくても、愛想が悪い方なのだ。

「どぇ、集めたチロをペンタグリアへ送る手配は、済んどぁんどぁろうな」

だけどモーリスは、まったくそんなボーガンの態度など、気にする様子もなく、飄々とした態度を崩さない。

「もちろんだよ。だけどさー、あんなもの送ってどうするんだい？」

「チロには様々な利用法がある。少しはお前も古の知識に学んどぁらどうなのどぅあ？　それどぁけの能力はあるくせに、この持ち腐れぐぁ」

ボーガンは、まるっきりモーリスを見下した態度で、怠け者と決めつける。

よく働く甥なのだけれども、気が向かないことは一切しないのが、ボーガンにとって口惜しい。

……いや、モーリスが向上心を持ったが最後、その場でボーガンの敵と、なりかねないが。

モーリスは、少し肩をすくめただけだ。

「興味ないよ。それにおじさん、魔法力ないじゃん。魔法書読んだって、チロ持ってたって、宝……には見えないけど、持ち腐れだろ？」

とたんにボーガンは、真っ赤になる。

「きさまも、あのこましゃくれたレミーナと、同類か！　こ！　この！　この！」

ボーガンは、脂肪のついた拳を振り上げ、顔を真っ赤にするが、モーリスは少し眉を上げた

だけだ。

「おじさん。あんまり怒ると、身体に悪いよ。ただでさえ食べ過ぎの、運動不足だってのにさ。一日一回は散歩したほうが、いいんじゃない？

あ、だめか、おじさん間違いなく、買い食いするから、散歩に行く前よりも後のほうが、体重増えてることだけは、間違いないもんなー。

にしてもどうしてそんなに、魔法力が無いことを気にするのかなー」

モーリスの言う通り、ルナの人々のほとんどが魔法を持って生まれるが、どんな魔法かは運次第であるため、特別便利な魔法を持って生まれた者でないかぎり、普段意識もしないものだ。

一方ボーガンは、この甥に対して怒るまい怒るまいと、自分に言い聞かせていた。

どうせ怒っても暖簾に腕押し、カエルの面にション◯ン（失礼）。

それにモーリスは、言ったら面白いだろうと思ったら、後先考えずに口にする。

ボーガンが怒れば怒るほど、増長しかねない。

ボーガンはゼイゼイ息を整えて……。

「おじさん、ダイエットしたほうがいいぜ」

「うるさい！……チロはな、ワタシが集めた魔法使いどぉもに、マジックアイテムを創らせる、貴重な材料なのどぁ！」

「おじさんも、魔法のサンダルを作って売るっていうのかい？」

「持っているどぁけで身軽になるアミュレットを作る。その方が簡単に、大量に作れるし、効果も確実どぁ。そしてそれをルナどぇ一斉に、高値どぇ売り出すのどぁ」
「なんか、ありきたりだなぁ」
「お前にやれとは、言わんわい！　お前には、お前向きの仕事を見つけてある！」
「どんな？」
「よく聞けよ……」
「面白い話ならね」
ボーガンは、モーリスを蹴飛ばしてやりたくなったものの、なんとかそれをこらえた。
アルテナ神団に取り入って、魔法力を手に入れた暁には、泣いて頼んでも、こいつを絶対蹴り出してやる！

＊

レミーナの家、つまりオーサ家は家計が破綻しているけれども、財産がないわけではない。
どちらかというと、維持費がかかる財産がありすぎることが、家計を破綻させているといってもいい。
……古い館を取り壊し、ガラクタを全部捨て、並の家に住み換えるだけで、援助を求める似非勇者に悩まされることもなく、ヴェーンの地代を生活費にして、のんびり暮らしつづけるこ

とができるだろう。
だけどレミーナは、過去の栄光にこだわりつづけた。
ヴェーンそのものも、地の利も悪く、耕作地にも恵まれず、そこで暮らす人々は、素朴ない人たちばかりだけれども、豊かではない。
しかし昔は、ヴェーンは、壮大な空中都市だった。
そこには畑のかわりに、整備された公園や、魔法薬草園の巨大な温室があった。
磨かれた大理石の館や歩道を、力ある魔法使いたちが、静かに散策し、それぞれの研究室からは様々なマジックアイテムが作り出されていた。
……と、古文書にはある。
そしてそれが、単なる夢物語ではない証拠に、町でちょっと家の改築をしたり、畑を広げようとしたりすれば、なにかしら出て来ることも、珍しくはない。
何が起きるかわからないマジックアイテムのこともあれば、単なる忘れられた宝箱のこともある。
でもって、そのすべては、地主であるオーサ家のものだ。
町の人は豊かではないけれども善良だったので、ネコババはしない。
それに、オーサ家が町を維持してくれているその意味も、知っていた。
ヴェーンでは、誰もが水の魔法の水道や、氷の魔法の冷蔵庫、火の魔法のかまど、光の魔法

のランプなどを、日常的に使っている。
ティオも、来たばかりのころは、ずいぶん驚いたものだ。
……魔法のサンダルよりも便利そうなこれらが商品化されないのは、これらが本物のマジックアイテムではなく、ミリアやレミーナが、定期的に魔法を掛けなければならない、簡易版だからだったりする。
万一地主が変われば、他の町にはない便利な暮らしを失うだけでなく、もっと基本的な、生活にかかわる部分が、おびやかされるだろう。
……ヴェーンの賃貸料も借地代も、地の利が悪い田舎町ということを差し引いても、ひどく安い。
それはそれとして……。
歴史と伝統の魔法名門オーサ家に、代々伝わる習慣であるところの、午後のお茶の時間の少し前。
ミリア特製の焼き菓子の甘い香りが、ヴェーンの町に漂い始める頃。
誰かがまた宝箱を掘り出したというニュースでも届かないかしらといった、現金な夢想をしながら、レミーナはいつものように、お小遣い帳とにらめっこしていた。
……十四歳の女の子のお小遣い帳とは思えないような、万シルバー単位の負債が、真っ赤な字で延々と書き連ねられている。

「レミーナさーん、お手紙ですー」

ティオが、パタパタと走ってきた。

今ではすっかりオーサ家の一員として馴染んでしまっている。

彼が行える奇跡の力は、ルナのどこにでもあるアルテナ様の像に及ぶことなく、そんなわけで町中で彼の神官としての力に期待する者は誰もいないけれども、普通のいい子として町の人人にも、受け入れられた。

ただしティオだけは、神官として、ではないことに引け目を感じているようだ。

なにせヴェーンは、もともと魔法都市。

伝統的に宗教臭い町ではない。

もちろんヴェーンの人々は、アルテナ様を信じ、敬愛し、祈りを欠かさない。

アルテナ様の像の周りだって、いつも綺麗に掃除されている。

大人たちは散歩に訪れ、恋人たちは逢引し、子供たちは像に這い上がって遊んだりもする。

春と秋には、像の周りに集って飲み食いし、歌い踊ったりもする。

それをいつも微笑みながら見守っている、アルテナ様（の像）。

……少し前まで、ルナのどこででも、いくらでも見られた光景だ。

だけどアルテナ神団の「正しい教え」によると、アルテナ様（の像）は神殿に奉られ、人々は礼儀正しく作法を守って厳かに敬い、……そして歌や踊りも、愛のささやきも、もちろん像

に這い上がるなんてことは、不敬なことなのだそうだ。
許されるのは、微動だにせず歌われる、賛美歌ぐらいのものらしい。
その教えは、今ゆっくりとルナの各地に広まりつつある。
そしてティオもまた、アルテナ神団からヴェーンに、正しい教えの布教と、神殿の建立のために派遣されたのだが……。
アルテナ神団が何を考えて、彼を派遣したのかは知らないが、はっきりいって力不足。
今ではオーサ家の居候。レミーナのオマケと、なりはてている。
「手紙なんて、めずらしいわね。請求書かしら？」
そのティオから手紙を受け取ったレミーナは、それを読み始めると、とたんに姿勢を正し、身を乗り出し、瞳を輝かせ始めた。
もちろんその瞳の輝きは、ルナの一般的な通貨、シルバーの輝きである。
そしてティオは、またレミーナが何かを始め、そして自分がそれにつき合わされることを、予感した。

＊

「で、レミーナさん。あの手紙に、何て書いてあったんですかぁ？」
すっかり旅支度で、メリビアへ向かうレミーナとティオ。

「言ってたでしょ！　テミスで起きた、怪しい事件を解決しに行くのよ！　魔法ギルド当主たるレミーナ・オーサ様にしか解決できない、難事件ですって！　しかも報酬はばっちりよ！」

「聞いてませんよー。だってあの手紙読んでから、スゴイスゴイって大騒ぎして、飛び出してきたんじゃないですかー」

「そうだったかしら」

「そうですよー。……危険な仕事……じゃないですよね？」

ティオは、おうかがいをたてるように、レミーナにたずねる。本当は、「危険な仕事だったら、イヤだなぁ」と言いたいところだったんだけれども、自分には選択の自由などないのだという思い込みが、彼にそんな言い方を、させるのである。

「知らない」

「え？」

「手紙には、書いてなかったもの。

魔法ギルドの当主たる私にしか解決できないような難事件だっていうことと、報酬は前金で五千シルバーで、さらに成功報酬として五千シルバーだってことだけ」

ティオは、泣きそうな顔をする。

「……大丈夫なんですか？　その仕事」

「依頼主に会って、話してみなきゃわからないわね。それに、魔法的事件の解決に乗り出すの

は、魔法ギルドの使命だわ！　それにむざむざ前後合わせて一万シルバーの仕事、逃してなるもんですか！　それよりティオ！」

「……なんですか？」

「無駄口叩いていると、またバテるわよ！　今日はいっきに、山を越えるからね！　おサルに襲われたくなければ、ちゃんとついてきなさいよ！」

「……はい……」

なにせ二人は、二倍の速さで歩ける（本当）けれども四倍疲れる（らしい）、レミーナお手製の魔法のサンダルを、履いているのだ。

……レミーナさんの方が、よく喋っているのに……、とは思っても口に出せない、ティオであった。

＊

メリビア。

高級割烹旅館、海千山千亭。

正装ですまし顔のボーイに案内され、奥の特別高級そうな個室に通され、手紙の主を待つ二人。

テーブルの上には、高級そうなティーカップに、高級そうなお茶がそそがれ、高級そうなお

皿の上に、これまた高級そうなチマッとしたケーキが、ちょこんと載せられていたりする。
ティオなんか、完全にびびってしまっているけれども、レミーナの方はさすがに没落しても、旧家で名家で名門の出身のためか、ティーカップを持つ小指の先まで自然体で、お茶を楽しんでいる。
「な・なんか、すごい店ですよね……」
きょろきょろしているティオに、レミーナはなんでもないとでもいう顔だ。
「確かに、すごいわよね。すごい成金趣味」
なにせ部屋の装飾から、ティーカップのたぐいまで、金銀がふんだんに使われて、キラキラ光っているのである。
スプーンだって銀製で、持ち手になにやら細かい細工まで、なされている。
案内してくれたボーイは、その一つ一つについて蘊蓄をたれながら、お茶を入れてくれた。
「でも、どれもこれも、高そうですよ。このお茶もケーキも……」
お茶にもケーキにも、金箔入りという念の入れようだ。
レミーナは、呆れた顔をする。
「確かに見た目はすごいわね。室料もお茶やケーキのお代も、きっと目の玉が飛び出るほど高いはずよ。
だけど私に言わせれば、お茶もケーキも味は平凡。部屋の装飾も、上品とは言いがたいわ。

それを無駄な金銀で、飾り立てているだけ。
本物の高級品っていうのはね、身近に置くものなら、金銀細工でも人を威圧したりせず、しっくり馴染むものなのよ。この部屋の装飾は、まるで中にいる人に、ケンカを売っているみたいだわ。
ティオが落ち着かなくなるのも、しかたないわね」
「あわわわわわわわ。……あのー、レミーナさん……お店の人に聞こえます」
一応部屋の隅には、その店のボーイが静かに立っている。
ティオは、彼が気を悪くするんじゃないかと、あせり出す。
もっとも、一応高級な店の高級なボーイというプライドからか、レミーナが何を言っても、顔色一つ変えてはいないけれども。
一方レミーナの方も、ボーイのことなど知らぬ顔を決め込んでいる。
「いーのよ。ティオだって聞いたでしょ？　このお茶を入れるために、毎朝南のエーヴァラルの泉から、水を汲んできてるって。お茶も、シモン産の今年の春の一番摘み。
だけどエーヴァラルの泉の水の魔法特性は氷。冷たくておいしいから有名にもなったけど、火を通せば火の魔法特性と反発しあって、その良さが損なわれる。それにシモンの春の一番摘みのお茶は、長年寝かせることによって、初めて香り豊かに味まろやかになるの。十年寝かせてやっと一流品の仲間入り。それまでは渋味が強くてダメなのよ。

我が家で使ってるのはその三十五年もの。

さらに金のティーセットとくれば、土の魔法特性が低いから、お茶のエグ味が際立つばっかり。シモンのお茶なら、プレーンな陶器でなくっちゃね。

ま、とやかくいったって元がいいから平凡な味になる程度で、すんでるけど」

ちなみにレミーナの家にあるお茶は、今は亡きレミーナの祖母が若かりし日、当時無名で安価だったシモンの一番茶を、せっせとため込んで寝かせておいたものだ。

……オーサ家には、そういったものもたくさんある。

パシパシパシ。

少々間の抜けた手拍子……もとい拍手に振りかえると、一人の平凡な青年が、微笑みながら部屋の入り口に立っていた。

「さすがに歴史と伝統の魔法ギルドの当主となると、お茶についてまで深い造詣を、お持ちなのですね。いやぁ、感心いたしました」

と、大げさにレミーナを誉め称える。

「あなたが手紙を下さった、モーリス・ルブランさん？　あんがい若いのね。もっと年配の方かと思ったわ」

またもティオが、隣でうろたえる。

モーリスが若いといわれて気を悪くするのではないかと、心配しているのだ。

　しかしモーリスは、まったく気にする様子はなく、笑顔のまま、立て板に水と挨拶を述べる。
「私も魔法ギルドの当主は、若く美しく有能な方だと、かねがねお噂は聞いていましたが、これほど美しい方とは、思っておりませんでした。
　本来であれば、私の方からヴェーンへ伺うべきですのに、わざわざメリビアまでご足労いただき、ありがとうございます。そして、お会いできたことを光栄に思います」
　そしてキザったらしくレミーナの手を取り、口づけた。
　とたんにティオが、真っ赤になる。
……レミーナではなしに……。
　レミーナは、当然という顔だ。
「まぁ、お上手なのね」
「いえいえ、真実を口にしたまでです」
　この調子の良さに、ティオはびびった。
　確かにレミーナは、黙って微笑んでいさえすれば、かなりの美少女だし、その大半がルナの日常生活には関係ない偏ったものだという点を除けば、知識も深い。
　だけど、お店の中で、店員さんに聞こえるように、お店の揚げ足を取るような知識をひけらかすのは、ティオにとっては非常識だ。
……というより、恐くてできない。

そしてそのレミーナを、さらに店員さんの前で誉めちぎるモーリスの態度も、ティオには恐ろしいばかりである。
いやなにより、そりゃあティオだって、レミーナが黙っていなくたって美少女であることは認めるけれども、だからといって面と向かって「美しい」だなんて、たとえ相手がレミーナであろうとなかろうと、恥ずかしくて言えはしない。
それを笑顔で受け流すレミーナも、そら恐ろしい。
……神官学校時代、女子部のお姉さんたちに囲まれて、「きゃー、かわいー」だの「なかなかの美少年じゃない。今のうちにツバつけちゃおうかしら」とか言われたときの悪夢が蘇る。しかもそれはクラスメイトに知れわたり、冷やかされるやら妬まれるやらで、しばらく散々な日々をすごすことになった……。
そしてレミーナとモーリスは、一人オロオロしているティオを無視して、商談を始める。
まずモーリスが、部屋の外に用意しておいた盆を、テーブルの上に置く。
その上には皮袋が一つ。
モーリスが皮袋から、磨いたようにピカピカの百シルバー硬貨を、盆の上に流し出し、小さなシルバーの山を、作り上げた。
レミーナの瞳が、その光を受けて、キラキラと夢見るように輝き出す。
「ここに五千シルバーあります。これで私が、本気で事件の解決を依頼したいのだと、信じて

いただけることと思います」

「疑っていませんわ。さっそく事件について、話していただけませんか？　魔法ギルドの当主として、できるかぎりのことは、いたします」

　モーリスは、満足そうに微笑んだ。

「そう言っていただけると助かります。

……実は最近、テミス近郊の古い別荘を購入したのですが、そこで立てつづけに奇怪な出来事が、起こるのです。食器は棚から落ち、食料は荒され、天井や床下からは昼夜を問わずガタゴトと音が……」

「あの、それってネズミじゃ……ヒャッ！」

　レミーナにお尻をつねられて、ティオは慌てて黙り込む。

「どうぞ気になさらず、つづけてくださいな」

　モーリスは、ティオに向かって小さく肯く。

「もちろん私も、最初はネズミか何かだと思い、ネズミ取りや毒のエサを仕掛けました。ところが……」

　そしてモーリスは、こっそり秘密を明かすかのように、声を落とした。

「……翌朝、リビングの中央に、仕掛けた罠とエサが積み上げられていました。

別荘にいたのは、私と、私の叔父と、そして別荘の管理に雇った老夫婦のみ。近くには他に

家もなく、夜中に忍び込んだ者がいるとも、思えません。
あとは食器が落ち、リンゴが転がり、夜になれば風もないのに明りが消え、眠っていれば突如ベッドの足が床に沈み、いずこからともなくか細い泣き声が聞こえて、ついに管理人の老夫婦も逃げ出しました。
さらに壁に浮かんだシミをよく見ると、まるで子供が書いたような字で『でていけ　でていけ　でていけ』とぎっしり……」
「ひゃひゃひゃひゃひゃや、ふぇーん！」
レミーナとモーリスは、二人してゆっくりとティオを見た。
ティオはレミーナの腕に両手でしがみつき、その腕に頭をくっつけるようにして、ちぢこまって震えている。
あまりの恐がりように、レミーナもモーリスも、呆れ顔だ。
「ティオ。何してるのよ、オバケごときにみっともない」
「だって、だって、恐いじゃないですかぁ～」
ちなみに魔法世界たるルナでは、オバケ、幽霊、怨霊、ゾンビ、とにかくそういったものは、うじゃうじゃいるわけではないけれども実在している。
私たちの世界では、オバケはいるはずがないからこそ怖いのだけれども、実在してしまえば、腕さえあれば戦士でも倒せる怪物の一種にすぎない。

だからといって怖くないわけではないのだけれども……なんというか、オバケといえば、それを何とかするのは、やはり戦士よりも、魔法使いよりも、神官が主役なわけで……。
そりゃあ十三歳の神官に、怨霊退散や、魂の浄化や、引導や、そういった高度な神官の技を期待するのは間違っている。
とはいえ、誰より先にティオが怖がっていては、レミーナやモーリスが呆れるのも、当然だ。
「ティオ。神官が怖がって、どうするのよ。まったく情けないわねぇー。
……でもモーリスさん。なぜオバケ退治を、私に？
それに、前金後金合わせて一万シルバーというのも、その程度の事件に対して破格ではありませんか？」
「実はお祓いは、すでに試みたのです。ですが、状況は変わりません。
神官の話によると、そういった霊的なものは、介在していないらしいのです。
となれば魔法的なものと考えるのが、妥当でしょう？
調べてみれば、最初の持ち主は魔法使いらしいということで、そこで魔法ギルドならばと、まあ、そういうわけなのです」
レミーナはニコヤカに胸を張った。
「わかりました。まかせてください。このレミーナ・オーサが、必ずや事件を解決してご覧に入れます」

そして手付け金五千シルバーを受け取った。

＊

「よりによって、魔法ギルドのレミーナに依頼したどぉとぉ！」

茹でダコのように真っ赤になりつつ怒鳴るボーガンに、モーリス・ルブラン、もといボーガンの甥であるところのモーリス・ボーガンは、うろたえもしない。

「神官が役に立たなかったんだから、仕方ないだろ？

それにしてもアルテナ神団って、こすいよなー。おじさんの紹介があっても、料金まけちゃくれないし、役にたたなかったのに金は返さないしさー」

「それをとやかく言って、神団の機嫌をそこねるんじゃあぬぁいぞ！　ワタシが目的を果たすまではぬぁ！　それよりぬぁぜレミーナに五千も渡した！　よりによってワタシの金を、レミーナぬぃ渡すとは、どぉういう了見どぁ！」

「あんまりおじさんが敵視するから、一度見てみたくなったんだよ。レミーナって子をね。

まあ、ちょっと性格はキツいけど、外見は悪くない。将来は悪女として名を馳せるかもしんないけど、今は酢で洗ったピカピカのコインに目が眩んじゃう、見た目通りの子供だよ。

なんであの程度の子を、目の敵にするんだい？」

とたんにボーガンは、頭のてっぺんからポッポと湯気を出しながら、怒鳴り始める。

「あれは性格悪の子悪魔どぁ！　ひねくれ者のあばずれどぁ！

今までぬぃあわされた、忘れようとも忘れられぬ数々の仕打ち。あるときは踏み出した足の下に氷ぐぁ出現し、あるときは今まさに口にしようとしたミルクぐぁ突然沸騰し……」

モーリスは、人をひどい目にあわせるのは好きだけど、他人が他人をどうしようが、知ったことじゃないし、グチを聞く趣味もない。

ボーガンを無視して、自分の話したいことを、口にする。

「まあ、もともとオレも後金を払う気はないし、なんなら全財産巻き上げて見せようか？　プライドの高い一人前のつもりでいる没落名家の女の子は、相手としては、悪かぁないからね」

ボーガンは、レミーナがモーリスに引っ掛けられて、貪り尽くされた後、ボロ雑巾のように捨てられる様を想像し、ほくそえむ。

なにせヴェーンにいる間、幼いレミーナに子供特有の限界を知らない残酷さでもって、散々いじめられつづけ、人格そのものを否定されつづけたのだ。

この復讐は、レミーナ以上の魔法力を手に入れ、レミーナ以上の魔法使いとして、魔法使いの栄光の時代を再現し、その絶対的な力によりレミーナをボーガンの前に跪かせることによってのみ、成し遂げられる性質のものである。

ボーガンはその日を想像して、タラコ唇の端を吊り上げニヤリと笑った。

「それは、ワタシがやる。お前は手どぁしするぬぁ」

とたんにモーリスは、プッと噴出した。

「おじさんが、あの子をたらし込むって？　ぷぷぷぷぷーっ！」

そしてついに我慢しきれなくなり、ゲラゲラと笑い出す。

「うるさい！　そういう意味どぇはなぁいッ！」

モーリスは、片手をわかってるわかってるってとパタパタさせながらも、腹を抱えて笑いながら部屋を出ていった。

……ボーガン自身だって、自分の外見が美男の対極であることぐらい、イヤというほど知っている。

ところがモーリスは、そしてレミーナ、そして通りすがりの者たちまで、まるでボーガン自身が、自分の外見についてなにも気づいていないとでも、傷つかないとでも思っているらしく、ことあるごとに、それをボーガン自身に気づかせようとするのである。

あるときは公然と。

そしてあるときは物陰からのクスクス笑いによって。

……貴様らにぬぁにがわかるというのどぁ！

そしてボーガンは夢想する。

人が外見ではなく、実力で評価される世界に住む自分を。

クソッ！　モーリスのヤツを、絶対いつか蹴り出してやる！

……それにレミーナの全財産を巻き上げるということは、その母ミリアも路頭に迷うということで……。

昔、自分の生まれながらの魔法が見つけられず、それゆえ人一倍に魔法への興味を持ち、魔法ギルドの門を叩いた。

そこで、ボーガンの外見や、そのねちゃねちゃした話し方に偏見を持たぬ、優しい女性に出会ったのだ。

それが、ミリア・オーサ。

ミリアの勧めで、ボーガンはギルドに籍を置き、魔法使いを目指すことにした。

そこにはボーガンと同じく、生来の魔法を見いだせぬまま、すでに三つの魔法を習得したレミーナもいた。

ボーガンは自分にも出来ると信じ、努力し、……そして挫折した。

先天性魔法力失陥。

魔法才能は、先天的なものでほとんどが決まる。

もともと魔法力がある者は力も伸びやすく、ない者は伸びにくい。

だが、どんなにわずかでも魔法力があれば、伸ばすことは不可能ではない。

しかしボーガンには、魔法力がまったくなかった。

まったく、かけらも。
これはひどく珍しいケースだ。
そしてそれが、ボーガンが自分の魔法を見つけられない、その理由だった。
生まれながらの魔法もなければ、新たに習得することも不可能だという現実を突きつけられて落ち込むボーガンに、人々は親切そうに、転職を勧めた。
いや、ボーガンは転職するものだと、誰もが決めてかかっていた。
だが、ミリアだけは違った。
ミリアだけは、ボーガンの望むように、生きることを勧めたのだ。
望むだけ魔法ギルドで、魔法の研究をつづければいい。
長い魔法ギルドの歴史をふりかえっても、人はみなより強い魔法を求めるばかりで、魔法そのものが何かを研究し、それを後世のために伝えようとした人はいない。
もしかするとそれこそが、あなたの仕事ではないかしら？
……確かに、魔法を見いだせないがゆえに、少しでも魔法に近づこうとしたボーガンの魔法の知識は、ミリアを除けば、当時の魔法ギルドの誰よりも深かった。
ただ、魔法力のない魔法使いの魔法知識の価値を、ミリアの他に理解しようとする者は、いなかった……。
ボーガンは、ミリアのためにも、どうせ実力をつけるならば魔法でと、無理を承知で心に決

めたのだ。

そしてその無理が、アルテナ神団の力で叶(かな)うかもしれないと知ったとき、後ろ髪を引かれる想(おも)いで、ミリアの元を離れたのである。

……もちろんボーガンには、前髪も後ろ髪もなかったし、それになにより新たに魔法ギルドの当主となった、外見も魔法力も恵まれて生まれたレミーナに、これ以上小突(こづ)きまわされるのは、ゴメンだという気持ちもあった。

いつか世界一の魔法使いになり、魔法ギルドを再建し、栄光の時代を再現しよう……。そうすれば、誰よりも立派になった自分に、レミーナは地団駄(じだんだ)を踏んで悔(くや)しがるだろうし、ミリアは誰よりも喜んでくれるだろう。

そしてミリアを、あの古びてかび臭いヴェーンから救い出した白馬の王子として……。

ボーガンは、その日を夢見て、ポッと頬(ほお)を赤らめた。

*

ヴェーンからもほど近い、テミスの町から徒歩で半時(はんとき)。

小高い山の上に、その別荘(べっそう)はあった。

「あら、結構(けっこう)いいとこじゃない」

まずレミーナとティオの目を引いたのが、そこから見える景色(けしき)の美しさ。

別荘の裏手は、すぐにガケになっていて、視界を遮るものもなく、遥か遠くまで見渡せる。
広がる草原、点在する森、輝く河、その上に掛かる青き星。
台地の上にあるヴェーンからの眺めを思わせる、開放的な風景。
そしてこればかりは、ヴェーンからだけは絶対に、見ることがかなわないもの。
つまり、大地に突き刺さった逆円錐形の台地と、その上にあるヴェーンの町。
ここからだと、コインほどの大きさでしかないけれども、目をこらせば、町と外とをつなぐ、細くて長い階段も、黒い線として見ることができる。
「あの台地が、大昔は町を乗せたまま、空に浮かんでいたなんて、すごい光景だったんでしょうねー」
「ま、今にまた浮かべてみせるけどね」
と、ティオもしきりに感心する。
「えー」
「えーって何よ。信じてないわけ！」
「ち、違います。ただ空に浮かんだら、町のはしっこから落ちそうで恐いなーって、そう思っただけで……」
「ティオ、何バカなこと言ってるのよ。今だって町のはしから落ちれば、確実にアルテナ様の癒しも間に合わないってぐらいのグチャグチャに、一瞬でなれるわよ」

「こ、恐いこと言わないでくださいよー」

「大丈夫よ。今までヨチヨチ歩きの子供だって、落ちたことはないんだから。

そーゆーふーに出来てるの。せいぜい落ちるのは、酔っ払いかイキがってバカなことをしようとした人ぐらいだわ。

だいたいティオだって、よく町の端で、ヴェーンからの眺めを、楽しんでいるじゃない」

ティオは慌てて、レミーナの言葉尻を捉えて、話題を変えようとする。

「そ、そうそう。こっちからヴェーンが見えるってことは、ヴェーンからもこっちが見えるはずですよね。でもボク今まで、こんなところにこんな建物があるなんて、全然気がつきませんでした」

「そりゃそうよ。こっちから見たヴェーンだって、あんなに小さいのよ。ヴェーンから見たこの建物は、ケシ粒みたいなものだわ」

振りかえって見上げれば、まあ普通の、ヴェーンにあってもおかしくないような、つまり古びた館なのだけれども、散々脅されたせいか、それがティオにはオドロオドロしく見えてならない。

レミーナの方は、そんなことまったく気にせず、そこらへんに落ちていた小枝を一本拾い、それをクルクルと振りまわしながら、スタスタと玄関へ向かう。

「さぁ！　調査調査っと！」

「れ、レミーナさん！　置いていかないでください！」
預かってきたカギはすんなり回り、きしみながらも扉が開いて、館は二人を受け入れた。
そして中に入ると、やっぱりというか、パターンというか、ティオがそうなるんじゃないかとビクビクしていた通りに、誰も手をふれていないのに、二人の後ろでギギィーバッターンと扉が閉じる。
「ひやぁあ！　レ、レミーナさん！」
叶うならば、レミーナに走り寄って、その袖でも掴みたいのだけれども、真っ暗で何かにぶつかりそうで、恐くて身動きできず、震え上がりながら首だけを回してきょろきょろと闇を見まわす。
とたん、フッと闇の中に白い顔が浮かび上がる。
「ふひゃーっ！」
「ちょっと、私の顔見て悲鳴上げるだなんて、どういう意味」
よく見たら、レミーナだった。
手にした小枝の先に、魔法の光が灯っている。
レミーナのワンピースが黒っぽいもんだから、その光で顔だけが浮かんでいるように、見えたというわけだ。
もっとも、疑心暗鬼だったからこそ、そう見えただけで、一度そうでないとわかってしまえ

ば、見間違えようもない。

「だだだだ・だって、だって、扉も勝手に、閉まったし」

レミーナは、ニコニコしながら、こう言った。

「魔法の自動扉だもの。あたりまえでしょ」

「え？」

「モーリスさんも、言ってたじゃない。魔法使いの家だったって。昔の魔法使いは、様々なマジックアイテムに囲まれて便利な暮らしをしてたって、前に話さなかったかしら」

「聞きました」

「ヴェーンじゃ、私やお母様がいちいち魔法をかけてるけど、昔はアイテムそのものに、魔法効果を持たせてたわけね。魔法の扉に魔法の明り、魔法の洗濯桶ってぐあいに」

「はい」

「でもね、ほとんどの人は、そんなの知らないじゃない。だから今のティオみたいに、残っている魔法を、オバケと間違えたりするのよ。

しかも古くなって、完全に作動してなかったりするの。変なタイミングで変な魔法が不意に発動したり、おかしな発動のしかたをしたり……。

今回も間違いなく、そういうケースよ」

「レミーナさん、なんか楽しそうですね」

「そりゃそうよ！　だって、この事件を解決するっていうことは、この館にあるマジックアイテム、全部もらっていいってことだもの！　ヴェーンに持って帰って修理すれば、大儲けだわ！」

「……あのー。勝手に持って帰るのは……」

「いーの、いーの。ちゃんとモーリスさんにも、変な魔法は、私が処分するってことで、了解を得てるんだから」

「いーのかなー」

ティオは首をひねっているけど、レミーナは元気いっぱいだ。

「さあ！　ティオ！　まず窓の鎧戸を開けて！　明るくして空気を入れ替えるのよ！　そして寝室を見つけたら布団を干さなくっちゃ！」

「あのー。窓を開けるのはわかるんですけど、なんで布団を干すんです？」

「だって、カビ臭い家のカビ臭い布団で寝るの、イヤだもの」

「え？」

「こんな大きな館、半日で調べ尽くせるわけ、ないじゃない。夜に動き出す魔法装置もあるみたいだし、当然調べ尽くすまで、泊まりがけよ！

それからキッチンが使えるようなら、テミスの町で当面の食料品を仕入れてきましょ！　さあ！　面白くなるわよーッ！」

張りきるレミーナについて歩きながら、ティオはそわそわと、あたりを見まわした。
オバケはいないというけれど、でも何かが……誰かが自分たちを、物陰からこっそり見ているような、そんな気分を振り払うことが、できなかったからである。

その後、空気を入れ替え布団を干し始めると、そこはレミーナ女の子。
たった二〜三日の間だとしても、ここで暮らすなら、とっちらかってゴミだらけよりも、清潔な方が断然いいわっ！　と言い出して、それにはティオも異存はなく、ついもう少し、もう少しと掃除しているうちに、さながら大掃除のような状況に陥った。
ちなみにその間、レミーナによるマジックアイテムについての講義が、オマケにつく。
もっとも残念ながら、最初の魔法の扉以外、マジックアイテムらしきものは、見つけることができなかったけれども。
……それはともかく、モーリスの話にあった通り、落ちて割れた皿やら、床に転がったカップ、ネズミ取りの毒エサと罠の山など、かなり取り散らかっているが、先日まで管理人がいただけあって、最低限の手入れと、生活必需品も持ち込まれている。
生鮮食料品こそないものの、薪や調味料のたぐいは充分あって、二人が滞在するために、不便はない。
そして一段落したところで、二人はテミスの町に行って、食料品を仕入れ、戻ってくればす

でに黄昏時。

「もうお腹ペコペコ！　今日は手早くできるものにしま……」

勝手口からキッチンに入ろうとして、レミーナは絶句した。

ティオは、ブルブルと震え出す。

もちろんレミーナが、いつまでも黙っているはずもなく、一声高くこう叫ぶ。

「なによこれ！」

キッチンは、特に念入りに掃除した。

割れものは捨て、無事なものは洗ってから収まるべき所に収め、井戸から大きな台所用の水瓶にも新鮮な水を満たして蓋をしておいた。

フキンもタオルもテーブルクロスも、洗濯して干して畳んで、すぐに使えるように準備しておいた。

なのに、レミーナとティオが最初にこの部屋に足を踏み入れたときより、さらに滅茶苦茶になっているのだ。

あらゆるものが床に転がり、食器は大半が割れている。

その上床全体が水浸しで、フキンの類はそこでビショ濡れ。

水は、どうやら水瓶のものだったらしく、半分くらいに減っている。

そしてその残った水の中にプカプカと浮いているのは、砂糖と塩とラードの壺と、それから

煮炊き用の薪である。
ティオが、荷物を抱えたまま、同じく荷物を抱えたままのレミーナに、おずおずと聞いた。
「あのぉ、これはどういったタイプの、マジックアイテムの暴走なんでしょうか……」
そのとたん、キッチンの隣にある食堂から、ガタガタと何かが倒れる音がした。
ティオは、レミーナに、それもマジックアイテムの暴走だと、そう言って欲しかった。
だけど、なんか違うと言われるような予感がし、そしてそういう悪い予感というものは、たいがい当たるものなのだ。
「なわけ、ないでしょ！」
やっぱり……。
「じゃあ……」
レミーナは抱えていた荷物を調理台の上に置き、人差し指を立てて、思案顔だ。
「そうねぇ。まず考えられるのは、特定の条件を満たすと、ああいうふうに反応するマジックアイテムがあった」
ティオは、オバケじゃないという案に、明らかにホッとしたようだ。
「や、やっぱりマジックアイテムなんですね。でも、何のために？」
「ドロボウ対策に、魔法の罠を仕掛けたり、怪物をうろつかせたりするのは、昔の魔法使いにとって珍しいことじゃないわ。ヴェーンの地下に飼ってる怪物と同じよ。それが主の死後、長

い間残ってることがあるの。

　だけど、この部屋に、機能停止状態であってもマジックアイテムがあれば、いくらなんでも私が気づかないはずない」

「じゃあ、やっぱりオバケ……」

「誰かがオバケがいるように、見せかけているのかもしれないわね。ここを秘密基地にしている近所の悪ガキとか、この館を安く買い叩こうと、企んでいる人とか。

　ちょっと留守している間に侵入して散らかす。留守を待たなくても、こんなに大きな館なんですもの。隠れる場所はいっぱいあるだろうし」

「だ、だけど、山の上の一軒家ですよ！　それに今隣の部屋で……」

　そのとたん、隣の部屋から、か細い悲鳴が聞こえた。

　それにティオの悲鳴がダブる。

「いってみましょ」

　レミーナは、その悲鳴の主が姿をくらます前に、食堂に行きたかったのだけれども、腕にへばりついたティオのせいで、スタスタとは移動できない。

「まったく、しっかりしなさいよね」

　とかいいつつ食堂の扉を開けたとたん、上から何かがベチャリと、レミーナの頭の上に落っこちてきた。

ティオが驚いて、飛び上がる。
……腐った生卵だ。
レミーナの、ウェーブのかかった金の髪が、ベタベタになる。
ムスッとしたまま、レミーナはそれをぬぐって、上を見た。
誰かが隠れられるような、棚とか、梁とか、そういったものはない。
「ティオ。なるべくキレイそうなタオルを、持ってきてちょうだい！」
「は、はい！」
ティオが、台所にとって返して、濡れたタオルを絞りながら持ってくる。
それで卵をふき取りながら、レミーナは食堂を見渡した。
椅子や燭台が倒れている他は、キッチンほどひどくはない。
再び、今度は食堂に通じる廊下の方から、か細い悲鳴が聞こえた。
レミーナは、ティオが悲鳴を上げる前に、先手を取って怒鳴りつけた。
「黙ってなさい！」
「……はい……」
それから燭台を手に取り、その先端に魔法の光を灯す。
「これ持って！」
そしてもう一つ、指先に光を呼び出した。

そしてそれは、そのまま廊下へ飛ばす。
フワフワと飛んでいく魔法の光は、まるで人魂のようだ。
(キャッ！)
小さな悲鳴が上がった。
今度はレミーナが、ニヤリと笑う。
「ティオ。今の聞いた？」
「き、聞きました」
「私の魔法の光に、驚いたみたいね。安心なさい。その程度の相手よ。
マジックアイテムでも、オバケでもないってこと」
「そ、そういうものでしょうか？」
「そうに決まってるわ。誰かがやってるのよ」
しかしその後、廊下から部屋から全部見て回ったけれども、その誰かは、見つからない。
「誰も、いませんね」
「そうね、帰ったのかも。そろそろ暗くなってきたし。私もお腹も減ったわ」
とたんに、ティオのお腹もレミーナの意見に賛同し、グーと鳴る。
「だけどキッチンは……」
キッチンを使うには、調理器具も食器も洗いなおさなければならないし、そのためには水も

汲みなおさなければならない。
その上、薪も濡れている。
それに今日は二人とも、働き通しでもうクタクタだった。
「ティオ！　いらっしゃい！」
レミーナは、スタスタと歩き出した。
「か、帰るんですか。町に」
ティオはちょっと嬉しそうだ。
「まさか。もう外は真っ暗よ。知らない山の中を、暗くなってから、歩くもんじゃないわ。それに嫌がらせされて、おめおめと引き下がれるもんですか。
ほら、広間に暖炉があったじゃない。そこでパンとお肉をあぶって食べましょ。屋根のあるところでキャンプしてると思えば、上等だと思わない？」
広間の暖炉で火を焚こうとしたら、備えつけの火打石と、焚きつけの木っ端が、消火用の桶の水の中に突っ込まれていた。
薪の方は無事である。
レミーナは鼻で笑って薪を暖炉にほうり込み、呪文一つで燃え上がらせる。
そして火箸にパンや肉を刺し、火であぶる。
塩もなければ、飲み物もない。

キッチンにあるのを使うつもりだったので、持ってこなかったのだ。

それでも肉がジュウジュウと音を立て、香ばしい匂いがたち始めると、自然に頬が緩んでくる。

と、そのとき、家の中だというのに、ヒューヒューと甲高い音をなびかせながら、一陣の風が暖炉の灰を巻き上げた。

……肉もパンも、灰だらけ。

ついでに身を乗り出して、パンを取ろうとしていたティオも、灰だらけである。

ティオは、灰まみれのまま、ぽつりと言った。

「あつい……」

レミーナが、ごく弱い氷の魔法を、ティオに掛けてやる。

ティオは、寒くてたまらなくなったけれども、それを口に出せはしない。

「ティオ、唇が震えてるわ。魔法が強すぎたんなら、すぐいいなさいよ」

「で、でも、そのときにはもう、魔法が終わってるわけで……」

そのとき突然、レミーナの雰囲気が変わった。

むすりと黙って立ち上がり、あたりを睨みつける。

レミーナの怒りのオーラを感じ取って、ティオが脅える。

ただし、レミーナの金の髪は、生卵攻撃のせいで、バサバサだ。

その髪が、暖炉の赤い火に照らされて、レミーナを銅色に縁取っている。

レミーナが叫んだ。

「出てきなさい！　でないとこの館に火をつけるわよ！」

「そんな、いきなり！　いくらなんでも！」

あたりをキョロキョロ見まわしながら、ティオも叫んだ。

誰も、いない。

なにも、いない。

「いいのよ！　ここでイタズラしているヤツがいるかぎり、ここには誰も住めないわ！　そうやって犯人は、タダでこの館を自分のものにするつもりなのよ！
　そんな不正、許せるもんですか！　館が欲しいんなら、相応のシルバーを、持ち主に支払って買うべきなのよ！」

「だからといって、他人の財産を無断で燃やしちゃうなんて、ダメですよぉ！　モーリスさんに、何て言われるかぁ！」

「イタズラしてくる犯人ごと焼き殺したって言えば、許してくれるわよ！」

「そんなこと、あるわけないじゃないですかー」

「なくてもあるわよ！　燃やすったら、燃やす！　今すぐ犯人が出てこないんなら、燃やして山を下りて、宿屋に泊まってお風呂に入って髪を洗って、おいしいもの食べてまともなベッド

で寝る！」
　それからレミーナは、しばらく広間へとつづく暗い廊下や、玄関や、階段の上なんかを順番に睨みつけ、そしてティオはそのレミーナにしがみついて、だけどオロオロすることしかできず、ほんのしばらく静寂がつづいた。
　そして突然、ティオは自分がしがみついているレミーナが、ストンと緊張を解くのを感じて、顔を見上げた。
「……なーんてね」
　レミーナが、小さく肩をすくめて見せる。
……後日ティオが、「本当に本気じゃなかったんですよね？」とたずねたところ、「あったりまえでしょ。そんなもったいないこと、するわけないじゃない」と、あっさり言われた。
だけどティオは、あのときのレミーナの怒りが、嘘だったとは思えない。
……そしてティオが、ほっと一息ついて、それからレミーナにしがみついていた自分が恥ずかしくなり、あわててレミーナに背を向けたとき……。
「ふぃぇえ！」
「何？」
　ティオは尻餅をついて、暗い廊下を指差した。
「あ・あ・あ・あ・あれ……あれ……、やっぱりオバケ……」

ぼーっとした、淡い鬼火(おにび)か人魂のようなものが、漂(ただよ)っている。
それはゆっくりと、広間に近づいて来ているようだった。
ふたたびティオは、立ったままのレミーナの足に、すがりつく。
もう恥も外聞(がいぶん)もなく、恐かった。
……まあ、いつものことだけど。
だけどレミーナの声には、緊張はない。
「あら、まあ、本当にいたとはね」
「ほほほほ、ほんとうの、オバケ！　幽霊！　人魂！」
「小妖精(ピクシー)が」
「え？」
「羽のある、手のひらの上に乗るほど小さな種族。大昔に絶滅したはずなのよ」
ティオは、まじまじとそのオバケを見た。
なるほど、レミーナの言う通りのものが、廊下を飛んでいる。
「小妖精の幽霊？」
「ちがーう！　生きた小妖精！　ティオ！　だから私の足にしがみつくのはやめて、自分の目でよく見てみなさいよ！」
「す、すみません！」

慌てて離れるティオ。
レミーナが言う通り、よくよく見ると恐いものではないような、気がしないではない。
どちらかというと、小妖精の方が、自分たちを……正確にはレミーナを、恐がっているように見える。
「イタズラは、あなたがやったのね？」
レミーナの追及に、小妖精は、ビクッと身を震わせて、広間の入り口で止まる。
そして再び、廊下の闇の中へ、逃げ込もうとする。
「逃げるんじゃないのッ！」
レミーナの叱責に、小妖精はあきらかにビクッと身をふるわせて止まり、おずおずと振り返った。
その瞬間、ティオは思った。
……ボクと同じだ！
そして、そして守ってやりたくなった。
「レミーナさん！　お願いです！　あの小妖精をイジメないでください！　きっと、きっと何か事情があるんです！　だから館に火をつけたり、お金をむしりとろうなんて……。
あの、お金が必要なら、ボクの弁償金に、いくらでも上乗せしていいですから……」
レミーナは、頭痛でもするかのように頭を押さえ、眉を寄せて大きなため息をついた。

「はぁ〜〜あ。館も焼かない。イジメもしない。お金を取れるとも思っていない。ティオの弁償金に上乗せもしない。

……ティオ、そういうことは、一シルバーでも、弁償してから言いなさいよね。

だいたい、この館の怪事件を解決するだけで、五千シルバーの約束なんだから、それをフイにするつもりはないわよ。事情とやらを聞かせてもらってから、これからどうしたらいいか、みんなで考えましょ」

小さな声で、小妖精が言った。

「ソッチへイッテも、イジメない？」

ティオがそっと、手を差し出す。

「いじめないよ。さぁ、ボクのところへおいでよ。……一人なの？」

小妖精は、レミーナを警戒しながらも、おずおずとティオに近づき、そしてティオの肩に止まって、隠れるようにレミーナを窺(うかが)い見た。

*

つまり、こうだ。

大昔、まだ小妖精たちが、たくさんいた時代。

この小妖精は、魔法使いに捕まって水晶(すいしょう)の中に閉じ込められた。

どうやら、仲間の誰かがやらかしたイタズラの、その犯人だと思われたらしい。
そしてそのまま忘れられた。
どれほどのときが過ぎたのかは、閉じ込められていた小妖精には、わからない。
たぶん魔法の期限切れで、小妖精が水晶から解放されたとき、世界は様変わりしていた。
仲間たちの姿は消え、どうしたらいいのかもわからず、無人のこの館の中に隠れ住むしかなかった。
……もともと、旅に耐えられるような種族ではないのだ。
まれに人間がやってきたが、オバケと間違えられて、退治されそうになった。
ここを追い出されたら行くあてもない小妖精は、じゃあっていうんで、オバケのふりをして、人間を追い出そうとしたとまあ、そういうわけだ。
レミーナは、呆れた。
「そんなことしたら、ますます退治されちゃいかねないのに」
「ソウナンデスか？　イイカンガエだと、オモッタんですケド」
「そうよー。で、さ、小妖精さん！」
乗り出すレミーナに、つい押される小妖精。
「ナ・ナニ？」
「あなたが閉じ込められていたような水晶とか、マジックアイテムとか、それから魔法書とか、



そんなようなものが、まだ他にもここにあるの？」
「ヨクワカラナイけど、チカシツに、イッパイ」
「案内して！」
「ハイ」
小妖精に案内されて、地下室に向かいながら、ティオは一応、レミーナを止めようと試みる。
「レ、レミーナさん。まさか着服するつもりじゃないですよねー。怪異の原因になっていないものを持ち出すのは、約束と違うんじゃないかと……」
「魔法ギルドの当主である私が、そんなコソドロみたいなこと、するわけないでしょ」
「…………」
そして地下室の扉は、開かれた。
レミーナの魔法の光に照らし出されたのは、さまざまな奇妙な品々。
ティオの目には、オーサ家のガラクタ部屋と変わらないけど、レミーナはそれを見て、ご機嫌だ。
「小妖精さん。ここに来た人間は、地下室のことを知ってるみたい？」
「シラナイ。と、オモウ」
「ならいいわ。ティオ、ここで見たことを、間違っても誰かに話しちゃだめよ」
「レミーナさーん」

「盗みはしないわよ。私が買い取るの。小妖精さんは、このまま住んでればいいわ」
「え？」
「エ？」
「古いオバケ付きの館、そんなに高くはないはずよ」
「えーっと、つまり、レミーナさんは小妖精のために、館を一つ買おうっていうんですか？
……でも、あれ？　ここで見たことは誰にも言うなってことは……。
つまり地下室のマジックアイテムを内緒にしたまま、丸ごと買おうっていうんですか！」
レミーナは、ニーっこり笑って、ティオを睨みつける。
「ティオ。じゃあ他に手があるっていうの？
私たちがこの館の怪事件を解決するってことは、つまりこの小妖精さんを放り出すってことなのよ。
でも、解決できませんでした、じゃあ魔法ギルドと私の名誉が損なわれるし、モーリスさんだって困るし、いずれ真相がばれたら小妖精さんが追い出されるか、悪けりゃ見世物小屋に売られちゃうわよ。
私が研究のために館を買うんなら、モーリスさんだってさほど損はしないし、小妖精さんだって安心して暮らせるし、みんな丸く収まって、いいことずくめじゃない。
だからといって、マジックアイテム込みでこの館を買うお金なんて、私にはないの。ううん、

ただの館を買うお金だって、ありはしないのよ。
十四歳の女の子が、そこを無理して家一軒買おうっていうんだから……ティオ、黙ってらっしゃいね！」
「アリガトウゴザイマス、レミーナさん！　ホントウは、ヤサシイひとダッタんですね。ティオさん、オネガイです……」
レミーナに睨みつけられ、小妖精に懇願(こんがん)され、もちろんティオには、ハイと答える以外に、道はなかった。

＊

「あの館を、買い取りたいですって？」
再びメリビア。高級割烹(かっぽう)旅館、海千山千(うみせんやません)亭の個室。
レミーナとティオは、モーリスと向かい合っていた。
レミーナは、にっこり笑う。
「ええ、もちろん私に、あの館で起きる怪異を、解決できないことは、ありませんわ。ですけど、思ったよりも大昔の魔法が複雑に絡(から)み合っていて、時間がかかりそうですの。すべての魔法の鎖(くさり)をはずすのに、一年かかるか二年かかるか……。
それに、普通の方にはまったく価値はないでしょうけど、なかなか魔法使いにとっては興味

深い事例ですし……。
　あの館、研究用に売ってくださらないでしょうか？　十五万シルバーまでは、支払う用意がございますけど」
　その隣で、ティオがこれ以上ないっていうくらい、オドオドしている。
　モーリスは最初驚き、そして次にニッコリ笑った。
「いつ使えるようになるかわからない館を所有していても、私たちにとっても何の得にもなりませんし、お売りすることによって魔法ギルドで役立つなら、それにこしたことは、ありません。あなたの言い値で、売りましょう。
　ですが依頼の後金は、お支払いできませんよ」
「もちろんです。魔法ギルドとしても、受け取るわけには、いきません。それどころか前金だって……」
　モーリスは、ニコヤカにレミーナを遮った。
「いいえ、それはもとより調査費のつもりです。まったく調査結果も出ずということなら、返していただきますが、原因がわかっただけでも、すっきりしました」
「いえ、そんなわけには……」
「いや、そうおっしゃらずに……」
　そして一人オドオドしているティオの目の前で、とてもいい人であるところのレミーナと、

これまたとてもいい人であるところのモーリスは、握手を交わし契約は成立したのである。

*

ボーガンは、いつものようにゆでダコになりながら、モーリスを怒鳴りつける。
「ぬぁんだと！　あぬぉ館を、レミーナに売ったどぁと！」
だけどモーリスは、いつものように涼しげな顔だ。
「なかなかの取引だったよ。なにせ買い値の三倍で売れたからね」
「そーいう問題どぇはぬぁい！　あれは、あぬぉ館は！　ワタシぬぉ」
「ギルドの前当主への想いを捨てきれずに、ヴェーンが見えるってだけで、買った別荘」
そう言ってから、モーリスはチラッと横目でボーガンを見る。
「モモモモモ・ムォーーーリスッ！」
「ゲームの前に獲物について調べるのは、当然のことさ。レミーナについて調べているうちに、すぐわかった。
それに、おじさんも、ちゃんと調べもせずにあの館を買ったろ。レミーナが買うって言い出したときは、驚いたよ。だって、レミーナにあれを売りつけてやろうっていう計画だったんだから」
「ナナナナナナッ！」

「おじさん。そんなに怒ると、健康に悪いぜ。まあ、聞きなって」

「なにこれ！　どういうこと！」

その後、レミーナがティオと共に、テミス近くのあの館に戻り、ゆっくりと手に入れた財産の品定め(しなさだ)を、しようとしたときのことである。

コップが床を転がった。

水瓶(みずがめ)から水が漏(も)れた。

室内をヒューヒューと、風が吹き渡った。

……小妖精は、何もしていない。

ティオは床の上に、コインを一枚、そっと立ててみた。

それはコロコロと、転がった。

「館が、傾(かたむ)いているみたいですね」

「ソウ。カタムイテイルよ」

それからティオは、壁に耳を当ててみる。

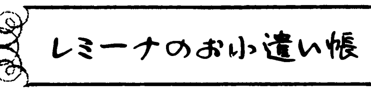
「ヒューヒュー言うのって、隙間風(すきまかぜ)なんだ」

「ソウソウ。アマモリも、スルよ」

「ちょっとまってよ。じゃあ壁のシミは？　デテイケって書いたのは、あなたなんでしょ？」

「ソウ。ダケドシミは、アマモリのセイ」
「罠が動いたのは？　ベッドが沈んだのは？　明りが消えたのは？」
「ワナは、ボクだよ。デモ、ベッドがシズンダのは、ユカが、クサッテルせい。アカリがキエタノは、カゼのセイダヨ」
　レミーナの頭の中を、ヴェーンの古くて大きな館の、維持費にかかった金額が、グルグルと回り始めた。
「そんなー。それじゃ十五万シルバーだなんて価値、ぜんぜんないじゃない！」
「ソレカラ……」
「なあに、まだ何かあるのぉ」
　情(なさ)けない顔をしているレミーナに、小妖精が近づいた。
「カタムイタノ、ピクシーのセイデハナイ」
　レミーナは、ちょっと微笑(ほほえ)む。
「わかってるわ」
　ピクシーは、つづけた。
「ウラのガケ、どんどんヤカタに、チカヅイテる、そのセイだと、オモウ」
「え？」
「ツカマル、マエ、ガケ、ズットムコウに、あった」

「えーッ！」
レミーナは、慌てて館の裏の崖っぷちに駆け寄った。
崖の下には、蛇行する川があり、川に向けて、なるほど最近崩れた跡がある。
川が、どんどん崖を削り取っているのだ。
遮る木もなく、眺めが極端に良かったのは、そのせいだろう。
だけどヴェーンじゃあ普通だから、つい見落としていた。
地盤もゆるんで、館は傾き、雨漏りで屋根や床が腐り、壁はシミだらけになり……。
レミーナの脳裏に、ついに土台を失って、館が崖下へと崩れ落ちて行く光景が浮かんだ。
それは、まあ、今日明日のことではないだろうけれども、そう遠い話でもないだろう。
たとえオバケがいなくても、この家に十五万どころか、一万シルバーの価値もない。
「どうやって、十五万シルバーの赤字を、埋めればいいっていうのーッ！」
天の青き星に吼えるレミーナを、小妖精は不思議そうに眺めていた。



今回の収入

テミスの館調査費	S5,000
テミスの館の遺物、売上	S148,000

今回の支出

テミスの館	S150,000

今回の収支　プラス3,000S

（※1S（シルバー）は100円前後）

せっかく手に入れた貴重な資料の大半を、
すぐさま売らなければならなかったのよ！
収支がプラスでも、うれしくなーいッ！

第四話　レミーナの休日



モーリス
ボーガンの甥。一見、何事もそつなく
こなす好青年風だが…。
ボーガン
魔法力はまったく無いが、金儲けに
関しては天才的。ミリアに片思い中。

モーリスは目的もなく、メリビアの街でブラブラ遊んで暮らしていた。
叔父のボーガンの仕事を手伝うのに飽き始めたころ、タイミングよく叔父はアルテナ神団とやらに呼び戻されていったが、その前にちゃっかり遊ぶ金は、ちょろまかしておいたのである。
なんでも叔父は、女神アルテナ様から魔法力を貰い、その力でもって遠方の宝石鉱山を乗っ取り、空飛ぶ城を築くんだそうだ。
……何から何までバカバカしい。
女神だの、魔法力をもらうだの、空飛ぶ城だの。
そんなバカらしい話に引っ掛かるのも、叔父が魔法にこだわりすぎているからだ。
そりゃあこの世界じゃ誰だって、魔法を一つ持って生まれてくる。
だが、役立つ魔法だなんて、めったにない。
魔法なんぞ使わないで済ませているヤツは、ごまんといる。
俺は「しゃっくり」だし、どんな食べ物でも不味くできるなんてヤツもいた。
叔父の場合、悩むべきは魔法力より外見。
それだって、あれだけ金儲けが巧けりゃ、気にすることたぁない。
外見よりも金を選ぶ女は、いくらだっているんだから。

没落名家のコブつきの女を落とすぐらい、その金を使えばすむことだ。

ところがその金を、胡乱な神団につぎ込んで、魔法力だ空飛ぶ城だってんだから、生き方間違っているとしか、言い様がない。

それをからかうと、叔父はゆでダコのようになって、こう言った。

「むぉちろん私ぐぁ大成した暁には、ミリア様に最高の贅沢をしていたどぁく。ぐぁ、ミリア様は金で左右されるような方どぇは、ぬぁいぬぉだぁ！　あの小憎たらしい守銭奴レミーナとは、人間の出来ぐぁ違うのどぁ！」

どんなにお高くとまっていても、人間食うに困れば何だってする。

娘がそうなら、その母親だって大して違わないはずだ。

それはそれとして……、アルテナ神団のやり方は、なかなか非常に面白い。

騙し方は、まったくもっての正統派。

うまい嘘には二種類ある。

九十九の真実の中に折り込まれた一つの嘘と、一から百までの完璧な嘘と。

神団は、その後者だ。

……転生した今生のアルテナ様は、かつての裏切り者を蘇らせ、裏切り者はそれに感激し、女神に忠誠を誓い、叔父の寄進に対し魔法力を与え、空飛ぶ城を作らせる。

一つ一つは嘘っぽくても、ここまでくれば立派なもんだ。

人間だれしも、まさかここまで嘘くさい話で騙そうとするヤツなんかいないと思ってるから、つい騙される。

青き星を売った、詐欺師（さぎし）の伝説に匹敵（ひってき）する。

そういう意味で、アルテナ神団を作ったヤツは、希代（きたい）の詐欺師に違いない。

が、俺は他人の手のひらで踊りたかぁないし、第一なにより面倒（めんどう）くさい。

舌先三寸（さんずん）で、楽しませてもらったら、さっさと河岸（かし）を換えるのが、俺の性（しょう）にあっている。

……モーリスは、ひどく飽きっぽい性格をしていた。

一見まめで、そつなく、働き者なのだが、その才能は自分が面白いと思うことにしか発揮されなかったし、そしてその興味が一つの季節を越えて保たれることは、めったにない。

しかも、人を騙してあざ笑うことが、彼の最高の娯楽（ごらく）だった。

そして、ブラブラするのにも飽き、手頃（てごろ）な相手の出現を待っているモーリスの前に、一匹のネギを背負ったカモが……。

「ティオ！　置いて行くわよ！」

「レミーナさーん、まってくださぁい！」

モーリスは満足げに微笑（ほほえ）むと、二人の後をつけ始めた。

*

「レミーナさーん！　まってくださいってばぁ！」

メリビアのメインストリートの人ごみの中で、ティオが悲鳴を上げている。

先を歩いていたレミーナが、振りかえって立ち止まった。

「あー、もう、しょうがないわねぇ！」

ここんとこ二人は、せっせとヴェーンとメリビアを、往復していた。

ついにヒット商品が、出たからである。

といっても、普通のアイテムでも、ちゃんとしたマジックアイテムでもない。

魔法を掛けた普通のアイテム。

ヴェーンでは既に使われていたが、定期的に魔法を掛けつづけなければならないため、メリビアで売るのは無理だと思っていた。

ところがミリアのアイデアで、魔法を掛けた直後に封印を施して、封印を解けば効果が発揮されるように工夫したところ、大成功。

封印用紙を破るだけで、小さな火や、光や、氷が、いつでも飛び出してくる。

……私たちの常識からすると、大したものではないように、見えるかもしれない。

だけど、ライターも懐中電灯も冷蔵庫もないルナでは、画期的な商品だ。

新しい物好きのメリビアッ子たちが、作ったはしから買っていってくれる。

もちろん、本物のマジックアイテムほど高くはない。

それに、こんな内職みたいなことをつづけても、魔法ギルドを復興させることは、できないだろう。

だけど、その元手を稼ぐことは、できそうな勢いだった。

すでに今期のラムス商会への借金返済は終わったし、作るのに必要な材料は、そのへんにあるもので充分だし、それに使った魔法力はアルテナ様の像に祈れば、いくらでも回復する。

最初はヴェーンで作っていたが、今ではヴェーンでしか作れない封印用紙をラムス商会に持ち込んで、せっせと商品作りにいそしんでいる。

で、今、レミーナとティオは、メリビアの人ごみの中を、ラムス商会へ向かっているところなのだけれども……。

重い荷物を担いでいるわけでもないのに、ティオが人を避けようとして、あっちへふらふら、こっちへふらふら。

「ティオ。メリビアについたら、早足のサンダルはやめなさいって、言ったでしょ！」

どうやらレミーナ特製マジックアイテム、早足のサンダルの効果で、思った以上に足が動いてしまうらしい。

わずかに、そしてこまめに身体を左右に運び、障害物を避けなければならない場所には、あまり向いた道具ではない。

「だってー。替えの靴なんて持ち歩いてませんよぉー」

「だったら最初から、早足のサンダルを使わなきゃ、いいでしょー！」
「そしたらレミーナさんに、置いていかれるじゃないですかぁー」
「後からくれれば、いいじゃない！」
「そんなー」
ティオが、（いつものように）雨に濡れた子犬のように、レミーナを見上げた。
「……どうしてレミーナさんは、ちゃんと歩けるんですかぁ？」
レミーナは、したり顔で頷いた。
「使用者の基礎魔法力が大きいほど、こうしたマジックアイテムは、コントロールしやすくなるの。きっと、そのせいね」
……とすると、『早足のサンダルは二倍の速さで歩けるが、四倍疲れる』という評判も、普通の人にとっては、あながち嘘ではないのかもしれない。
「えー！　それじゃあ、ボクが魔法使いのレミーナさん並に、早足のサンダルで歩くのは、最初から無理ってことじゃないですかー」
「それに……」
と、レミーナはティオの鼻のてっぺんに、その白い指をつきつけた。
「……ティオは人を避けようとしすぎてるわ」
「え？　どういうことですか？」

「あのね、他の人だってティオとぶつからないように、避けてくれてるのよ。ティオが真っ直ぐ歩いたって、そうそうぶつかりはしないわよ」
「でも、それは……」
「ティオは他人を、信用してないわけ？」
「それってちょっと、違うよーな……」
「いいから試しに、まっすぐ歩いてごらんなさい！」
そしていきなりレミーナは、ティオを後ろから突き飛ばす。
「うわぁ〜〜〜！」
ティオは見事にすととととと……と、普通の倍のスピードで往来を横切り始め……、確かに往来の人々は、叫ぶティオを素早く避けてゆく。
「そんな、レミーナさーん！」
と、振りかえってレミーナにささやかな抗議をしようとしたのが、悪かった。
水瓶屋の店先に出されていた看板がわりの巨大な水瓶に、ティオを避けろと言うほうが、無理というものだろう。
水瓶に追突し、鼻っ柱をおもいきり打って目を回しているティオに、レミーナは厳かに宣言した。
「ティオ……、私が間違ってたわ」

「あぅ～あぅ～あぅ～」
「魔法力とかいう問題じゃない。ティオがおもいっきりどんくさいのよ」
ティオの意識は、そこで途切れた。

*

ティオが目覚めたとき、そこは見なれたラムス商会。
「あれ？　ボク？」
「やあ、気づいたかい？　水瓶に追突したんだって？」
見なれたラムス商会の若旦那、いつもニコニコがトレードマークのラムスが、ティオの目覚めに気づいて、声を掛ける。
「あの……、ボク……、はい覚えています。……レミーナさんってばヒドイや。ボクを思いっきり突き飛ばして、どんくさいだなんて……」
まだジンジンする鼻をなでるティオは、半分泣き顔だ。
「そうだったのかい？　でも、あのレミーナちゃんが、その場に荷物を放り出して、キミを広場のアルテナ様の像の前までおぶって運んで、怪我を癒してくださるよう祈ったんだよ。
それからキミをここへ運び込み、その後で荷物を取りに戻ったんだ。結構心配していたよ」
ということは、怪我はすでに癒されているということだ。

なのにまだ、こんなにもジンジンしてるということは、そうとうひどくぶつけたのだろう。
「心配って、荷物の心配ですか？　で、荷物は無事だったんですか？」
と、ティオは（荷物がなくなったら、またボクが弁償ってことになるのかなー）とか思いつつ、そう聞いた。
活気がある街には、必ずドロボウや詐欺師といった胡乱な連中も、集まってくる。
メリビアの喧騒に見とれて荷物から目を離したお上りさんが、被害に遭うことも、少なくはない。
もっとも、前にダメにした高額の、本物のマジックアイテムの弁償は、まるっきりすすんでいないし、レミーナも口にこそしないけれども、あきらめている節がある。
だいたいその前の分だけでも、今のレミーナのオマケみたいな生活をしているかぎり、いや独立して普通にコツコツ働いたとしても、そうそう返せるような額ではないのだ。
一方ラムスは、ティオの言葉に意外だという顔をする。
「ティオくん。荷物は無事だったよ。水瓶屋の旦那が気を効かせて、預かっておいてくれたからね。だけどレミーナちゃんは、荷物じゃなくてキミを心配していたんだよ」
荷物が無事と聞いて、ティオはホッとする。
そして一拍おいて、こう言った。
「……でも……。だって」

ラムスは肩をすくめる。

「確かティオ君が、はじめてレミーナちゃんと出会ったときも、余所見しててぶつかったんじゃなかったっけ？　ちゃんと前見て歩かなきゃね」

「ま、まあそうですけど……」

「それにレミーナちゃんは、いつも背伸びしてて、人に弱みを見せまいとするから、態度や言葉がキツくなるんだと思うなぁ。商人が信用を失わないために、辛いときでも笑顔でなけりゃならないのと、同じだよ。

……レミーナちゃんは、魔法使いの価値は魔法力で決まるって言ってるけど、僕は商人の価値は誠実さと信用で決まると思ってるんだ。

それに不安なときほど、明るく前向きに行動してたら、どうにかなるもんだろ？」

「明るく振る舞うだけで、どうにかなるなんて……」

「どうにかなると信じて、どうにかするのさ。どうにもならないと思って、何もしなければ、絶対にどうにもならないじゃないか」

ティオは、少し考えた。

「……っていうことは、レミーナさんが不安を抱えてるってことですか？　そりゃ、ものすごい借金を抱えてるけど、順調に返してるんでしょ？　いつも元気だし、とてもそんなふうには見えません」

「そうかなー。僕にはレミーナちゃんが、精一杯背伸びしているように、見えるけどなー。なにせキミの何倍もの負債と、家族の生活と、ヴェーンの町とそこに住む全ての人々の生活が、レミーナちゃんの肩の上に乗っかっているんだよ。現実には、魔法ギルドの復興なんて、その先の話でしかないんだ。

……商人としての僕は、レミーナちゃんからのラムス商会への、季節ごとの借金返済が滞った場合、ヴェーンそのものを差し押さえるしかないしね」

ティオは、ニコニコしているラムスが、そんな厳しいことを言うとは、思ってもみなかったので、驚いた。

「そんな無茶な！　どうして待ってあげないんですか！　ヴェーンでは、いつも無理に家賃や地代を、取りたてたりしませんよ！」

「待ちはするさ。実際分割払いにして、待ってるんだ。それに僕だってヴェーンを差し押さえるより、レミーナちゃんが稼いで、それで返済してもらったほうが、ずっといい。

だけど無期限無条件に待つわけにはいかない。そんなことしたら、ラムス商会が倒産する。

商人っていうのは、いつも誰かにお金を貸してるけど、いつも誰からかお金を借りているもんだから、ラムス商会が借金を返済できなくなれば、ラムス商会に金を貸していた何人かが倒産し、そこに金を貸していた何人かが倒産し……。

連鎖倒産がおきかねない。最初の何倍もの人々が生活手段を失う、そのきっかけになるわけ

には、いかないよ」
そう言われてしまうと、反論のしようがない。
ティオは黙っていたけれども、ふと、こんなにも自分とラムスが長話をしているのに、レミーナが姿を見せないことに、気がついた。
「あの……、レミーナさんは？」
「レミーナちゃんなら、出掛けたよ」
「えーッ！」
これまで、お出かけ中はいっつもレミーナと、一緒。
レミーナに引きずりまわされている、レミーナのオプション状態。
それが突然おいていかれて、気分は捨てられた子犬といったところ。
「で、レミーナさんは、レミーナさんはどこへ行ったんですか！」
「キミが倒れたとき、前に仕事で知り合ったモーリスさんが偶然通りかかって、キミを運ぶのを手伝ってくれたんだそうだ。そのお礼に、お茶の招待を受けてくるってさ」
そう言うラムスは、トレードマークのニコニコ顔のその眉間に、皺寄せていた。
「行かなくちゃ！　レミーナさんに、叱られる！」
「ティオ君。一応デートなんだから、邪魔しちゃだめだよ」
でーと、と聞いてティオは頬を染めた。

今時ない、純情な少年だ。

そのティオに、ずいとラムスが顔を寄せる。

「……だけどモーリスって、どんな人か知ってるかい？　いや、信用できない人なら、レミーナちゃん一人じゃなく、ティオ君が……」

そしてじっとティオを見つめてから、「……僕がつき添う……というわけには、いかないよなあ。やっぱり」と、つぶやく。

ティオは（そんなにボクは、頼りにならないかなぁ）と考えてから、万一レミーナに危険が迫ったとき、自分に何ができるかを想像して（なるほどボクじゃ頼りにならないや）と、考えなおした。

それにレミーナは、オーサ家の財産を狙う胡乱な連中を、一人で撃退しつづけている、十四歳で美少女ながら、その手の猛者だ。

しかも今回の魔法を掛けまくる仕事のせいで、レミーナの魔法力は日増しに増大しつつあった。

レミーナいわく……、

「何事も基本の繰り返しが、大切なのよね。魔法の練習ができて、しかもお金まで貰えるんだから、こんなに楽しい仕事はないわ！」

……だそうだ。

「ティオ君」

ラムスにせっつかれて、ティオはあわててそれに答えた。

「えっと、その、テミスの別荘の事件で知り合った、モーリス・ルブランさんのことだと、思いますけど」

「ああ、あのレミーナちゃんが買って大損したって言ってた別荘の、前の持ち主だね？　……それならまぁ……、にしてもレミーナちゃん、助けられたとはいえ、よくそんな人の誘いを受けたねぇ」

「えっと、あの、レミーナさんが頼んで売ってもらったんだし、値段を言い出したのもレミーナさんで、騙されたわけじゃないし……」

「そうならいいんだけど……」

どうやらラムスは、レミーナがお茶をしに行ったのが、気に入らないらしい。

いいんだけどと言いつつも、なにやら割りきれない様子で、ぶつぶつつぶやきながら、うつむいて考え込んでいる。

ティオは突然、ラムスはレミーナが好きなのかな？　と閃いて、それをすぐに否定した。

根拠はないけど、そんなことが、あるはずがない。

「あのー、ラムスさん。なにをそんなに、気にしてるんですか？」

「いや、ね。レミーナちゃんが目の敵にしてる、チロの価格を吊り上げて儲けたボーガンの、

代理人としてチロを売買したのが、ボーガンの甥っ子モーリス・ボーガン。この界隈では知られた人物さ。
それでモーリスと聞いて、ちょっと気になったんだよ」
ラムスのセリフの歯切れは、いつものように調子よくはなかったけれども、ティオはそれで、納得した。
ラムスの若旦那。
メリビア一の老舗ラムス商会を切り盛りする、年齢不詳の老けた童顔の青年は、実のところ今十七歳の、青春まっさかり。
作者と読者だけが、そのラムスの懸念が的中していることを、知っていた。

*

その日、レミーナがラムス商会に戻ってきたとき、すでに夕闇が迫りつつあった。
早めの夕食までご馳走になったそうだけれども、レミーナの様子からすると、とくに問題はなかったようだ。
いや、レミーナは、傍目にもわかるほど浮かれている。
「海千山千亭でね、フルコースをご馳走になったのよ！　ティオ、海千山千亭のフルコース、いくらするか知ってるでしょ！」

高級割烹旅館、海千山千亭。

何から何まで高そうな、……いや実際に高い成金趣味のこの店に、以前レミーナがモーリスとの商談のために訪れたとき、レミーナは店員がいる前で、お茶の入れ方から内装まで、さんざんっぱらこき下ろした。

ところがそれがきっかけで、レミーナは海千山千亭にコンサルタントとして、何度か呼ばれ、さらにオーサ家に蓄えられていた高級茶葉を海千山千亭に売る商談がまとまったのだから、世の中なにが吉と出るか、わからない。

今でも海千山千亭に行けば、ウエイターはお茶を入れるたびに、『歴史と伝統あるヴェーンの魔法ギルドの当主レミーナ・オーサ直伝の云々』と、蘊蓄をたれている。

特に後日レミーナが英雄の一人として数えられるようになってからは、海千山千亭の主人は先見の明があったと評された。

とまあそんなこんなでレミーナとティオは、何度か海千山千亭を訪れて、フルコースの試食もしてアドバイスもしたけれども、客として入ったことは、ついぞない。

「それにね、モーリスさんはヴェーンの歴史と魔法ギルドの伝統に、とっても興味をもってるの。最初はお茶だけのつもりだったんだけど、私、話しても、話しても、全部話すことができなくって、それで夕食もっていうことになって、だけどまだ話し終わらなくって……。明日また会う約束、してきちゃった！　うふっ！」

レミーナは、瞳をキラキラさせながら、話しつづけた。

ティオは、そのレミーナの瞳の輝きが、いつものシルバーの輝き、ではないことに気がついて、ドキリとする。

タダでご馳走してもらって、喜んでいるレミーナ。

それはいつもと変わらぬ光景であるはずなのに、目の前にいるレミーナが、突然別人になってしまったような、そんな感じだ。

なぜだかティオは落ちつかなくなり、オロオロし始める。

一方ラムスも、いつものニコニコ顔をひっこめて、真顔でこう言った。

「でもレミーナちゃん。明日はラムス商会で、商品を作る約束だよ。今日やるはずだった分も丸残りしているし」

レミーナは、ニッコリ笑って宣言した。

「明日は、お休みにするわ！　そのかわり、メリビアでの滞在を一日伸ばして、仕事はこなします。いいでしょ？　ラムスさん」

ラムスはその勢いに、少し押されたようだ。

「そりゃあ、まあ、でも商品を待っているお客さんがいるんだし」

「作るのが一日遅れても、影響はないはずよ。それに私、ここんとこずーっと自分だけのための時間を持てなかったんですもの。気分転換が必要だわ！　たまには気分転換をしたほうが仕

事もはかどるし、いいお金儲けのアイデアだって、浮かぶはずよ」

ラムスも、おや？　と違和感を感じた。

「……レミーナちゃん。それはキミのアイデアかい？」

「いいえ。モーリスさんがそう言ったの。根を詰めすぎるより、たまには遊んだほうがいいって。私もその通りだと思ったわ」

どうやらそれが、ラムスが感じた違和感の原因だったらしい。

レミーナは、口癖のように仕事が欲しいと言っていたけれども、休みが欲しいと言ったことは、これまで無かった。

だけど、レミーナがずっと休んでいないのも本当だ。

……子守り。

……おつかい。

……怪事件の解決。

……お茶の入れ方の指導。

……魔法ギルドへの投資のおさそい。

メリビアに来るたびに、マジックアイテムの販売が、うまく行きつつある現在でさえ、ヒマさえあれば、お金儲けのチャンスはないかと、町中を休むことなく、ティオを引きずり手伝わせながら、かけずりまわっている。

もっとも、未だ勇者ならず、そして後日そうなるとは誰も思っていない現在、レミーナに依頼される仕事は、海千山千亭の件を除けば、子守りかおつかいといった、せいぜい五シルバーにもならないものばかりだ。

だけどレミーナは、そのたぐいの仕事を、嬉々として引き受けていた。

それをしなくなったのはつい最近、店で商品を作るようになってからだが、それも寝る間を惜しんで、という勢いだったのだ。

「まあ、確かに働きつづけだったから、たまに休みを取るのも、悪くはないね」

「ありがとう！　ラムスさん！」

そして翌日レミーナは一人で出掛けた。

そして夕暮れ時になってやっと戻り、渋い顔のラムスと、泣きそうな顔のティオに、悪びれもせずこう言った。

「話しが終わらなかったの。もう一日休んでもいいかしら」

ラムスは静かに、首を横に振った。

「レミーナちゃん。キミが仕事と返済の約束を守ってくれるかぎり、ボクはキミがどんなに休もうとも、文句を言える立場じゃない。だけどこれ以上は、僕と約束した仕事を終わらせてから、自分で宿をとって休んでくれないか？」

まあ、当然のことなんだけれども、今まで仕事でなくても泊まらせてくれていたラムスにし

ては、キツイ態度といっていいだろう。
だけどティオは、ホッとした。
レミーナが、ただ休むためだけに、自分のお金を使って宿を取ってメリビアに滞在するとは、思えなかったからだ。
だけどレミーナは、こう言った。
「ちょっともったいないけど、そうするわ」
「レ、レミーナさーん！」
レミーナの耳には、ティオの嘆きの声など、入っていないようである。
「それじゃ私、も一度ちょっと出かけてくるわね。モーリスさんに、明日じゃなくって明々後日なら会えるって、伝えなくっちゃいけないから！」
そしてレミーナは出かけ、戻ってきたのはずいぶん遅くなってからだった。

＊

モーリスは、海千山千亭の一番安い部屋のベッドに寝転びながら、捉えたカモを、どう料理しようかと、ほくそえんだ。
……ボーガンと一緒だったときは、一番高い部屋だったけれども、ただ寝るだけのために、贅沢で広い部屋など、うっとうしい。だが、高級割烹旅館の長期滞在者という身分によって、

人の信頼を買うことができる。
勝気な没落名家のお嬢様。
しかも最近、ふいに金回りがよくなった。
彼女の商品を独占販売しているのはラムス商会だが、彼女の心を独占すれば、あとはどうにだってできる。
あのお嬢様は、自分を認められたがり、支えられたがっている。
ヴェーンという『故郷』。
ヴェーンと魔法ギルドの『歴史』と『伝統』。
その当主という『家柄』。
そして魔法の『才能』。
魔法使いの『地位』と『名誉』。
そのプライドにこだわり、再興という夢を持つことによって、背伸びをしながら当主の重責に耐えている、十四歳の少女。
彼女の『認められたい』という想いは、あんなにもはっきりしているのに、その想いに応える者が、誰もいない。
需要があれば、供給してやるだけの話。
しかも俺の独占販売ときた。

難しいことじゃない。……彼女の話を聞き、頷いてやるだけだ。
モーリスは、ニヤリと唇の端を吊り上げる。
あのラムスは、商売も下手だが、女心もわかっちゃいない。
好意は、示さなければ伝わらない。
しかし、愛がなくとも示し方さえ知っていれば、なんだって手に入るのだ。

*

ラムス商会の倉庫の一角を改造した、レミーナのための作業場。
レミーナはマジックアイテムの作製に、いそしんでいる。
魔法を掛けて、封印用紙を張る。
簡単に見えるが、才能と教育に恵まれた魔法使いでなければ、ほどよく魔法を掛けるのも、しっかりした封印も、できはしない。
今作っているのは、火のマジックアイテム。
小さな乾いた木片に、小さな火の魔法を掛ける。
このとき力を大きくしすぎると、とたんに木片が燃え上がってしまうし、力が小さすぎると、封印を破っても火が燃え出さない。

それ以上に大変だったのが、魔法を掛けてから発動するまでに、僅かの間を持たせるという工夫だった。
その間に封印用紙を張り、そして火傷せずに封印を破ることができる。
それに封印用紙こそが、それ自体が独立した本物のマジックアイテムだし、破りやすく、しかし誤って破れないための、工夫が必要だった。
今のところ作った木片を五枚ずつ、ぴったり収まる木箱に入れて擦れ合わないようにしているが、これについてはまだ工夫の余地がありそうだ。
魔法を掛けて、封印用紙を張る。
魔法を掛けて、封印用紙を張る。
その隣では、ティオがせっせと木片を木箱に詰めている。
「アチッ！……あの、また魔法が漏れてますけど……」
ティオがあわてて、熱くなり始めた木片を、用意してある桶の中に、ほうり込む。
木片は、桶の水に落ちた瞬間、ジュッ！　という音を立てた。
桶の中には、同じように失敗した、コゲた木片がすでにいくつも浮かんでいる。
……封印が不完全だったり、魔法が強すぎたりして、魔法が発動したのだ。
「うーん。調子が出ないわ。ちょっと休憩しましょうか」
「もう、ですかぁ？　今朝から五度目ですよぉ」

「そうはいったって『アリュメット』は『リュミエール』や『グラース』より、ずっと慎重（しんちょう）に作らなきゃいけないのよ」
　ちなみに『アリュメット』は火の木片。『リュミエール』と『グラース』は、それぞれ光のお札と、氷の水差しの、商品名。
　ただし、気に入ってるのは命名したレミーナだけで、他のみんなは『火の木片』『光のお札』『氷の水差し』と、そのまんまの名称を、使っている。
「わかってますよぉ。だって大火傷したのは、ボクなんですからぁ」
　以前、まだ火の木片をヴェーンから、小箱にもいれず運んでいたとき、なんかの拍子に封印が解け、ティオの背中がカチカチ山のタヌキ状態になった。
「ティオ、だから二度とそういうことが起きないように、慎重に作らなきゃいけないんじゃない。一つが燃え出せば、他の木片の封印も燃えて、さらに燃え出すのよ」
「わかってますってばー」
「じゃあ、休憩。広場までいってくるわ」
　ティオとしては、その前に、これまでに比べてミスが多すぎると言いたかったのだけれども、それを口にする勇気がない。
　単調だけれども、繊細（せんさい）な作業だから、沢山（たくさん）作ったうちのいくつかが、失敗するのはしかたない。だから水を張った桶を用意してやっている。

だけど朝から始めて、まだお昼にもなっていないのに、水桶が失敗作で一杯になるなんて、研究し始めたころ以来のことだ。
これまで、レミーナはアイテム作りに、熱中していた。
魔法力を使い尽くすまで作りつづけ、大急ぎでお参りをしてつづきを作る。
自分から休憩も言い出さなかったし、ほっとけばお昼も忘れかねない勢いだった。
それが今日は、ティオにもわかるほどの、上の空。
散歩だって、広場のアルテナ様の像に祈って、魔法力を回復してもらってくるだけにしては、時間がかかりすぎている。
ティオは、小さくため息をつくと、桶を持って倉庫を出た。
「やあ、調子はどうだい？」
「あ、ラムスさん……」
ラムスは、桶一杯の木片を覗き込んで、渋い顔をする。
ティオは咄嗟に、レミーナの不調をラムスに咎められるのではないかと、自分のことでもないのに、心配した。
「えっと、あの、レミーナさんが、魔法力の補給に行っている間に、水を換えておこうと思って、その、広場のアルテナ様の像に……」
その通りなのだけれども、少々というか、すごく言い訳っぽい。

ティオは、ラムスに怒られるのではないかと思ったのだけれども、ラムスは渋い顔のまま、何も言わない。

そうなると逆に不安で、自分から話さずにはいられないのが、ティオである。

「あ、あの、レミーナさん今朝から、上の空なんです。何か考え事をしているみたいで、いつもよりずっと失敗が多くて……。それに、ずっと火の木片を箱に詰め込んでたから、わかるんですけど、火の木片は元の木片より、ほんの少し手触り(てざわ)が暖かいんです。でも、今日はいつもより暖かかったり、ぜんぜん暖かくなかったり……」

ラムスは、ウーンと唸(うな)った。

「そうだね。確かにレミーナちゃんは、調子が悪いみたいだ。ティオ君。その変な火の木片、すぐにより分けられるかい？」

「はい、できますけど？」

「じゃあ、おかしなのを五つ選んでくれ」

ティオは、手早く火の木片を、選び出す。

いくつも小箱を開けないうちに作業を終えたのを見て、不良品が多そうだと、ラムスはますます渋い顔になる。

次にラムスは、封印を破り始めた。

「あ、ラムスさん、そんなことしたら……」

ビリッ……ボシュ……。
小さな火が生まれたが、それは木片を燃やすことなく、消えてしまった。
「火が弱すぎるね。これじゃ商品にならない」
ビリッ、ボシュ！
「アチッ！」
今度は封印を破ったとたんに、火の木片は燃え尽きた。
ティオが、火傷したラムスの指先を、祈って癒す。
……このくらいの癒しならば、ティオも一日三回は祈れるようになった。
「今度は火が強すぎる。これもダメだ」
ティオの選んだ五個は、全て失格だった。
ラムスはついでに、ティオが選ばなかった火の木片の封印も、いくつか破ってみる。
まあ、実用にはなるが、以前より性能が安定していないことは、ラムスの目にも明らかだ。
「あら、何してるのよ」
……レミーナが、戻ってきたようだ。
「え、あの」
ティオは、まるでイタズラを見つけられた子供のような顔をしたけれども、ラムスは、何事もなかったかのように、いつものニコニコ顔で、こう言った。

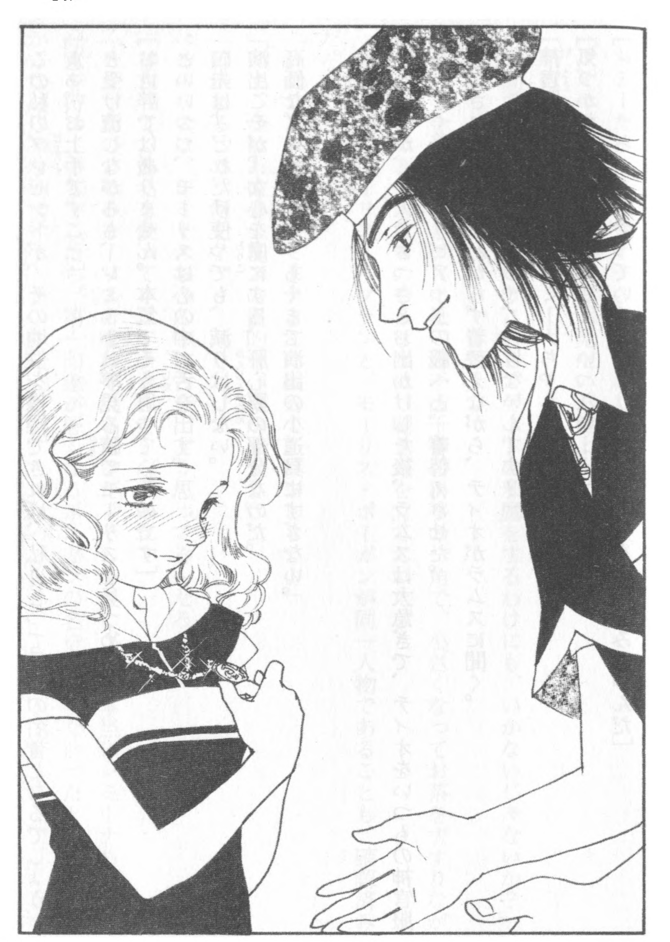
「やぁ、はかどっているようだね」
「あわわわわ」
ティオは、レミーナが怒るんじゃないかと、慌て出す。
しかしなんと、レミーナは言葉通りに取ったらしい。
「まあね。そりゃあ私はレミーナ・オーサですもの」
「へ？」
一応説明しておくが、少なくとも普段のレミーナは、人一倍鈍いティオにもわかるほど、鋭い女の子だ。
「じゃあ、今日の午後は休みにしても、いいんじゃないかな？」
「え？　いいの？」
「えーッ！　いいんですかーッ！」
ラムスは、ティオの踵を、ちょんちょんと蹴飛ばして、黙らせる。
「え、なんですか？　ラムスさん」
全然気づかないティオを無視して、ラムスはレミーナに、声を張り上げた。
「いいとも。期日通りに納品してくれさえすれば」
「じゃ、午後は休みまーす」
「だけど、ティオ君には、手伝って欲しいことがあるんだけれども……」

「どうぞ。お駄賃は、ティオに直接払ってあげてくださいね」
ティオの予定も聞かず、レミーナが即答する。
ラムスは苦笑しながら、こう言った。
「わかった。ちゃんとティオ君には、お駄賃を払うよ」
どうやら、ちゃっかりした部分は、健在のようである。

*

「まぁ！　こんな高価なものを、私に？」
「いえ、大したものでは……、と謙遜しても始まりませんね。それなりに掛かりました。が、レミーナさんの胸元を飾るのに、安物は似合いません」
さり気なくレミーナにネックレスを掛けてやりながら、モーリスはホッとする。
落ちぶれていても、まだ十四歳だとしても、旧家で名家のお嬢さま。しかも以前彼女が海千山千亭で披露した蘊蓄からすると、ただ金をかければいいというわけでもないと見て、マジでプレゼントに、手間と金の両方を掛けた。
……エサをケチって、魚を釣り逃がす愚は犯せない。
レミーナは、指先でネックレスをもてあそびながら、うっとりとそのきらめきに、見とれている。

一級品というわけではないが、気軽にプレゼントできる品でもない。
「でも、頂けませんわ。こんな高価なプレゼント」
「あなたほど美しい方が、身を飾る宝飾の一つも身につけないのは、もはや罪悪です。私の道楽だと思って、どうかお受け取りください」
レミーナは、頬を赤く染めながら、コクンと肯き、受け取る意志を示す。
半分は美しいと言われたことへの、半分はネックレスも指輪も身に着けていないことへの、照れである。
美しいと言われることには慣れているけど、ここまで正面きって、押しに押し倒されるような甘い褒め言葉は、初めてだ。
それに普段、アクセサリーらしきものは、フワフワとウェーブする髪をまとめるリボンぐらいしか、使わない。これだってごく普通の、どこにでもある、リボンである。
モーリスは、内心ニヤリと笑いつつ、こうつづけた。
「しかし、あなたの周囲に、アクセサリーを贈るような男性がいなかったことは、幸いでした。私にチャンスが巡ってきたのですから。
……いえ、レミーナさんに魅力がないというつもりは、ありません。ですが少なくとも、レミーナさんに気に入られ、普段から身に着けるアクセサリーを、あなたに贈る人は、まだ現れていない。そうでしょう？



この私のプレゼントが、その地位を獲得できれば、私にとって最高の名誉となるでしょう」
「まぁ。お上手ですこと」
と受け流しながらも、レミーナは夢見る瞳でモーリスを見つめる。
「お世辞ではありません。本気でそう思っているのです」
といいつつ、モーリスは心の中で舌を出す。
口先は、どれだけ使っても、減りはしない。
演出こそが、女心を虜にする、肝心要の部分なのだ。
高価なプレゼントも、あくまで演出の小道具にすぎない。

*

レミーナが、一人でさっさとお出かけした後、ラムスは大急ぎで、ティオをいつもの神官服から、ごく普通のメリビアっ子の服へと、着替えさせた。
急かされて、わけもわからず着替えながら、ティオがラムスに聞く。
「な、なんで着替えなくちゃ、いけないんです？」
「神官服は目立つから、レミーナちゃんに気づかれるだろ？」
「気づかれるって、ラムスさん、いったい……」
「レミーナちゃんが会っている、モーリスっていう男を、見てみたいんだ」

「あの、だったらレミーナさんと一緒に行けば……」
「レミーナちゃんには内緒で、見たいんだよ」
「尾行するんですかぁ！」
「人聞きが悪いが、そういうことさ。デートの邪魔をするわけにも、いかないじゃないか？」
そして今、ラムスとティオは、海千山千亭の料亭の一角で、小さくなってお茶をすすりながら、レミーナとモーリスのやりとりに、聞き耳を立てていた。
もちろん、モーリス・ルブランと、モーリス・ボーガンが同一人物であることも、確認済みだ。
「ねぇラムスさん。レミーナさんに教えてあげましょうよ」
「いや、今はあのモーリスの目的を、確かめよう」
「確かめるって、何を？」
「モーリスは、レミーナちゃんのことを、どう思ってるんだろう？」
「どうって、偽名を使ってレミーナさんを……。あれ？」
「そう、今のところモーリスの嘘は、偽名だけだ。そしてもし、彼が本当にレミーナちゃんに好意を持っているとしたら、第一印象が悪くなるボーガンの名を名乗らなかったとしても、わからないじゃない」

「でも……」

「確かにモーリスの商売は、僕の理想とは正反対だけれども、やり手なのは確かだ。チロの売買の指示を、ボーガン氏が出していたとしても、現場で立ち回ったのは、彼だからね。彼がレミーナちゃんを手伝えば、オーサ家も景気良くなるかもしれない」

ティオは、レミーナと寄り添ってヴェーンを歩く、モーリスの姿を想像する。

なんだかものすごく、イヤな気分がした。

傍から見れば、レミーナとモーリスは、相思相愛にしか見えない。

それでもティオは、ラムスにこう聞いた。

「あの、モーリスさんは、本当にレミーナさんに、好意を持ってるんでしょうか？」

繰り返すが、レミーナとモーリスは、相思相愛にしか見えない。

だけどラムスは、しぶい顔でこう言った。

「さぁねぇ」

……まだ二人とも……、自他共に認めるお子様ティオも、年齢以上に大人であるつもりのラムスも、自分の心の中に芽生えている、レミーナへの好意以上の感情について、気づいていないようである。

「どうしたらいいんでしょう。モーリスさんと一緒で、レミーナさん嬉しそうですよねぇ」

「しずかに！」

ラムスはティオを黙らせて、再び聞き耳を立てた。

＊

「ところでレミーナさん。ラムス商会のラムス氏などは、あなたに何も贈らないのですか？」
「そんなことは、ありませんけど……」
オヤツや、宿や、食事や、そういうプレゼントなら、頻繁に受けている。
「……、ラムスさんが、どうかしましたの？」
「いえなに、ちょっと気になったのですよ。恋のライバルとして」
とたんにレミーナが、照れまくる。
「あら！　イヤですわ！　ラムスさんが恋のライバルだなんて！」
レミーナの心の中には、ラムスへの特別な気持ちなど、まだカケラもなかった。
もちろん、ティオにたいする特別な気持ちも。
「そうでしょうとも。あまり、似合いません。それに……」
ここからが、本番だ。
モーリスは、思わせぶりに一拍置いて、先をつづける。
「……、ラムス氏はあなたの作った光のお札、氷の水差し、火の木片で、あんなに儲けているのに、あなた自身は少しも羽振りが良くなった様子がない」

「『グラース』に『リュミエール』、そして『アリュメット』ですわ」
「どうしてラムス商会としか、取り引きしないのですか？　私ならあなたを、今までの四倍、いや八倍は儲けさせてみせるのに」
「独占契約と引き換えに、私の借金の返済の延滞を、認めてもらいましたの」
モーリスは、憤って見せる。
「なんてヤツだ。弱みにつけ込んで、そのようにあなたに不利な契約を迫るとは」
「そんなことは、ありませんわ。その約束をしたときには、まだ私、どんな商品も開発してなかったんですもの」
「だとしても、もう状況が違っている。あなたの才能は、一人に独占させるようなものじゃないはずだ！　そうでしょう？」
それはまるで本当に、レミーナのために怒っているかのようだった。

＊

「なるほど、目的はそっちか」
ティオは、ラムスが怒っているんじゃないかと、おそるおそる彼の顔を見上げた。
恐るべきことに、ラムスはいつものニコニコ笑顔に戻っている。
……よけいに怖い。

「ティオくん」
「は、はい！」
「あとは僕がやるから、キミは店に帰って、不良品の仕分けをしておいてくれないかな」
「え……。あの、ラムスさん、まさかケンカするつもりじゃ」
「殴り合いにはならないから、心配しなくていい」
「でも、あの、その」
ラムスは、ニコニコ顔をティオに近づけ、小声ながらもうむを言わせず、もう一度丁重に命令する。
「店に帰って、不良品の仕分けをして欲しいんだ」
「は、はい。わかりました」
そしてティオは、言う通りにした。

＊

「おやぁ、レミーナちゃん。それに、モーリス・ボーガンさんでは、ありませんか」
ラムスの登場は、少しばかりわざとらしかった。
特に「ボーガン」の部分に、力が入りすぎていた。
「あらラムスさん。こちらは、モーリス・ルブランさんよ。ボーガンさんだなんていったら、

失礼だわ」
と、レミーナは、キョトンとしている。
一方モーリスは、ニヤリと不敵に笑って、覚悟を決めた。
どうやらモーリスには、ラムスの真意が伝わったらしい。
一度バレてしまえば、隠し立てするのは更(さら)に不利とばかりに、モーリスは自(みずか)ら事実を告げる。
「いえ、レミーナさん。商売がら私はいくつも名前を持っていましてね、ボーガンもルブランも、私の名前です。あなたが叔父(おじ)のボーガンを嫌っているようなので、あえてあなたの前では、その名を使わなかっただけですよ」
「え？　え？　どういうこと？」
「言葉通りに、取ってください」
レミーナは、決して鈍いほうではない。
しかし、理解してしまったからこそ、納得(なっとく)したくないこともある。
目の前のモーリスと、そしてあの世界一大嫌いな、生理的に受けつけない魔法無能力者ボーガンが、親類(しんるい)だという事実などが、その代表的なものだろう。
だが、レミーナは聡明(そうめい)な女の子でもある。
いくらボーガンが嫌いでも、親類で、ボーガンの名を持っているからといって、モーリスを嫌う必要はないと、結論した。

だけど、この結論に達するまでの間、さすがのレミーナにもしばらく時間がかかり、つまりしばらく彼女にしては珍しくも黙り込み、その間にラムスとモーリスの、レミーナに関る商談が、始まったのである。

まずラムスが、口火を切った。

……下に見られないように、わざと多少尊大な言葉遣いをする。

「小耳に挟んだところによると、ラムス商会とレミーナちゃんの、独占契約に不満があるようだけど、もしかしたらキミも、レミーナちゃんと直接取引したい口かな？」

モーリスは、素早く考えを巡らせる。

確かに彼の目的は、その通りだ。

そして、メリビア商人であるラムスには、もう彼の手口は、半ばばれているだろう。

だがまだレミーナに対しては、いい人を装いたい。

極限まで自分に有利な契約を、レミーナと結ぶためには、それが必要だ。

そこでモーリスは、ラムスに対し、レミーナの代弁をしている正義の味方とでも言うかのように、振る舞うことにした。

「レミーナさんの才能が、独占されていることが問題なのだ。他の商人たちが、競って彼女の才能に値をつけ始めれば、必ずや彼女のアイテムは値上がりする。彼女は得るべき利益を、失っている」

「そうはいっても、僕だって充分なリスクを冒して、この契約を結んだんだよ。利息抜きで、貸した金の返済を、分割払いにしたんだから。

レミーナちゃんが売れる物を作れなければ、レミーナちゃんが借金を全額返済してくれても、僕は利息分を丸損するんだ」

「だが、彼女は才能を開花させた。ラムス商会は、すでにその利息分以上の利益を得ているはずだ。そろそろ契約を見直すべき時期とは、思わないか？」

やや怒っている（かのように振る舞っている）モーリスに、ラムスはニコニコしたまま、答えていく。

「確かに僕の店は、レミーナちゃんのおかげで、潤（うるお）っている。それはつまり、レミーナちゃんも儲（もう）けているってことさ。独占契約は、借金が返済されるまで、ということになっていてね。レミーナちゃんが望むなら、稼ぎで借金を返済して、予定より早く契約を完了することも、できるんだ」

モーリスは、ムスッとして言った。

「いったい、彼女はいくら借りてるんだ？」

「三万シルバー」

……ちなみにこれは、三百万円に、相当する。

痛くないわけではないが、モーリスが叔父からちょろまかした金の残りをはたけば、なんと

かなる額だ。
「なら私がそれを……」
「……を、あと二十二回」
モーリスが、ぽかんと口を開けて、動きを止めた。
そりゃあ、下調べでレミーナがラムス商会に、大きな借金をしていることぐらいは、知っている。
だが、十四歳の女の子なら三百シルバーだって大金。
なのに、三万シルバーがあと二十二回。
合わせて六十六万シルバー。
……六千六百万円。
あと、ということは、最初はもっと多かったわけだ。
またそれだけ借りたら、利息だってちょっとやそっとじゃ、すまなくなる。
多少商品が売れたくらいじゃ、大借金の利息を打ち消すことは、できはすまい。
特に、ラムス商会のような、チンタラした売り方をしているかぎりは。
……こいつ、何考えて、子供相手にそんな大金を貸したんだ？
モーリスは、ニコニコしているラムスを、まじまじと見た。
ラムスは、わけ知り顔で、うなずいた。

「そう、誰かが簡単に、肩代わりできるような額じゃあ、ないんだ。だけど……」
「だが、何だ？」
「ラムス商会が得るはずだった利息の一部として、即金で五万シルバー。そしてレミーナちゃんが借金を返済できなくなったときに、代わりに返済してくれる保証人になってくれるなら、僕は独占契約を破棄してもいいよ」
ラムスの出した条件は、ルナの相場から見たら、はっきりいって甘々である。
その点でいえば、ラムス商会とレミーナの契約も甘々だ。
そしてモーリスは、舌先三寸で、原価五百シルバーのチロを、一万二千シルバーまで値上がりさせて、その差額でガバガバ儲けた男である。
もっとも、この計画の骨子は、叔父のボーガンによるものだし、資金も叔父のものだったから、儲けも叔父のものになった。
だが、実行したのは、モーリスだし、やり方も覚えた。
今五万はないが、手持ちの三万を五万にするなど、簡単なことだ。
「よし、いいだろう。五万シルバー払い、保証人になろう。だが五万は大金だ……」
モーリスを、ラムスが遮った。
「いや、その前に、レミーナちゃんの意見を聞かなきゃ。当事者なんだから」
「あ」

そして二人は、珍しく黙り込んでいたレミーナを見た。
レミーナもまた、自分が固唾を飲んで、二人の話に聞き入っていたことに、気がついた。
「えーっと、モーリスさんが保証人で、モーリスさんが五万シルバー払って、……いくらなんでも、モーリスさんにそんなこと……」
モーリスは、自分の舌先三寸を、思い切り使いまくって、レミーナを丸め込みにかかる。
「叔父があなたにしたことへの、罪滅ぼしだと考えて下さってもいいですが……」
こんな言い方をすれば、嫌われている叔父にも、利用価値があるものだ。
さらにひと押し。
「……それよりも、あなたへの好意の表れと受け取ってくださると、嬉しいですね」
愛は、恥ずかしがらずに、堂々と正面きって幾度も語るに限る。
……特に、真実の愛など、かけらもないときには。
そしてラムスは、あくまでもビジネスライクを装って、こう言った。
「まあ、レミーナちゃんにだって、考える時間が必要なはずさ。モーリスさんにしたって、いくら好意だといっても、タダでそうするというわけじゃないだろ？　レミーナちゃんに対する条件があるはずだ。それを話し合ってからでも、いいんじゃないかな？」
ラムスもモーリスも、レミーナがどう出るかを見守った。

*

レミーナは、二人の態度にモヤモヤしたものを感じ始めていた。
彼女は、鋭い女の子。
言葉では、そのモヤモヤが何なのか、説明することはできなかったけれども、彼女は自分の感性を、信じている。
彼女は久しぶりに、自分の感性を、自分を見つめなおそうと、心を落ち着かせるために、ゆるく呼吸を整え始めた。
……自分の力を信じること、自分の感性を信じ、その状態を受け入れること。それこそが、魔法力を形にする……魔法を使うための、基本でもある。
心に耳を澄ませながらも、ここしばらく、自分を見つめていなかったことに、気がついて愕然とした。
それは呼吸のように、自分にとって当たり前のことだったはずなのに、普段息をしていることを忘れているように、それを忘れていた。
そのことに愕然としつつも、その自分をも受け入れる。
レミーナは、充分落ち着いて、自分の心の波紋を見つめた。
そこに、愛を語るモーリスが映る。

……私は、モーリスに何を求めていたのかしら？
そこに、ニコニコ顔のラムスが映る。
……私は、ラムスに何を求めていたのかしら？
そして、雨に濡れた小犬のような瞳で、レミーナを見上げるティオが映った。
……私は、ティオに何を求めていたのかしら？

……私は、何を求めているのかしら？

優しげな母ミリアが、落ち着いたヴェーンの町並みと、町の人々の姿が、次々とレミーナの心に映し出されていく。
さらに、卑屈(ひくつ)な態度で母に取り入ろうとする、ボーガンの姿が。

レミーナは、力強い笑みを浮かべて、ラムスとモーリスを見つめた。
「そうね。まずモーリスさんが私に何を求めているのか、聞かなくちゃね」
ラムスもモーリスも、我が意を得たりと、頷(うなず)いた。

＊

　そしてレミーナとモーリスは、海千山千亭に残って話し合いをつづけ、ラムスは一人店に戻り、倉庫に向かう。
　ティオが、薄ぐらい倉庫の奥でぼーっとしていたが、ラムスが来たのに気づくと、そそくさとやってくる。
「あ、あの、レミーナさんは？」
　どうもずーっと、そればっかり考えていたらしい。
　一方ラムスは、二つの山に分けられた小箱を見て、目を丸くした。
　片方が、不良品というわけだ。
「半々かい？　こりゃあ、まいったなぁ」
「す、すみません」
「ティオ君。キミが謝る必要は、ないんだよ」
「あ、はい、すみません」
　それ以外にも、水桶の中には、山と火の木片が、突っ込まれている。
「これは？」
「封印が不完全で、ちょっとさわっただけで、火がついちゃうのが、結構あったんです。火事になるといけないから、危なさそうなのは、水に突っ込んじゃいました。……すみません、勝手なことして」

「いや、その判断は正しいよ。よくやってくれた。ティオ君は、もっと自分に自信を持ってもいいんじゃないかな？」
ティオは、嬉しそうに笑った。
「あ、ありがとうございます」
それからモジモジしながら、
「そ、それから、あの、その、レ・レ・レ……」
「レミーナちゃんだね。彼女ならまだ海千山千亭に、モーリスと一緒にいるよ」
「そ……、そうなんですか？　あの、その、モ・モー……」
「モーリスが、レミーナちゃんを騙すつもりなのは、確実だよ」
「だったら、なぜ」
「レミーナちゃんを、連れ返らなかったのか？　だろ？」
「はい」
ティオは、心配そうにラムスを見上げた。
「あとは、レミーナちゃん次第だよ。首に縄をくくって連れかえるようなことをする権利は、僕にはないんだし」
「そ、そうですか？　でも……、レミーナちゃんが騙されてるのがわかってるのに、教えてあげないんですか？」

「明らかな証拠でもないかぎり、レミーナちゃんは納得しないよ。レミーナちゃんが、自分で気づかないかぎり、反対されればされるほど、モーリスに騙されてしまう」
「で、でも……」
ラムスは自信たっぷりに、いつものようにニコニコ笑いながら、両手でティオの両肩をポンポン叩く。
「大丈夫だ。レミーナちゃんを信じなきゃ」
ラムスはまるで、無理にでもそう信じようとしているかのように、主張した。
勢いに押されて、ティオは「は、はい」と答えたものの、まだ煮えきらない。
「そうそうティオ君。これ、お駄賃ね」
ラムスはティオの手を取り、意味ありげに五十シルバーほど握らせた。
お駄賃にしては、破格である。
「こ、こんなに頂けません！」
慌てて返そうとするティオの手を押しもどし、瞳を覗きこみながら、ラムスはこう言った。
いつものニコニコ顔の後ろに、おどろ線が発生し、とっても怖い。
「ティオ君。これは取っておいてくれたまえ。そのかわり、不良品が発生したことと、それを仕分けしたことは、レミーナちゃんには内緒だよ。それからキミも、レミーナちゃんの前で、モーリスの悪口は言わないように」

「で、でも……」
「今彼女を追い詰めれば、意固地になって、判断を誤りかねない。これは、レミーナちゃんのためなんだ。いいね」
「は……、はい」
ラムスがもし、こんな口止め料みたいなものを出さなければ、ティオもレミーナのためと納得して、すすんで協力しただろう。
だけどいったんこんなものを出されてしまうと、例えそれがレミーナのためであっても、ティオは罪悪感を感じずには、いられない。
「で、でも……」
「なんだい？」
「どうして……ラムスさんは……。いえ、なんでもないです」
それきりティオは黙ってしまった。
けれどもラムスは、考える。
……レミーナちゃんはまだ十四歳なんだし、いい子だし、将来性だってある。変な男に騙されるのを、みすみす見過ごすことなんて、できるわけないじゃないか。
……レミーナちゃんが騙されたら、貸しているお金だって、回収できなくなるかもしれないんだし。

……いや、僕は騙されそうになっている人には、一言忠告しなきゃ、気がすまない性質なんだ。そうさ、いつもと同じさ。

実際、確かにラムスは、チロ騒動のときだって、チロ・バブルに踊らされている人々に忠告はした。

長き平和な……変化なき時代。

良い商人とは、善良で誠実で、堅実な商いをする人物のことだった。

しかし近年、メリビアッ子たちは、派手に一攫千金を稼いだといった、景気のいい噂話に熱中している。

時代は、ゆっくりと動き始め、もはやラムスのような商人は古臭いと軽んじられるようになり、他人を出し抜いてでも一儲けするボーガンやモーリスのような人物が、やり手として評価されるようになった。

怪しい儲け話には耳を貸しても、ラムスの忠告は馬耳東風と、聞き流される。

そのくせ損をすると、「どうしてもっとちゃんと、止めてくれなかったのだ」と、ラムスに理不尽な不満をぶつけるのだ。

それがわかっているのに、ラムスは無駄とわかっていても、口を挟むのを、やめられなかった。

ただし、口を挟むだけで、それ以上のお節介は、普通はしない。

それがことレミーナのことになると……、

そりゃあ彼女はパワフルで、ラムスが将来大物になると睨んだ人物ではあり、しかも十四歳の女の子が、海千山千の胡乱な連中に騙されるのを見過ごすのは、一人前の自分で判断しなきゃならない商人が騙されるのを見過ごすのとは、意味が違う。

……とはいえ、オーサ家に集っていた悪徳商人たちの手を引かせ、大金を貸し、返済を待ってやり、商品を有利な条件で売ってやり、今また彼女に接近した詐欺師に接触し……。

それは、破格の扱いだった。

＊

その日の夕方、戻ってきたレミーナを、ラムスとティオが、そそくさと出迎える。

……作業場でティオに見せた、自信たっぷりの様子など、ラムスにはない。

「あの、その」

「レミーナちゃん。結論は出たかい？」

ティオをさえぎるラムスの質問にも、レミーナはそ知らぬ顔だ。

「結論って、何の」

「何のって、モーリス氏の件だよ」

ラムスは、ちょっとムッとしたようだ。

「そうそう、その件でラムスさんに、お願いがあるんだけどぉ」
レミーナは、突然甘え声になる。
「……なんだい？」
「モーリスさんにね、私の商品を回して欲しいの」
「そりゃあダメだよ。予約の人もいるんだし」
「全部ってわけじゃないわ。全部で三万シルバー分」
ラムスとしては、モーリスに売りたいとは、思わない。
だけれども彼の商哲学は、自分の好き嫌いで客を選ぶべきではないと、彼に告げた。
とはいえ、不良品がたくさん出たから、三万シルバー分も売ると、あとは予約した人へ売るだけで終わって、店頭在庫がなくなってしまう。
だけど……。
「まあ、いいだろう。だけど卸値じゃなくて、ラムス商会で売る通常価格でだよ。それが商売というものだからね」
「ありがとう、ラムスさん！」
ラムスとレミーナを、いつものようにオロオロと見上げていたティオは、そのときになってやっと、口を挟んだ。
本当なら、モーリスとは手を切って欲しいと言いたいところではあるけれども、罪悪感を感

じながらも貰ってしまった口止め料への義理もあるし。……そこまできっぱり言えるなら、そもそも口止めを断っていただろう。

だから、こう言った。

「あのレミーナさん。これからもずっと、モーリスさんとつき合うつもりなんですか？」

「どうして？」

「どうしてって、あの、その……」

ティオが変なことを口走らないうちにと、ラムスがでまかせでごまかそうとする。

「ティオ君は、レミーナちゃんがモーリス氏と一生つき合うんじゃないかって、そう思ったんだよ」

「……それって、私がモーリスさんと、結婚するってこと？」

「そうそう、ティオ君早とちりしてるんだ」

ティオは思っていたことを言い当てられて真っ赤になり、そしてラムスは自分でも驚いたことに冷や汗を流し始めた。

……なんかものすごく、嫌なことを口走ったような気がしたからだ。

そしてラムスとティオは、レミーナがどう反応するか、注目した。

「そうねぇ、そこまで先のことは、考えたこともなかったわ」

言葉ではそう言いつつも、その夢を見ているかのように瞳は潤み、その指先はモーリスから

プレゼントされたネックレスを、弄っている。
しかしその次の瞬間、夢が覚めたかのように、こうつけ加えた。
「でも、いくらなんでもボーガンと親類になりたくはないわ。特に私がレミーナ・ボーガンになるなんて、絶対にイヤ」
ラムスとティオの肩の力が抜ける。
ところがレミーナは、こうつづけた。
「だけど、もともと魔法ギルドの当主は、愛人は作っても結婚はしないものだから、親類にはなんないわよね」
ラムスとティオは、まん丸に見開いた目で、レミーナを見つめた。
レミーナは、自分の言ったことを説明しなおす。
ちょっと早口なのは、照れているからだろう。
「やーねー。変な想像しないでよ。世間に夫を公表しないだけで、あとは普通の夫婦と同じなんだから。ほら、妻としてより当主としての立場を優先させなきゃいけなかったり、夫の親類が魔法ギルドに口を挟んできたりするのを避けるために、そうなってるだけだし、夫は当然魔法力の高い魔法使いで、ギルドメンバーなわけだから、離れて暮らすわけでもないでしょ。誰が夫かは、ギルド内部では公然の秘密扱いなわけ。ロマンチックでしょ？」
ラムスもティオも、それのどこがロマンチックなのか、わからなかった。

それに、そういう意味で目を丸くしたのでもない。

レミーナが、モーリスをそういう対象として考えているということに、目を丸くしたのである。

……ラムスもティオも、そういう点では並の男であるからには、十四歳の女の子というものが、同じ年頃の男の子よりずっとおマセさんであり、始終恋だの結婚だの考えているだなんて、毛ほども想像していなかった。

しかし、今までの仕事一筋、お金儲け一筋、没落した魔法ギルドの復興一筋というレミーナの方が、女の子の平均からは、大きく外れていたのである。

ティオが、おずおずと夢見ているレミーナに、進言する。

「あのぉ、レミーナさん。モーリスさんは、魔法使いじゃないんですけど」

レミーナは、大きくうなずいた。

「そうなのよね。でも、今時魔法使いにこだわってたら、私いつまでたっても結婚できないし、……今度こっそり、モーリスさんの魔法力調べてみようかしら」

「で、でもそれじゃあ、レミーナさんが普段大切にしてる伝統の立場がないような、そんな気がするんですけど……」

「いーのよ。魔法ギルドの当主たる私が、新たな伝統を築いていくから」

「そ、そんな都合のいい話って……」

「いーの、いーの」

だからティオは、こっそり女神アルテナ様に、（モーリスさんに魔法力がありませんよーに）と、お祈りするしかなかったのである。

そしてもちろんアルテナ様は、そんな祈りに応えてくれは、しなかった。

＊

レミーナがすべての作業を終えた翌日には、モーリスは三万シルバーをラムス商会に支払って、目当ての商品「火の木片」「氷の水差し」「光のお札」を手に入れた。

なにせ今一番の人気商品。モーリスがまとめて手に入れ、ラムス商会の扱いが減ったということは、つまり需要があるのに供給が減ったということで、それだけでも定価以上の値で売れる。

しかし、まだこの簡易版マジックアイテムは、メリビア以外には知られていない。

そこで、少しばかり離れた町に持っていき、無知な商人に普通のマジックアイテムのような顔をして、高く売りつけてしまうつもりだ。

三万シルバーを、すぐに何倍にもできるだろう。

その金で、ラムスに五万シルバーを支払って独占契約を解除させ、レミーナに自分の有能さと稼いだ金を見せつけてさらに取り入る。

そしてレミーナを信用させて、今度は自分と独占契約を結ばせる。

なーに、ラムスからもレミーナからも、すぐに使った金の何倍も、巻き上げてみせるさ。

というわけで、モーリスが商品を積んだ馬車に揺られながら、メリビアの街を出た、その日のお昼にもならないうちに、ボロボロになったモーリスが、ラムス商会に飛び込んできたのである。

ちょうどそのとき、レミーナとティオは、ヴェーンへ帰ろうと、ラムス商会を出るところだった。

モーリスは、レミーナを見つけ、これまでかぶっていた羊の皮をかなぐり捨てて、悪態をつく。

「最初からこの俺を騙すつもりで、仕組みやがったな！」

レミーナはキョトンとし、ティオはすくみ上がってレミーナの後ろに隠れ、店の奥からはラムスが飛び出してきた。

事情もわからぬまま、レミーナがモーリスを落ち着かせようとする。

「モーリスさん、落ち着いて。いったいなんの……」

騙すはずの自分が騙されたと思いこみ、彼は頭に血が上っていた。

「しらばっくれるな！　街を出てすぐ、火の木片が勝手に燃え出して、あっというまに全財産

が丸焼けだ！　この始末、どうしてくれる！」

　もちろん、ラムスにもティオにも心当たりがあったけれども、レミーナは自分の商品に、絶対的な自信を持っていた。

「モーリスさん。アリュメットは、勝手に燃え出すようなものでは、ありませんわ。そこが一番工夫したところなんですもの。第一、私がモーリスさんに、そんなことするわけが、ないじゃありませんか」

「ふん、俺がボーガンの甥と知って、一泡ふかせようとしたんだろう」

「そんなこと、するもんですか！」

「じゃあてめーの作った商品は、勝手に火を噴く欠陥品ってわけだ！」

……何か言おうとするティオを、ラムスが止める。

　そしてモーリスは、レミーナに対して決して言ってはならないことを、口走った。

「なにが魔法使いだ！　なにがヴェーンだ！　甘い顔して聞いてやれば、ガキのお伽噺を何時間もつづけやがって、バカげた夢を語る前に、まともなマジックアイテムの一つも作ってみやがれ！」

　レミーナはムスッと黙り込み、そして呪文をつぶやき始める。

「だ、ダメですよレミーナさん！　こんな、街中で！」

　そのときモーリスは、レミーナが彼がプレゼントしたネックレスを、していないことに、気

がついた。
それどころか、奇妙といってもいいような、変なアクセサリーだらけだった。
ババ色のリボン。
やたらでかい指輪。
ごてごてしたネックレス。
センスの悪いブレスレット。
ついでに小脇（こわき）には、グロティスクなぬいぐるみを抱えている。
なまじレミーナ自身が美少女だもんだから、世の中のスカした男なら、一緒に街のメインストリートを歩くのだけはカンベンしてくれと言いそうな、仕上がりだ。
「ふん。落ちぶれた名家のお嬢様は、男からプレゼントされたネックレスさえも、すぐさま売り払っちまったと見える。にしても、なんて趣味の悪さだ」
「ダメですよぉ！　人間相手にぃ！」
レミーナは、ティオを無視して魔法を開放した。
その直後、モーリスは世にも恐ろしい目にあったのだ。
……魔法攻撃。
そりゃもちろん生まれながらの魔法を攻撃に使える者もいるし、卓越（たくえつ）した戦士はその戦力に自（みずか）らの魔法力を上乗せすることもできる。

　が、この誰しも魔法が使える世界では、その程度では魔法使いとは、呼ばれない。
　そして、平和な時代がつづく間に、魔法使いがどんな魔法を使うのかも、人々は忘れていた。
　地獄の業火がモーリスに絡みつき、煉獄の吹雪がモーリスに吹き荒れる。
　すでに騒ぎを聞きつけて集まってきていたメリビアッ子たちが、凍りつく。
「あぁ！　ボクがいけないんだ！　ボクが！」
　ティオが泣き始め、人々がモーリスを助けるため、右往左往し始めたところ、それは唐突に終わった。
「ティオ、慌てないでよ。いくら何でも、私が人間相手に、火や氷の魔法を使うわけ、ないでしょ。あれは光の魔法をアレンジした、幻よ」
「え？」
　モーリスは、往来の真中で、不思議そうに自分の手足を見つめたり、触ったりしていた。
　来たときのままの、ボロボロの姿ではあるけれども、レミーナが魔法を開放する前と、何一つ変わったところはない。
　レミーナは腕組みをして胸を張り、……変なぬいぐるみを持っているので、まるでそれをダッコしているような格好で……、モーリスに宣言した。
「あなたの本心は、よーくわかったわ！　私は、いいえ魔法ギルドは、金輪際どんな些細な取引も、あなたとはしない！　それと、変な格好で悪かったわね！　これは全部、旅の途中、怪



物に襲われたときの用心のために身につけている、マジックアイテムなんですからね！」

レミーナが言った通り、リボンからぬいぐるみまで、すべて彼女の魔法をサポートしてくれる、マジックアイテムである。

ただし、一つ一つの効果は低いし、魔法使いにしか使えないたぐいの物であるため、魔法使いがほとんどいない現在、まったく商品価値はない。

それゆえオーサ家に残りつづけ、そしてレミーナは、身の安全のために、それをかき集めて、旅の間だけ身につけているというわけだ。

最近サルは、このゴテゴテとアクセサリーを身につけた人間を襲うと、手痛いしっぺ返しを受けるということを、学習したらしい。

サルは、レミーナでなくても、アクセサリーだらけの人間を、敬遠するようになったそうだ。

もっとも、あまり高そうなアクセサリーだと、今度は盗人の類に目をつけられるので、なかなか難しい。

それはおいといて……。

モーリスは、きっと、ものすごく怖かったに違いない。

だからこそ、自分が怪我一つしていないと知ると、虚勢を張ってこう叫んだ。

「ふん。こんなこけ脅ししかできないエセ魔法使いめ！　魔法の使えない叔父貴と何が違うってんだ！」

怖いもの知らずとは、このことだ。
完全に、レミーナの逆鱗に触れてしまった。
レミーナは再び呪文を唱え始め……。
「だ、だめです！　今度はほんとに、火の魔法の呪文じゃないですか！」
ティオと一緒に、ラムスも止めに入る。
「レミーナちゃん！　やめるんだ！」
「ふん！　痛くも痒くもない幻しか出せないくせに！」
ティオはモーリスに向かって叫んだ。
「何いってんですか！　火の木片や氷の水差し、どうやって作ってると思ってるんです！」
そしてラムスも叫ぶ。
「逃げるんだ！　二度と彼女の前に現れちゃいけない！　さっきのが、今度は幻じゃなしに来るぞ！」
モーリスは、理解した。
そして咄嗟に自分の魔法力を、開放したのである。
……生来の魔法を使うには、呪文は要らない。
「ヒック！」
レミーナは、呪文の最後の最後で、しゃっくりをした。

あれ？　という顔をし、そしてモーリスを睨み、もう一度呪文の結びの部分を、唱えなおそうとする。

「ヒック！」

またも、しゃっくりが出た。

そして三度……。

しゃっくりが止まったとき、モーリスの姿は、すでにメリビアから消えていた。

*

「まったく、言いがかりもはなはだしいわ！　私が作ったアイテムに、間違いなんかあるわけないでしょ！」

「だけどねレミーナちゃん。今回キミが作った商品、不良品が多かったのも、本当なんだ。モーリスの荷物が燃え出したのも、そのせいなんだよ。

不調は一時的なものだと思ったから黙っているつもりでいたけど、事故が起きたからにはレミーナちゃんも自覚して慎重に……」

「ラムスさんまで、これが全部、不良品だっていうの？」

倉庫の、ティオがより分けておいた不良品の山の前で、レミーナはモーリスへの怒りが収ま

っていないこともあり、不満げだ。
「そうとも。作った物の半分が……」
レミーナはラムスを無視して小箱を開け、火の木片の封印を破る。
ベリッ……ボッ。
普通に、火がついた。
レミーナは、次の木片を破る。
ベリッ……ボッ。
またも普通に、火がついた。
「なにもおかしなところなんて、ないじゃない」
「あれ？」
ラムスも別の小箱を開けて、木片の封印を破る。
ベリッ……ボッ。
普通に、火がつく。
いくつ破っても、どれもこれも、普通に火がつくばかりである。
胸を張るレミーナの後ろで、ティオが無言のまま、大げさなポーズでラムスに、ゴメンなさいをした。
……ゴメンなさいラムスさん！　ボクが、ボクがいけないんです！

……ティオ君、不良品と合格品を、入れ間違えたな。モーリスに売ったのは不良品の山か……。

あの不良品の中には、ひどく魔法が発動しやすいものも、たくさんあった。

できるかぎり危険そうなものは処分したけれども、馬車に揺られているうちに、封印が解け、暴発したのだろう。

火の木片が一つ暴発すれば、あとはなし崩しに全部燃え出すまでに、さして時間はかからない。

事故は起こるべくして、起こったと言えよう。

そんなラムスやティオの思惑など露知らず、レミーナは自信たっぷり胸を張る。

「レミーナ・オーサに、間違いがあるわけ、ないんですからね！」

＊

こうしてすべてが、丸く収まった……かに見えた。

「売れなくなった、ですって？」

ラムスは、このときばかりは真面目な顔で、レミーナに告げた。

「そうなんだ。モーリスが店の前で、大声でレミーナちゃんのアイテムを、不良品呼ばわりし

ただろ？」

「それを、みんなが信じたっていうの？」

「さあね。だけど、その後のレミーナちゃんの派手なパフォーマンスで、メリビアッ子たちはほんの少し、魔法が怖くなったらしいんだよ」

「あれで？　たかが光の、痛くも痒（かゆ）くもない魔法で？」

「そりゃあそうだけど、モーリスを脅すための魔法だろ？　周りの野次馬（やじうま）たちも十分に脅されて、何倍にも誇張しながら、話せる限りの相手に話したんだ。……まるっきり売れなくなったわけじゃないけど……」

こうして、簡易（かんい）マジックアイテムのブームは、終わったのである。

レミーナのお小遣い帳

今回の収入

商品の売上	S45,000
ネックレス	S1,300

今回の支出

ラムス商会への返済	S30,000
商品の材料費	S822

今回の収支　プラス15,478S

（※1S（シルバー）は100円前後）

もちろん、あのネックレスは売り払ってやったわよ！
魔法ギルドを復興するまで、二度と恋なんてしない。
信用できるのは、お金だけだわ！
これからもがんばって、稼いで稼いで、
魔法ギルドを復興するんだから！
だからみんな、私を応援してね！



あとがきにかえて

というわけで、レミーナ・オーサです。
私の十四歳のころの活躍、いかがでした？　って、ちょっとひどいんじゃない？　私はてっきり、もっと素敵に書いてくれるものだと、思ってたわ。
あってるのは、美少女だっていうところだけなんだもの。
それはそれとして、昨年角川スニーカー文庫から『ＬＵＮＡＲ２　エターナル・ブルー　青き星のルーシア』が発行された後、私あてにとっても素敵なファンレターが、いっぱい届いたのよ！
中でも神奈川県の美由紀さんからの、ハガキサイズの二枚のイラストには、感動したわ！　一枚には私の素敵なイラストが、もう一枚には『〜ルーシア』の主人公、ヒイロさんとルーシアさんが、描かれているの！
そしてね、このイラストを送ろうとしたとき、私の声が聞こえたんですって！
「ちょーっと、そこのアナタ！　ハガキ二枚バラバラに出すのなら、一緒に封筒に入れた方が、

お得でしょ！」（林原めぐみさんの声で）

そうよそうよ！　まったくもって、私の声だわ！

美由紀さん！　こんな素敵なイラストを二枚も、タダでくれるなんて、あなたってとってもいい人だわ！　もちろん、他のみなさんも、お手紙ありがとう！

ヴェーンの近くまできたときには、ぜひ魔法ギルドに寄ってってね！

おいしいお茶を、タダでご馳走するから！

それから、『ルナ』のCDが欲しいとか、『ルナ3』を出してっていう手紙も来たんだけど……。

ごめんね。魔法ギルドでは、CDもゲームソフトも、作ってないの。

そういうのは、角川の『ソフト事業部』にお手紙出して下さい。

あて先は、ソフトのパッケージに書いてあるわよ。

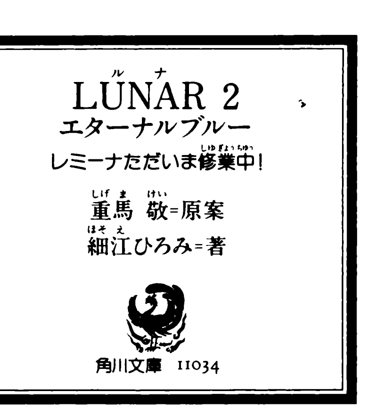
それから、インターネットのみんなも、応援してくれてありがとう！

でも編集の主籐さんが、電子メールが普及したせいか、編集部への手紙が少なくなったって、嘆いていたわ。

お手紙は、今後発行する本を決めるための、大切な資料なんですって。

でも、電子メールの方が、安いんですもの、当然よねー。角川も、ファンレター受付け用の

アドレスとか、作ればいいのに。
でもまあ、あなたの『想い』が、行動することによって、現実になるかもしれないんだから、ハガキ一枚くらいヒイロさんの苦労に比べたら、安いものよね。
というわけで、またお手紙ちょうだい！
そして「レミーナはもっと素敵よ！」とか、「もっとレミーナを活躍させて！」とか、「ボーガンなんか出すな！」とか、「レミーナをお金持ちにして！」とか、「お金持ちでハンサムで背が高くて魔法力があって、レミーナを心から愛しているすてきな男性を、登場させて！」って書いてね！　よろしくお願いよ！
じゃあまーたねー！



LUNAR 2
エターナルブルー
レミーナただいま修業中!

重馬 敬=原案
細江ひろみ=著

角川文庫 11034

平成十一年五月一日 初版発行

発行者——角川歴彦
発行所——株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二—十三—三
電話 編集部(〇三)三二三八—八五五五
営業部(〇三)三二三八—八五二一
〒一〇二—八一七七
振替〇〇一三〇—九—一九五二〇八

印刷所——日本写真印刷 製本所——文宝堂

装幀者——杉浦康平

S616-8 ISBN4-04-419504-8 C0193

角川文庫発刊に際して

角川源義

第二次世界大戦の敗北は、軍事力の敗北であった以上に、私たちの若い文化力の敗退であった。私たちの文化が戦争に対して如何に無力であり、単なるあだ花に過ぎなかったかを、私たちは身を以て体験し痛感した。西洋近代文化の摂取にとって、明治以後八十年の歳月は決して短かすぎたとは言えない。にもかかわらず、近代文化の伝統を確立し、自由な批判と柔軟な良識に富む文化層として自らを形成することに私たちは失敗して来た。そしてこれは、各層への文化の普及滲透を任務とする出版人の責任でもあった。

一九四五年以来、私たちは再び振出しに戻り、第一歩から踏み出すことを余儀なくされた。これは大きな不幸ではあるが、反面、これまでの混沌・未熟・歪曲の中にあった我が国の文化に秩序と確たる基礎を齎らすためには絶好の機会でもある。角川書店は、このような祖国の文化的危機にあたり、微力をも顧みず再建の礎石たるべき抱負と決意とをもって出発したが、ここに創立以来の念願を果すべく角川文庫を発刊する。これまで刊行されたあらゆる全集叢書文庫類の長所と短所とを検討し、古今東西の不朽の典籍を、良心的編集のもとに、廉価に、そして書架にふさわしい美本として、多くのひとびとに提供しようとする。しかし私たちは徒らに百科全書的な知識のジレッタントを作ることを目的とせず、あくまで祖国の文化に秩序と再建への道を示し、この文庫を角川書店の栄ある事業として、今後永久に継続発展せしめ、学芸と教養との殿堂として大成せんことを期したい。多くの読書子の愛情ある忠言と支持とによって、この希望と抱負とを完遂せしめられんことを願う。

一九四九年五月三日

〈ファンレターのあて先〉
〒102-8177 東京都千代田区富士見2-13-3
角川書店 書籍編集部気付
「細江ひろみ先生」係



LUNAR（ルナ） 2 エターナルブルー

レミーナただいま修業中！

重馬敬 原案

細江ひろみ 著

角川文庫

11034

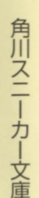


カバー　暁印刷

S
616-8
Y540

重馬敬 原案
細江ひろみ 著

LUNAR2 エターナルブルー
レミーナただいま修業中!







ISBN4-04-419504-8
C0193 ¥540E
定価：本体540円（税別）

天空に青き星を頂き、地に魔法あふれるルナ。この世界で魔法使いたちを統(す)べる魔法ギルドの名門オーサ家に、十三歳の当主が誕生した。その名はレミーナ。しかし、世は泰平(たいへい)の時代。人々が魔法に助けを求める危機的状況は皆無(かいむ)に等しく、魔法使いの存在意義も減るばかり。そんな状況を打破し、魔法使いの復権とオーサ家の経済的困窮(こんきゅう)を解決すべく、レミーナの悪戦苦闘の日々が始まった！　小説版『ルナ2』のオリジナルサイドストーリー、登場！